

覚書…津阪東陽とその交友(二)

—文化十一年・十二年の江戸—

二宮俊博

要旨 江戸期を代表する詩話の一つ『夜航詩話』等の著で知られる伊勢津藩の儒者、津阪東陽(宝暦七年「二七五七」～文政八年「一八二五」)は文化十一年八月から十二年五月まで江戸に祇役したが、当地では幼友達で桑名藩儒の平井澹所との再会があり、敬慕する赤穂義士や新井白石の墓を訪れる機会も得た。その一方、国元の妻が逝去するという悲報に見舞われたものの、大窪詩仏・大田南畝ら今を時めく詩人や文人との新たな出会いや交流が生まれた。本稿では、これらのことについて、具体的に東陽の詩を読み解きながら、そのありようを垣間見たものである。

キーワード 津阪東陽、文化十一年・十二年、江戸の詩人・

文人・儒者

はじめに

伊勢津藩の儒者津阪東陽は、文化十一年(一八一四)八月、侍講

として仕える第十代藩主藤堂高兌^{たかぎ}に扈從して出府し、翌十二年五月帰国した。58歳の東陽にとっては初めての江戸行きで、子息の達^{あきと}(字は拙脩、通称は貫之進)を伴っての客遊であった。わずか十か月足らずの短い滞在ではあったものの、いわゆる竹馬の友でかつて昌平黌に学び今は桑名藩儒となっている平井澹所と三十数年ぶりに再会し、かねてより敬慕する赤穂義士や新井白石の墓を展ずる一方、江戸詩壇の耆宿たる市河寛斎はもとより、その門下の大窪詩仏・菊池五山・柏木如亭ら詩界に新しい潮流を生み出して広く世に知られていた江湖詩社の同人と交流する機会を得、大田南畝や亀田鵬斎といった今をときめく名だたる文人や儒者とも知り合った。いずれもその当時の藝文の世界を代表する錚々たる面々である。さらには、藩命で出府していた菅茶山との思いがけない出会いもあった。しかしながら、その間、国元で留守をまもる妻が十月十六日に急逝したとの報に接する悲しみにも襲われた。江湖詩社の同人や南畝・鵬斎さらには茶山との交際が見られるのが概ね文化十二年になってからであるのは、おそらくそのためであつたらう。

かかる東陽の江戸での交友については、安永・天明期の京都でのそれと同様、すでに津坂治男氏の『津坂東陽伝』(桜楓社、昭和

六十三年）および『生誕250年 津坂東陽の生涯』（竹林館、平成十九年）に言及されているところではあるが、本稿では、前稿「覚書・津阪東陽とその交友（一）—安永・天明の京都—」に引き続き国立国会図書館蔵の写本『東陽先生詩文集』（以下、『東陽先生文集』を『文集』、『東陽先生詩鈔』を『詩鈔』と略記）を繙き、関係する詩文を読み解くことによって、より具体的に見て行くことにしたい。

なお、前稿と同じく本文中に取り上げた人物の略伝や生卒年については、近藤春雄『日本漢文学大事典』（明治書院、昭和六十年）、市古貞次ほか編『国書人名辞典』（岩波書店、平成三年／十一年刊）や長澤規矩也監修・長澤孝三編『改訂増補漢文学者総覧』（汲古書院、平成二十三年）を参照した。また各項目ごとに参考にした文献を挙げたが、汲古書院刊の『詩集日本漢詩』『詞華集日本漢詩』に収録されている関連する詩文集は、これを逐一明記しなかったものの、それらに附された富士川英郎・佐野正巳氏の解題も参考になった。それから、このたび一般には入手困難な詩誌「雅友」に掲載された今関天彭の江戸期の漢詩人についての評伝が揖斐高氏によってまとめられ、『江戸詩人評伝集1・2』（平凡社東洋文庫、平成二十七年）として刊行されたのも、ありがたいことであつた。語釈を施す上で、岩波書店刊の『江戸詩人選集』全十巻（平成二年／五年）や『江戸漢詩選』全五巻（平成七、八年）から教えられる点が多かつたことも、ここに附記しておく。

展墓の詩—赤穂義士・新井白石・梅若丸

かつて京都に遊学した際、伊藤仁斎（名は維貞、字は源佐。寛永四年「一六二七」／宝永二年「一七〇五」・東涯（名は長胤、字は源蔵。寛文十年「一六七〇」／元文元年「一七三六」）父子の墓を展じたこと

く、江戸に赴く機会を得た東陽が公務の間に訪ねたのは、敬慕する赤穂義士の眠る泉岳寺であり私淑する新井白石の墓であつた。赤穂義士

元禄十四年（一七〇二）三月十四日、江戸城は松の廊下で勅使饗応役の赤穂藩主浅野長矩が高家吉良義央への刃傷に及び、浅野は即日切腹、藩は断絶、吉良はお咎めなしの沙汰が下つた。翌十五年十二月十五日未明、大石良雄ら赤穂の旧臣による吉良邸討ち入り事件が起こり、その翌年二月、四十六士は切腹を命じられた。彼らの行為や処罰をめぐって、儒学者間で賛否の論が闘わされ、大きな問題となつたことは、よく知られていよう。大学頭・林鳳岡（名は信篤、字は直民。正保元年「一六四四」／享保十七年「一七三二」）は「復讐論」を著わして義挙としてこれを讃え、加賀藩儒室鳩巢（名は直清。万治元年「一六五八」／享保十九年「一七三四」）は『赤穂義人録』をまとめた。その一方で、佐藤直方（号は剛斎。慶安三年「一六五〇」／享保四年「一七一九」）や荻生徂徠（名は双松、字は茂卿。寛文六年「一六六六」／享保十三年「一七二八」・太宰春台（名は純、字は徳夫。寛文十年「一六八〇」／延享四年「一七四七」）のごとく批判的立場を執る儒者も多かつたのである。

このように儒者の間で争論があり評価が定まらなかつたせいか、赤穂事件について登場人物の名を変え足利の世に時代設定して脚色された浄瑠璃や歌舞伎の『仮名手本忠臣蔵』（浄瑠璃のそれは寛延元年「一七四八」に大坂竹本座で初演、歌舞伎は翌二年江戸の森田座・市村座・中村座で演じられた）が士庶の間ではやされていたのとはかなり事情が異なつて、漢詩において、詠史の作で赤穂義士を取り上げたり、泉岳寺に墓を展じたりした詩は、東陽の当時においてさほど多くの例をみないのではないかと思われる。

もっとも管見では、その嚆矢というべき詩として伊藤東涯に大石らの没後十二年目にあたる正徳五年（一七一五）作の「義士行」〔資

料篇①があるものの、その後は熊本藩儒の秋山玉山(名は定政、字は子羽。元禄十五年「二七〇二」)「宝曆十三年「二七六三」」に「泉岳寺」と題する五絶(宝曆四年「二七五四」刊『玉山先生集』巻五)があるほかは、めばしい作は見あたらないようである。

なお餘談ながら、玉山は「秋風 海樹を吹き、蕭瑟として波瀾を起こす。上に田横が墓有り、偏に月色をして寒からしむ」と詠じているが、そもそも赤穂義士を秦漢の際の斉王で劉邦に臣従することを恥じて自決した田横やその一党五百人に擬えること自体に牽強附会の気味があるのは避けられない(田横のことは、『史記』田儋列伝にみえる)。その点でいえば同じく田横の故事を用いても、後年、広瀬旭莊(名は謙、字は吉甫。文化四年「一八〇七」)「文久三年「一八六三」」が七絶「義人録を読む」詩(安政三年「一八五六」刊『梅墩詩鈔四篇』巻二)において四十七士を「身を殺して仁を成し」たと高く評価し、それに比べて「田横没後奇策無し、一死鴻毛五百人」と詠んでいるのは、無理のない巧みな故事の使い方であろう。

展墓や詠史の作が意外に少ないことに関連して、東陽より一世代あとになる大坂の篠崎小竹(名は金吾、字は承弼。天明元年「二七八二」)「嘉永四年「二八五一」」が「諸儒の義人評を読む」と題する七絶(嘉永元年「一八四八」刊『嘉永二十五家絶句』巻三)に、

大石精忠絶古今

大石の精忠 古今に絶す

豈思聚訟在儒林

豈に思はんや聚訟の儒林に在らんとは

輸他院本傳天下

輸す他の院本の天下に伝はり

感發人間忠義心

人間忠義の心を感じ発するに

○精忠 私心のない純粹な忠義(『宋史』岳飛伝)。○絶古今 古今に比べるものがない。○聚訟 多数が是非を言い争って定まらぬこと。○輸他 この二字で負ける意。(他)は、接尾辞。但し江戸明治期には「他の」に輸す」と訓ずる。○院本 金元時代、妓院で演じられた芝居の脚本(明・陶宗儀『輟耕録』巻二十五)。ここでは

浄瑠璃や歌舞伎をいう。○人間 世間。

と詠じ、広島藩儒で頼春水に学んだ坂井虎山(名は華、字は公実。寛政十年「二七九八」)「嘉永三年「一八五〇」」が、五七雑言古詩「四十七士を咏ず」(嘉永二年「一八四九」刊『撰西六家詩鈔』巻六)において、

若使無茲事、臣節何由立

もし茲の事無からしめば、臣節何に由りてか立たん

若常有此事、終將無王法

もし常に此の事有らば、終に將に王法無からんとす

王法不可廢、臣節不可已

王法は廢す可からず、臣節は已む可からず

茫茫天地古今間

茫茫たる天地古今の間

茲事獨許赤城士

茲の事独り許す赤城の士

○臣節 臣下としての忠節。六朝宋・鮑照「出自薊北門行」(『文選』巻二十八)に「時危うくして臣節を見る」と。○王法 国家の法律。

○茫茫 遠く果てしないさま。○赤城 赤穂を中国風にいう。

と論じているのが参考になる。ちなみに、虎山には「泉岳寺」と題する七絶もある。

なお、ついでながら、赤穂の旧大石邸に植えられている良雄遺愛の桜樹を詠じた詩をまとめたものに、安政六年(一八五九)刊の河原寛編・土井誓牙校『忠芬義芳詩卷』上下二冊があるが、そこには収載されているうち、早い時期に属するのは巖垣龍溪の「大石氏の故居を經」で、小竹や虎山の作もみえるものの、ほとんどは更にそれより下の年代の詩人の作で、江馬細香や大沼沈山・森春濤の詩も採録されている。

ところで、東陽について言えば、その立場は明瞭であった。いつ作られたか定かではないが、弱年の作とおぼしき詩に「人の赤穂義士の事を譚(談)ずるを聞くに、太宰徳夫の論を挙ぐ。余悉く之を折き、遂に茲の什を賦す」と題した五言古詩(『詩鈔』巻一)があ

る。太宰徳夫は、先に言及した太宰春台のことで、「赤穂四十六士論」がある。

豈敢讐公法、惆悵辭城行

豈に敢へて公法に讐せんや、惆悵して城を辞して行く

尅骨舊君怨、慷慨泣血盟

骨に尅む旧君の怨、慷慨して泣きて血盟す

義知泰山重、命從鴻毛輕

義は泰山の重きを知り、命は鴻毛の軽きに從ふ

酒色時晦跡、苦衷豈勝情

酒色 時に跡を晦ませ、苦衷 豈に情に勝へんや

拔萃精忠士、要東計初成

拔萃す精忠の士、要東 計初めて成る

衷甲乘深夜、劍鳴氣崢嶸

衷甲 深夜に乘じ、劍鳴 氣崢嶸たり

直拙狡兎窟、攻撃亂從橫

直ちに狡兎の窟を拙とし、攻撃亂るること從横たり

潜匿豈得遁、戮來祭墳塋

潜匿するも豈に通るを得んや、戮し來りて墳塋を祭る

惟是殺朝官、干戈動都城

惟だ是れ朝官を殺し、干戈 都城を動かす

嫌重先君過、俾官不失刑

先君の過を重ぬるを嫌ひ、官をして刑を失せしめず

束身自歸罪、從容伏劍聲

身を束ねて自ら罪に歸し、從容として劍聲に伏す

義烈輝青史、誰不仰忠貞

義烈は青史を輝かし、誰か忠貞を仰がざらん

儒夫堪興起、擊節肝膽傾

儒夫も興起するに堪へ、節を撃ちて肝膽傾く

噫嘻太宰子、白面一書生
筆端妄論事、偏見忒硜硜

噫嘻 太宰子、白面の一書生
筆端妄りに事を論じ、偏見忒だ硜硜たり

徒供大方笑、雄辯君莫驚

徒に大方の笑ひに供す、雄弁君驚くこと莫れ

*忒は、忒の誤字。

○公法 幕府の法。○惆悵 傷み悲しむさま。疊韻語。○辭城 赤穂城に別れを告げる。いわゆる城明け渡し。○尅骨 〈尅〉は、刻と音通。尅は尅の異体字。○泰山・鴻毛 前漢・司馬遷「任少卿に報ずる書」(『文選』卷四十一)に「固より一死有り、或いは太山より重く、或いは鴻毛より軽し」と。(太山)は、泰山に同じ。○酒色云々 大石良雄の京での遊興をいう。○拔萃 多くの中から抜き出す。○要東 約定。○衷甲 衣の下に鎖帷子を着込むこと。『左氏伝』襄公二十七年に見え、西晋・杜預の注に「甲衣中に在り」と。○崢嶸 凡常ならず旺盛なさま。疊韻語。北宋・蘇軾の七律「劉景文に贈らるるに和す」詩に「豪氣崢嶸老いて除せず」と。○狡兎窟 ウサギの巣穴。ここでは(巧妙に防衛した)吉良邸を指す。『戦国策』斉策四に「狡兎三窟有り、僅かに死を免るのみ」と。○朝官 ここでは、高家の意。○干戈 たて(干)とはこ(戈)。○都城 江戸を指す。○失刑 刑罰の適用が正しく行われないこと。『国語』晋語三に「刑を失し政を乱せば威あらず」とあり、韋昭の注に「罪有りて殺さざるを刑を失すと為す」と。○束身 自らを縛る。婦順の意を示す。○帰罪 自首する。○青史 歴史書。古代、竹簡(青竹を火であぶり、油抜きしてから札にしたもの)に文字を書いたことによる。○儒夫 いくじのない男。『孟子』万章下に「伯夷の風を聞く者は頑夫も廉に、懦夫も志を立つる有り」と。○擊節 節操を励ます。晋・袁宏「三国名臣序贊」(『文選』卷四十七)に「後世は節を撃ち、懦夫は氣を増す」と。○肝膽傾 まごころを傾ける。

○太宰子 春台のこと。○白面一書生 書物ばかり読んで世事に疎く見識の乏しい書生。『宋書』沈慶之伝に「陛下、今、国を伐たんと欲す。而るに白面の書生輩と之を謀る。事何ぞ濟すこと有らんや」と。東陽の『薈瓊録』巻上に「白面書生トハ、年少ナル学者ヲ称ス。然ドモ面美シキ義ニハアラス。ナマメキタル意ヲ含シテ言フナリ。故ニ慢侮ノ辞ニ用ユ。ナマ白ケテヌルケタル者ノフガヒナク柔儒ナル義ナリ」云々と。○輕輕 がちがちの石頭。『論語』子路篇に「言へば必ず信、行へば必ず果、輕輕然たる小人なる哉」と。○大方笑「大方」は、見識ある人。『莊子』秋水篇に「吾れ長く大方の家に笑はれん」と。

また彦根藩儒の野村東皐(名は公台、字は子賤。享保二年「二七一七」天明四年「二七八四」)が延享二年(一七四五)に著した「大石良雄復讐論」で否定的評価を下しているのに対して、これに反駁したこともあった。「野子賤の復讐論を論ず」(『文集』巻四)がそれである【資料編②】。

さらに『薈瓊録』巻下には「三宅尚斎江戸ニ下リシハ土州侯ニ招カレテ賓師タリケルガ、頭巾氣ノ僻論ヲ著シテ赤穂ノ義士ヲ毀リケレバ大ニ邸中ノ士ニ疏マレ、遂ニ用キラルミコト能ハズシテ已ミケリ。サレド晩節前非ヲ悟リテ、更ニ論ヲ著シテ左袒セリ。其文黙識録ニ載セタリ。佐藤直方ハ遂ニ改メズ、始終偏見ヲ執シテ赤穂ノ士ヲ不義トセリ。此翁ト太宰徳夫ハ名教ノ罪人ト謂フベシ」と記している。

されば江戸に出席する機会を得た東陽にとって、高輪の泉岳寺はどうしても訪れたい場所であったにちがいない。重陽節を過ぎてから、当寺に詣でている。五古「泉岳寺四十六士の墓」(『詩鈔』巻一)に云う、

忠憤徹骨髓、義烈泣鬼神

忠憤は骨髓に徹し、義烈は鬼神を泣かしむ

拔萃百鍊剛、四十有六人
慷慨俱瀝血、危機幾逡巡

拔萃す百鍊剛、四十有六人
慷慨 俱に血を瀝し、危機 幾たびか逡巡す

計定膽如斗、劍氣夜衝雲

計定まり 膽 斗の如く、劍氣

不畏強禦勢、鐵椎直排門

強禦の勢を畏れず、鉄椎 直ちに門を排す

狼狽第中士、嚴冬躡蹠寒
室空仇驚逃、餘燬尚在烟

狼狽す第中の士、嚴冬 躡蹠寒し
室空しく仇驚き逃ぐるも、餘燬尚ほ烟に在り

搜索出柴房、認得舊刀痕

搜索して柴房より出だすに、認め得たり旧刀痕

捧首往祭墓、束身自歸官

首を捧げて往きて墓を祭り、身を束ねて自ら官に歸す

從容齊就死、天慘白日昏

從容として齊しく死に就き、天慘として白日昏し

蕭寺墮淚碑、香火吊遺墳
英雄骨已朽、生氣凜如新

蕭寺の墮淚碑、香火 遺墳を弔ふ
英雄 骨已に朽つるも、生氣凜として新たなるが如し

○拔萃 多くの中から抜き出す。○百鍊剛 鍛え抜いたわざもの。

西晋・劉琨「重ねて盧諶に贈る」詩(『文選』巻二十五)に「何ぞ意はん百鍊剛、化して指に繞るの柔と為らんとは」と。○瀝血 血書、

血判して(仇を報ずる)誓を立てる。『呉越春秋』勾踐入臣外伝に「瀝

血の仇を滅せず、懷毒の怨みを絶たず」と。○逡巡 ためらう。晁

韻語。○膽如斗 『三国志』蜀志・姜維伝「維の妻子皆誅に伏す」

の裴松之の注に引く『世語』に「維死する時詔かるるに、膽は斗の

如く大なり」と。『蒙求』巻中の標題に「姜維膽斗」がある。ちな

みに、『薈瓊録』巻下に「大如斗ト云フハ斗量ホドノ丸サナリ。(中

略)形丸クシテ頗ル大ナル物ヲバ仰山ニ譬ヘテ言ヘルナル。古ノ斗量ハ圓ナリ。吾今ノ一升ホドニ当ル。タトヘバ此方ノ鄙諺ニ五升餅ノ大サナド云フガ如ク古者口実ノ詞ナリ」と。○彊禦 悪強く抵抗する者。『詩経』大雅「蒸民」に「矜寡を侮らず、彊禦を畏れず」と。

○排門 門をおしひらく。○第中 屋敷内。○蹶蹶(蹶)は、裸と同じ。『蹶』は、はだし。○柴房 炭置き小屋。○束身 自らを縛る。婦順の意を示す。○婦官(婦)は、自首する。○従容 落ち着いたさま。畳韻語。『近思録』卷十、政事類に「感慨して身を殺すことは易く、従容として義に就くことは難し」と。○天慘 空が暗くなる。三国魏・王粲「登樓の賦」(『文選』卷十一)に「天慘慘として色無し」と。○白日昏 盛唐・高適の五古「李員外が哥舒大夫の九曲を破るを賀するの作に同ず」詩に「鬼哭して黄埃暮れ、天愁ひて白日昏し」と。○蕭寺 仏寺。南朝梁の武帝(蕭衍)が仏教を好み、寺を創建した際、蕭字を大書して掲げさせたという。『書言故事』卷四、釈教類に、この語を挙げる。○墮淚碑 もとは、西晋時代、襄陽太守であつた羊祜の徳を慕つて建てられた碑で、これを望む者が皆涙を流したことから、杜預がかく名づけた(『晋書』羊祜伝)。○骨已朽 杜甫の五律「喬口に入る」詩に「賈生骨は已に朽ちたり、悽惻として長沙に近づく」と。○生氣 盛んな意氣、氣概。『世説新語』品藻篇に庾(道季)の言として「廉頗・蘭相如は、千載上の死人と雖も、凜凜として恒に生氣有り」と。

七絶でも「泉岳寺四十六士の墓」詩(『詩鈔』卷九)があり、擲身義不共讎存 身を擲つて義 讎と共に存せず 何必人人國士恩 何ぞ人人に國士の恩を必せん

荒冢纍纍墮淚碣 荒冢累累たり墮淚の碣
空埋四十六忠魂 空しく埋む四十六忠魂

○人人 すべての人々。○國士恩 李白の五古「宣城の趙太守悦に贈る」詩に「憶ふ南陽に在りし時、始めて承く國士の恩」と。○荒

冢(手入れされず)雜草の生い茂つた墓。○累累 相連なるさま。西晋・潘岳「懷旧の賦」(『文選』卷十六)に「墳壘壘として壘に接す」と。○累累 は、壘壘と同じ。○碣 いしぶみ。○忠魂 忠義のために死んだ者の魂。

といい、さらに五絶「泉岳寺に義士の墓を吊す」詩(『詩鈔』卷六)には、

忠誠埋不滅、生氣凜千年 忠誠 埋むるも滅せず、生氣 千年に凜たり

這箇尋常寺、大名天下傳 這箇の尋常の寺、大名 天下に伝ふ

○生氣 盛んな意氣、氣概。前掲「泉岳寺四十六士の墓」詩の語釈参照。○這箇 この。近世以来の俗語。○尋常 ありきたり。双声語と詠じる。

なお、ついでに言えば、この泉岳寺に後出の亀田鵬斎が「赤穂四十七義士の碑」を建立したのは、文政三年(二八二〇)五月十四日のことである。またこれより先、鵬斎は文化十二年に刊行された鴻濛陳人重訳『海外奇談』、これは「仮名手本忠臣蔵」を長崎の唐通詞周文次右衛門が翻訳した『忠臣蔵演義』をもとに訳し直されたものであるが、それに序を附している。

また討ち入りに加わつたものの、藝州広島島の浅野本家に使用することとなり(後掲「逸事碑」)、切腹を免れた寺坂吉衛門信行は、後年旗本の山内氏に仕え、延享四年(一七四七)83歳で歿し、かつて寄寓したことのある麻布の曹溪寺に葬られた。伊藤仁斎の四男で久留米藩儒の竹里(名は長準、字は平蔵。元禄五年「二六九二」宝暦六年「一七五六」)に「寺坂吉衛門墓碣銘」があり、竹里の門人内田鵬洲(名は叔、字は叔明。元文元年「一七三六」寛政八年「一七九六」)にその「逸事碑」があるが(いずれも五弓雪窓『事実文編』卷三十一に収録)、東陽はこの吉衛門が眠る寺にも足を運んでいる。七絶「寺

阪信行の墓」(『詩鈔』卷九)に云う、

大節相將義士林

大節相將ふ義士の林

廁來賤卒切忠心

廁へ来る賤卒 忠心切なり

人生一飯猶須報

人生 一飯すら猶ほ須らく報ゆべし

何問主恩深不深

何ぞ問はん主恩の深きや深からずやを

○大節『論語』泰伯篇に「大節に臨んで奪ふ可からざるなり」と。

○賤卒 足輕の身分であることをいう。○一飯 一度の食事。『史記』

范雎蔡沢列伝に「范雎は」一飯の徳にも必ず償ひ、睚眦の怨にも必ず報ゆ」と。

題下の注に「麻阜の曹溪寺に在り。碑を読んで感じて作る。余嘗て論ずらく豫讓は義士に非ず、徒に名高きを為す者なり。且つ市道(商売人のやりかた)を以て其の事ふる所に待す、悪んぞ其の国士為るに在らんや。賤丈夫(卑劣な男)と謂ふ可き耳と。若し夫れをして信行の美譚を聞かしむれば、其れ必ず愧死せん矣」と。

豫讓のことは、司馬遷の『史記』刺客列伝に見える。春秋末期、晋の人で、もと范氏や中行氏に仕えたが認められず、智伯に仕えて国士として遇された。智伯が趙襄子を攻めて失敗して殺され、彼を怨むことはなほだしい趙襄子によってその頭骸骨は漆で塗られ飲器にされた。豫讓は趙襄子の命をねらったものの、果たせず、最初は義士として放免されたが、体に漆を塗り炭を吞んで姿や声を変え、橋の下で待ち伏せして失敗した。さすがに二度めは趙襄子も見逃すわけにはゆかなかったが、死を覚悟した豫讓の、趙襄子の上衣をもき届けたという。人口に膾炙する「士は己を知る者の為に死し、女は己を説ぶ者の為に容づくる」という言葉は、豫讓が智伯のために報復を誓ったときのものである。

ちなみに、この豫讓については、盛唐・李瀚『蒙求』の標題に「豫讓吞炭」とみえ、晩唐・胡曾が七絶形式で歴史の舞台となった地を

詠じた詠史詩の一首に「豫讓橋」(『胡曾詩抄』)があり、南宋・朱熹の『小学』内篇・稽古第四・明倫にもその故事が採られているのを始めとして、後世の評価はおおむね高く、宋明の評論は明の凌稚隆輯校・李光縉増補『史記評林』にその一端を見ることができ、東陽は豫讓の行為を主家の恩の軽重を比較計量して恩返しをはかるもので、商賈に類するものとみなし厳しい批判の目を向けていた。

なお、東陽の自注に見える「市道」は、商売人のやり方。『史記』廉頗藺相如伝に見える語。戦国趙の名將、廉頗のもとにいた食客が將軍を罷免されると立ち去り、再び將軍に重用されると戻ってきたのに腹を立てた廉頗に対して、食客の一人がいった言葉に「夫れ天下、市道を以て交はる。君に勢ひ有る、我則ち君に従ふ。君勢ひ無ければ則ち去る。此れ固と其の理なり。何の怨むこと有らんや」と。また「賤丈夫」は、利益を壟断しようとする卑劣な男(『孟子』公孫丑下)の意。

こうしたドライな発想は主従関係に利害打算・損得勘定を持ち込むものとして東陽はこれを憎み、豫讓の行為のなかに、それと同質の臭気を鋭敏に感じ取ったのであろう。『詩鈔』卷九に「豫讓は義士に非ず、余其の輕薄を憎み、文を著し之を論ず。仍ほ繋ぐに詩を以てす二首」と題する七絶がある。この詩は、『夜航余話』卷下の「年ふるき狐狸の化たるは、死しても容易に本態をあらはさずとなん。かの晋の豫讓がごときは、天下後世を誑らし惑はす、振古の大妖物なりけり。其心術のさもしくはしたなき、まことに輕薄不義の士なり。始は利祿に節をうしなひ、終は名聞に身をもがき、大に虚名を盗みて、千載を欺き得たり」云々と非難した箇所にも附されており、新日本古典文学大系『日本詩史 五山堂詩話』(岩波書店、平成三年)に収められている揖斐高氏の『夜航余話』校注を参照されたい。

なお、豫讓については後出の大窪詩仏に天保七年(一八三六) 70

歳の作たる七古「大石良雄の肖像に題す」詩（天保九年刊『詩聖堂詩集三編』卷十）があり、「豫譲の為す所真に兎戯、猶ほ且つ之を青史に載す」と述べていることを附記しておく。

※赤穂四十七士に関する議論については、鍋田昂山『赤穂義人纂書』（日本シエル出版、昭和五十一年）および石井紫郎校注『日本思想大系27近世武家思想』（岩波書店、昭和四十九年）参照。その思想的意味に関しては田原嗣郎『赤穂四十六士論―幕藩制の精神構造』（吉川弘文館、昭和五十三年）に詳しい。さらに『仮名手本忠臣蔵』については、服部幸雄編『仮名手本忠臣蔵を読む』（吉川弘文館、平成二十年）参照。また『海外奇談』については、杉村英治『海外奇談―漢訳仮名手本忠臣蔵』（亀田鵬斎の世界）所収。三樹書房、昭和六十年）および奥村佳代子『海外奇談』の語句の来歴と翻訳者』（関西大学東西学術研究所紀要）48、平成二十六年）参照。

新井白石（明暦三年「一六五七」～享保十年「一七二五」）

名は璵あるいは君美、字は済美。白石は、その号。31歳のとき木下順庵（元和七年「一六二二」～元禄十一年「一六九八」）の推挙で甲府城主徳川綱豊（後の六代將軍家宣）に仕え、53歳にして幕府に登用され、將軍家宣のもとで数々の建策を行った。正徳六年（享保元年）吉宗が八代將軍に襲位すると罷免され、第一線から退いた。

題下に「浅草里の本願寺中に在り」と自注を附した五律「白石先生の墓に奠す」詩（『詩鈔』卷三）がある。当時、白石の墓は東本願寺派の浅草報恩寺境内に移転していた同派の高徳寺にあった。

經世斯文志、雄才孰敢當

經世 斯文の志、雄才 孰か敢へて当らん

平生憂國夢、毎夜告天香

平生 国を憂ふる夢、毎夜 天に告ぐる香

詩律風霜氣、功名日月光

詩律は風霜の氣、功名は日月の光

書空暮年恨、奠罷且彷徨 空に書す暮年の恨、奠し罷りて且し彷徨す

し彷徨す

○經世 世を治める。○斯文 この学問の意で（『論語』子罕篇）、儒学のこと。○雄才 傑出した才能。○孰敢當 誰も匹敵する者がいない。晩唐・周曇「詠史詩」前漢門・薛公に「黥布兵を称す孰か敢へて当らん」と。○告天香 香を焚いて天帝に報告する。『後漢書』光武帝紀上に「燔燎して天に告ぐ」とあり、初唐・李賢の注に「天高くして達す可からず。故に柴を燔して以て之を祭る、高煙上に通ずるを庶ふなり」と。○風霜氣 詩律が嚴格であることをいう。『西京雜記』卷上の「淮南王安、鴻烈二十篇を著はす。（中略）自ら云ふ、字句風霜を挾む」とから出た表現。宋・惠洪の七古「南台に遊ぶに和す」詩（『石門文字禪』卷七）に「曾侯逸韻有り、詩律風霜を挾む」と。○日月光 輝かしいことをいう。○書空 東晋の殷浩が中軍將軍・楊州刺史を罷免されて信安（浙江省）に蟄居したとき、「終日恒に空に書いて字を作す」日がな一日、虚空に何やら字を書いていった。それは「咄咄怪事」（ちえつちえつ、けつたいな）という四字であったという（『世說新語』黜免篇）。○奠（墓前に）酒食を供えて祭る。○暮年 老年。○彷徨（その場を立ち去りがたく）あたりを行ったり来たりするさま。疊韻語。

さらに五絶「白石先生の墓に謁す」と題する作（『詩鈔』卷六）には、白石を「吾が夫子」と称して私淑の意を示し、次のように詠じている。

勳業吾夫子、經世煥文章

勳業 吾が夫子、經世 文章煥たり

蕭寺拜遺碣、為拈一瓣香

蕭寺 遺碣を拝す、為に拈む一弁香

○煥文章（煥）は、輝く。晩唐・杜牧の五排「華清宮三十韻」詩（『樊川文集』卷二）に「星斗文章煥たり」と。○蕭寺 仏寺。○遺碣

墓石。(碣)は、いしぶみ。○拈一弁香 一くゆりの香をつまんで焚く。敬慕の念を示す。北宋・米芾『画史』唐画に「蘇軾子瞻墨竹を作る。(中略)運思清拔、文同与可に出ず、自ら謂ふならく文の与に一弁香を拈む」と。

白石については、その著「折たく柴の記」を読んで、その感想を詠じた五律「白石先生の焼柴志を読む」詩(『詩鈔』巻三)もある。これは、文化四年(一八〇七)末に津に召還されて以降の作であろう。

忠賢王佐業、明主特嚴師 忠賢 王佐の業、明主 特に師を

尚徳殊恩重、崇文庶績熙

厳にす

徳を尚んで殊恩重く、文を崇んで

庶績熙まれり

風雲千歳日、禮樂百年時

風雲 千歳の日、礼楽 百年の時

柴火咽烟夕、哭來神鬼悲

柴火 烟に咽ぶ夕、哭し来りて神

鬼悲しむ

○王佐業 ここでは將軍を補佐する職務。○嚴師 師を尊敬する。

『礼記』学記篇に「凡そ学の道は、師を嚴にするを難しと為す」とあり、後漢・鄭玄の注に「嚴は、尊敬なり」と。○殊恩 (將軍からの) 格別の御恩。○庶績熙 もろもろの功績が広まる。『尚書』堯典に「允に百工を釐めて、庶績咸熙まれり」と。その偽孔伝に「熙は、広なり」と。南宋・蔡沈『書経集伝』も同じ。但し、清朝の学者は興るの意に解する(江声『尚書集注音疏』、段玉裁『古文尚書撰異』)。

○風雲 風雲際会の意。君臣の出会いをいう。○千歳日 千載一遇の意。杜牧『華清宮三十韻』詩の「一千年の際会」も同意。『淮南子』泰族訓に「夫れ治を欲するの主は世に出でず、而して与に治を興すの臣は万に一あらず。万に一あるを以て世に出でざるものを求む、此れ千歳に一会せざる所以なり」と。○礼楽 社会秩序を安寧にする礼と人心を和やかにする楽と。それによって天下が治まることをいう。例えば『孝経』広要道章に「風を移し俗を易ふる

は楽より善きは莫し、上を安んじ民を治むるは礼より善きは莫し」と。○百年 『漢書』叔孫通伝に「礼楽の由つて起こる所は、百年徳を積みて而して後に興る可きなり」と。六代將軍家宜の治世は、江戸に幕府が開かれてからほぼ百年後。

第七句は、白石の書名の由来となつた後鳥羽院の「思ひいづるをりたく柴のゆうけぶりむせぶもうれしわすれがたみに」(『新古今和歌集』巻八、哀傷歌)をふまえた表現。

東陽が白石を高く評価したのは、その学問が経世の学であり数々の施策を企画立案したきわめて優秀な実務家であるとともに卓越した詩文の名手であつたのはむろんのことながら、浪人時代に養子縁組を断り医業への転身を拒んだという彼の経歴が己れのそれと類似しているとみて何がしかの親近感を覚えたことも、あるいはその背景にあつたかもしれない。そして幕政と藩政とスケールこそ違へど、そうした白石の後ろ姿を一つの目標として名君の誉れが高い藩主藤堂高兎に献可賛否、時には進言し時には諫言して、その期待に応えていったのではあるまいか。

※新井白石に関して、その生涯と事績とを平明に紹介したのが宮崎道生『人物叢書 新井白石』(吉川弘文館、平成元年)。その詩業については、今関天彭「詩人としての新井白石(上)(下)」(『雅友』第二十五・六号、昭和三十年十一月)。『江戸詩人評伝1』に収録)、一海知義・池澤一郎『江戸漢詩選2 儒者』(岩波書店、一九九六年)の解説参照。一海・池澤両氏には『日本漢詩人選集5 新井白石』(研文出版、二〇〇一年)もある。さらに、紫陽会(石川忠久・市川桃子・簗満江・三上英司・森岡ゆかり・高芝麻子・遠藤星希・大戸温子)編著にかかる『新井白石「陶情詩集」の研究』(汲古書院、平成二十四年)がある。

梅若丸

なお、展墓の詩と言え、謡曲「隅田川」で知られる梅若丸の墓を訪ねた作もあるので、ついでに挙げておく。『詩鈔』卷六の五絶「梅児の墓」と題する詩がそれで、題下に「隅田の木母寺に在り」と注している。これは文化十二年の作。

一抔埋玉處、翠柳冢頭低
一抔埋玉の処、翠柳 冢頭に低

遺恨春風暮、枝枝自向西
遺恨 春風の暮れ、枝枝自ら西に

向ふ

○一抔 一抔土の意で、墳墓をいう。抔は、一すくい。『書言故事』

卷五、墳墓の条に見える。○埋玉 埋葬。『世説新語』傷逝篇に「庾文康（庾亮）亡じ、何揚州（何充）葬に臨んで云ふ、玉樹を埋めて土中に箸くれば、人情をして已已たらしむ」と。『書言故事』卷五、祭奠類に、この語を挙げ、「挽詩に葬を言ひて埋玉と曰ふ」とし、『晋書』庾亮伝を引く。○向西 どの枝も梅若丸の故郷である京の方向に向う。

この詩に関連して、七絶「隅田川観花二首」（『詩鈔』卷九）の題下の自注に「味爽（朝まだきころ）両国橋従り舟を泛べて行く、三匠祠の前を過ぐる比、旭日乃ち（ようやく）升れり矣。是に於いて舟を捨てて隄に上がり、行くゆく將に木母寺に抵らんとす。列樹路を夾み、鬧花（満開の桜）天を蔽ひ、雲洞中に入るが若し。破曉（夜が明けて）往きて観る者は、亦た紅塵を避くれればなり」と。〈三匠祠〉は、三囲神社のこと。

斎藤月岑の天保五、七年刊『江戸名所図会』卷七によれば、塚のまわりに柳が植えられ、三月十五日には梅若丸を祀る大念仏の法会が行われ、貴賤を問わず多くの人々が参詣したという。同じく月岑の天保九年刊『東都歳事記』には「このところ養花天とて大かた曇り、又は雨降る事あり。この日（三月十五日）雨ふるを、梅若が涙の雨といひならはせり」とある。それゆえ、後出の大田南畝も「墨

水年々三月の望、梅児の雨泣草蒼々たり。今春日々晴景多し、羅綺花の如く野塘を歩す」（文化十二年作の七絶「三月望、家を携へて重ねて墨水に遊び、花を見る二首」其二。『杏園詩集』卷五）と詠じたのである。

ちなみに、春雨そぼふる木母寺の情景を詠じた詩として名高いのが、柏木如亭の次に挙げる七絶である。文化二年（一八〇五）の作と推定されており、後掲の掛斐高『遊人の抒情』に詳しい評釈が載せられている。

隔柳香羅雜香過 柳を隔つる香羅 雜香として過ぐ

醒人來哭醉人歌 醒人は來り哭し醉人は歌ふ

黃昏一片靡蕪雨 黃昏一片靡蕪の雨

偏傍王孫墓上多 偏に王孫墓上に傍ひて多し

○香羅 香しい薄絹、それをまとった女性。○雜香 人が多く、ごったがえすさま。雜遷と同じ。覺韻語。盛唐・杜甫の五古「麗人行」（『古文真宝』前集）に「簫管哀吟 鬼神を感じしめ、実に賓從雜遷す」と。

○靡蕪 香草の名。おんななづら。双声語。晩唐・孟遲の七絶「閑情詩」（『三体詩』卷一）に「靡蕪も亦た是れ王孫草、春香を送りて客衣に入るる莫かれ」と。○王孫 貴公子。ここでは、梅若丸を指す。前漢・劉安「招隱士」（『楚辭』卷十二、『文選』卷三十三）に「王孫遊びて帰らず、春草生じて萋萋たり」と。

なお、この「木母寺」詩全体について、掛斐氏に晩唐・韋莊の七絶「春愁」詩（『聯珠詩格』卷六）の「自ら春愁有りて正に魂を斷つ、堪へず芳草の王孫を思はしむるに。落花寂寂たり黃昏の雨、深院人無くして独り門に倚る」が下に敷かれているかも知れないとの指摘がある。されば菊池五山が文化五年（一八〇八）刊の『五山堂詩話』卷二において「絶だ晩唐の名家に類す」と評しているのは、おそらく孟遲の「閑情」情や韋莊の「春愁」が念頭にあってのことだと思われる。

旧友との再会―平井澹所

平井澹所（宝暦十二年「二七六二」文政三年「二八二〇」）

名は業。字は可大。通称は、直蔵。澹所と号した。三村竹清「平井澹所」によれば、初め名を篤、字を君敬としていたのを、後出の平沢旭山からの勧めで『易経』繫辞上伝の「久しかる可きは則ち賢人の徳、大なる可きは則ち賢人の業」というのに拠って改めたこととされ、号についても旭山から与えられたという。東陽より五歳下。伊勢菰野の人で、20の歳（一説では19）に江戸に出、昌平黌に学んだ。寛政五年（一七九三）桑名侯に仕え、藩校の督学となった。

『詩鈔』巻九に次のように題した七絶二首がある。文化十一年（一八一四）秋、江戸に着いて間もなくの作であろう。

「余與平井可大同郡通家、年紀亦相若。一別垂四十年、邂逅相遇、恍若夢幻。俯仰今昔、悲喜交集。弱冠前、可大遊江戸、余赴京師。臨別相戒曰、業成簪仕、不肖休賣、非食祿數百石、未可以為士也。可大為桑名侯所聘、領二百石、為國校督學、班從大夫之後、余則薄官蹉跎、微祿蝸濡、碌碌不能有所為。小詩自嘲、漫發一笑。二首」
（余、平井可大と同郡の通家、年紀も亦た相若く。一別四十年に垂んとし、邂逅相遇ふ。恍として夢幻の若し。今昔を俯仰し、悲喜交も集まる。弱冠前、可大は江戸に遊び、余は京師に赴く。別れに臨んで相戒めて曰く、業成り簪仕するに、肯へて売るを休めず、食祿數百石に非ざれば、未だ以て士と為す可からざるなり。可大は桑名侯の聘する所と為り、二百石を領し、国校の督学と為り、班は大夫の後に従ふ。余は則ち薄官蹉跎し、微祿蝸濡、碌碌として為す所有る能はず。小詩自嘲し、漫に一笑を發す、二首）

○通家 父祖の代から親しく交際している家。『書言故事』巻二、

親戚類に「旧親を叙して通家の好有りと曰ふ」と。○邂逅相遇 期せずして出会う。『詩経』鄭風「野有蔓草」に「邂逅して相遇ふ、我が願ひに適ふ」と。○怳 驚き見るさま。○悲喜交集（交）は、一齊に、一時にの意。中唐・元稹「鶯鶯伝」に「兒女の情、悲喜交も集まる」と。○弱冠 二十歳。『礼記』曲礼の「二十を弱と曰ひ、冠す」から出た語。○簪仕 初めて仕官する。古代その吉凶を占つてから仕官したことからいう（『左氏伝』閔公元年）。『書言故事』巻八、仕進類に「初めて官と作るを簪仕と曰ふ」と。○薄官 地位の低い官吏。薄宦と同じ。○蹉跎 もたもたする。晝韻語。初唐・張九齡の五絶「鏡に照らして白髪を見る」詩（『唐詩選』巻六）に「宿昔青雲の志、蹉跎す白髪之年」と。○蝸濡 蝸牛が粘液でその身を保護するように僅かな俸祿で何とか生活する。（蝸濡）の語、用例未見。○碌碌 凡庸なさま。

妙年意氣奮相看 妙年の意氣奮つて相看る

壯志安知世路難 壯志 安くんぞ知らん世路の難きを

今日逢君慙媿殺 今日君に逢ひて慙媿殺す

徒將薄祿老儒酸 徒に薄祿を將て儒酸に老ゆ

○妙年 若い時分。○壯志 さかんな心意氣。○世路難 人生行路の難儀さ。中唐・白居易の五古「初めて太行の路に入る詩」（『白氏文集』巻一）に「若し世路の難きに比ぶれば、猶自掌よりも平らかなり」と。○殺 動詞の後に置いて、程度の甚だしいことを示す。

但し、《慙媿殺》というのは、みかけない表現。○儒酸 みすばらしい貧乏学者。北宋・周敦頤の七律「任所より郷閭の故旧に寄す」（『周濂溪集』巻二）詩に「老子生来骨性寒たり、宦情改めず旧儒酸」と。

其二

功業蹉跎歲月徂 功業蹉跎し歲月徂く

自憐窮瘁老頭顱 自ら憐れむ窮瘁の老頭顱

若非聲氣猶依舊 若し声氣猶ほ旧に依るに非ざれば

相遇安能識故吾 相遇ふも安んぞ能く故き吾れを識らん

○歲月徂 前漢・韋孟「諷諫」詩(『文選』卷十九)に「歲月其れ徂き、年其れ者に逮ぶ」と。○窮瘁 困窮憔悴。晋葛洪「抱朴子」審拳に「夫れ唯だ價を待つ、故に頓に窮瘁に淪む」と。○老頭顱 白髪頭のおいばれ。○依旧 昔のまま。○故吾 昔の自分。『莊子』田子方篇に見える。

東陽が出府するについては、おそらく事前に江戸の澹所に報せていたはずで、詩題のなかに「邂逅相遇」というのは、ややそぐわない表現のようにも思えるが、一別以來四十年近くになるうという今、図らずも君と再会することになったというのであろう。

東陽と澹所とは少年時代の勉強仲間・遊び友達で、東陽21歳の安永六年(一七〇七)十月十二日には、澹所を含む早川文卿・横山士煥・久保希卿・森子紀といった八人で湯の山温泉のある菰野の山々に遊んだこともあった(『文集』卷三、「菰野山に遊ぶ記」)。この頃の東陽は京で学ぶ一方、郷里にもおりにつけ帰っていたのである。

在京時に横山士煥に宛てた書簡(『文集』卷十、「横山士煥に答ふ」)は、呉音・漢音の由来についての質問に答えるのを主たる内容とするが、その中で東陽は塾の講師稼業に忙殺されていることを訴え、また九月下旬に書かれた士煥の手紙を携えて上京した「井生」が十日あまり病床に伏せていたものの、今では全快し「学に勤めること孜々たり。夙夜解るに匪ず。時に二三子に従つて遊観すと雖も、未だ嘗て足は花街柳巷に涉らず、志気堅厚、業の成る保す可きなり」と、その近況を報せている。この「井生」とは、どうやら澹所のことらしい。三村竹清「平井澹所」によれば、永田俊平(号は観鷺)に就いて書を学んだという。永田観鷺と東陽との関わりは、前稿で安永・天明期の京都での交友を論じた際、これに触れておいた。なお、これも「平井澹所」に見えるが、六歳にして菰野藩儒で医を兼ねた南川金溪(名は維遷、字は士長または文璞。享保十七年

「一七三二」(天明元年「一七八一」)の門に入つて句読を受けたとのこと。金溪は代々農を業とする家に生まれ、苦学力行して一家を成した人である。ちなみに、東陽は先の横山士煥宛書簡の末尾に転居した旨を知らせ、「里名は別に南文学に報ずる書に具す」と述べている。この「南文学」は、南川金溪を指す。金溪は安永八、九年(一七七九・八〇)藩命により江戸に祇役したが、帰国後は、体調を崩し病の床に臥すことが多かったもよう、天明元年(一七八一)九月十四日に50歳で歿した。その当時京にいた東陽には南溪の病氣を氣遣う「南川士長に復す」書(『文集』卷十)を寄せ、またその死を悼んだ作に七律「南川士長を哭す」詩(『詩鈔』卷四)がある。題下に「菰野文学」と注した哭詩は、次のごとくである。

儒林德望國家光 儒林の德望 國家の光

幾歲交深翰墨場 幾歲交はりは深し翰墨の場

星隕金天偏慘愴 星隕ち金天偏に慘愴たり

霜飛玉樹忽凋傷 霜飛ち玉樹忽ち凋傷す

老來猶務三餘業 老來猶ほ務む三餘の業

身後長流百世芳 身後長く流る百世の芳

愁絶遊魂招不返 愁絶す遊魂招けども返らざるを

孤琴誰復辨峨洋 孤琴誰か復た峨洋を弁ぜん

○儒林德望 儒者仲間から德行を高く評価され声望があること。○

國家光 菰野藩の輝かしい存在。○翰墨場 詩文の集まり。詩壇。

杜甫の五古「壯遊」詩に「往昔十四五、出遊す翰墨の場」と。(翰

は、筆。○星隕 優れた人物の死を譬える。○金天 秋空をいう。

五行説で、金は秋にあたる。○慘愴 暗澹たるさま。疊韻語。○霜

飛 西晋張協「七命」其四(『文選』卷三十五)に秋ともなれば「天

凝り地閉ぢ、風厲しく霜飛ぶ」と。○玉樹 美しい樹木。金溪を譬

える。○凋傷 しほみ枯れる。杜甫の七律「秋興八首」其一(『唐

詩選』卷五)に「玉露凋傷す楓樹の林」と。○三餘業 読書、勉強

のこと。三国魏の董遇が勉強するなら三餘の時を以てすべきで、冬は歳の餘、夜は日の餘、雨降り時は時の餘だと言った故事による。『蒙求』巻下の標題に「董遇三餘」がある。○身後 没後。○流百世芳末代まで誉れをのこす。南宋・劉克莊の七律「太守宋監丞、三先生の祠を新にし二劉の遺文を刊す、二詩を以て実を紀す」其一（『後村先生大全集』巻三十二）に「名節能く流す百世の芳」と。○愁絶 ひどくうれえる。〈絶〉は、強調の助字。○遊魂 さまよう魂。○招不返 明・皇甫汸の五律「吳純叔挽詞二首」其一（『皇甫司勳集』巻二十二）に「楚魂招けども返らず、誰と与と詞場を擅にせん」と。

○峨洋 山が高々と聳え水が広々と流れる意で、伯牙が琴を弾くのに高山をイメージすると鍾子期は「峩峩として泰山のごとし」と称え、流水だと「洋洋として江河のごとし」と讃えたという故事（『列子』湯問篇）から出た語。結句は、あなたが亡くなって、我が爪弾く琴の音（詩文の趣旨）を理解してくださる方がいない、という意。

ところで三村氏によれば、平井澹所の江戸に遊学については、金溪から関松窓（享保十二年「一二七」）／享和元年「一八〇一」への紹介があったという。松窓は平沢旭山（享保十八年「二七三三」）／寛政三年「一七九一」とともに金溪が江戸祇役中に交友を結んだ一人である。そこで思い合わされるのは、東陽の京都遊学である。当時、京の詩壇の中心にいた江村北海は、明和八年（一七七一）刊『日本詩史』巻五で伊勢の詩人を取り上げ、金溪について「又た南川文伯有り、詩を以て著称す。嘗て京師に來たり、僧金龍に因りて余に見ゆ」と述べ、金龍道人と号した釈敬雄（正徳二年「二七一二」）／天明二年（一七八二）を介して知り合ったとしている（ちなみに、安永二年刊「二七七三」の『日本詩選』には金溪の詩を三首、同六年刊の『日本詩選続編』には五首を採録）。また金溪が「元和以来の巨儒碩匠の言語事跡を摭摭（収集）し」た『閑散餘録』（天明二年刊）には、龍公美（草廬）の安永元年（一七七二）作の序について同二年附けの

序を寄せており、天明五年（一七八五）には彼の墓碑「金溪南川先生之碑」を撰している。以上のことからすれば、東陽が京都で北海に刺を通ずるに際にも、やはりこの金溪の添状があったのではないか。さらには東陽が伊藤仁斎・東涯父子の古義学に興味関心を抱くきっかけとなったのも金溪からの教示によるところが大きかったのではあるまいか。金溪は伊藤東涯に書問での教えを乞うた菰野藩儒の龍崎致斎（名は泰守、字は君甫。元禄二年「一六八九」）／宝暦十二年「二七六二」に学んだ人でもあったからである。東涯には「致斎記」（『紹述先生文集』巻六）がある。

その当否はともかく、平井澹所との再会を詠じた先の詩題中に、かつて二人が将来の夢を語り合って「学業成つていざ仕官というときは、積極的に売り込もう。数百石の禄を食む身分にならなければ、士とは言えないからな」と互いに戒めたことあり、善賈を求めて「之を沽らんかな、之を沽らんかな」（『論語』子罕篇）と積極的に自分売り込み、数百石の身分になるのでなければ、仕官する意味がないとするのは、東陽が弱年より抱いていた強い信念であり、官途に就く上での一つの目標であったことがわかる。かつて京に遊学していたおり、その経済的苦境に喘いでいるのを見かねて、或る人から入り婿になるよう勧められたのを断ったことがあったが、その際に仕官して禄を食むと、「自ら位分（身分相応）の体（体裁）有り、出でては則ち士の事を行ひ、入りては則ち臧獲（下男・下女）を畜ひ、書劍購求の需、凡百の冗費、唯だ禄のみ是れ仰ぐ。二百石已上に非ざれば、抗顔（厳めしい顔つき）して士と称するを得ず。徒に薄俸もて口に餉す、何を以て士と為さんや」（『文集』巻十、「松平丈人に報ず」と述べて、具体的に二百石以上という数字を挙げている）。

されば、すでに江戸で二百石取りの桑名藩儒となつて遠い少年の日に抱いた志望を実現している澹所に対して、我が身を顧みて慙愧の念を抱き、自嘲気味に「儒酸に老ゆ」と述べたのは、偽らざる心

情であつたのである。かかる東陽が実際に二百石の身分となつたのは、文政二年（一八一九）に藩侯の侍読の身で藩校有造館の督学に任じられた時のことで、齢63になつていた（『文集』巻五、『寿墳誌銘』）。

江戸での作には、さらに五律「平井可大と旧を語る」（『詩鈔』巻三）および七律「平井可大に和す」詩（『詩鈔』巻五）があり、前者は、

雄飛丈夫志、狂簡漫相爭

雄飛するは丈夫の志、狂簡漫に相爭ふ

豈用蠅頭字、虚傳驥尾名

豈に蠅頭の字を用て、虚しく驥尾の名を伝へんや

為歡如昨日、話舊似前生

歡を為すこと昨日の如く、旧を話ること前生に似たり

寥落倦游客、衰年坐愴情

寥落たり倦游の客、衰年坐ろに情を愴ましむ

○雄飛 世に出て大いに活躍する。『後漢書』趙温伝に「大丈夫生まれて当に雄飛すべし、安んぞ能く雌伏せんや」と。○狂簡 むやみに大言壮語し向う見ずに突つ走る。『論語』公冶長篇に「吾が党の小子は狂簡、斐然として章を成す。之を裁つ所以を知らざるなり」と。○蠅頭字 ハエの頭のような極めて小さな文字。訓詁注釈の学をいうのであらう。○驥尾 駿馬の尾。『後漢書』公孫述伝に「蒼蠅の飛ぶ、数歩に過ぎず、驥尾に附託して以て群を絶するを得」と。

『書言故事』巻四、送行類に「附驥」を挙げ「人行を参逐するを驥に附すと云ふ」とし、公孫述伝を引く。○前生 前世。過去世。○寥落 さびしくひっそりとしたさま。双声語。○倦游 他郷での役人暮らしに倦む。○衰年 老年。杜甫の五律「舟を泛べて魏倉曹の京に還るを送る……」詩に「若し岑と范とに逢はば、為に報ぜよ各々衰年なり」と。○愴情 心を傷める。

と詠じられ、後者は津藩邸内の宿所―和泉橋通御徒町の上屋敷か下

谷二長者町の中屋敷かであらう―に身を寄せている東陽のもとへ滯所が訪ねて来たらしく、庚申の夜に語り明かしたことをいう。おそらくは十月三日のことであつたと思われる。

小来同學故郷人 小来の同学 故郷の人

客裡交歡一段親 客裏の交歡 一段と親しむ

白首相驚詢甲子 白首 相驚きて甲子を詢ひ

青燈偶坐守庚申 青燈 偶坐して庚申を守る

樽中有酒諳君量 樽中に酒有り 君が量を諳んず

厨下無睽諒我貧 厨下に睽無く 我が貧を諒とせよ

深媿病夫鐘漏盡 深く媿づ病夫の鐘漏尽くるを

宦途蹭蹬尚迷津 宦途蹭蹬として尚ほ津に迷ふ

○小来 幼い時分から。杜甫の五古「李校書を送る二十六韻」詩に「小来習ひ性として懶し」と。○客裏 故里を離れた他郷。○甲子 干支。

年輪。晩唐・李商隱の七絶「戯れに題して稷山の駅吏王全に贈る」詩に「過客甲子を詢ふを勞せず、惟た亥字を書して時人に与ふ」と。

○偶坐 向き合つて座る。〈偶〉は、対の意。○守庚申 中唐・権徳輿に「道者と共に庚申を守る」詩がある。ちなみに、東陽の『夜航詩話』巻五に「世に庚申会といふもの有り。相伝ふ三井寺の開祖、智證大師（円珍のこと）、西渡の時伝来す。謂ふ人身中に尸虫有り。亦た三彭と云ふ。人の隱匿を記し、庚申の夜毎に、人の睡に乘じ、升りて之を天に告ぐ。或いは謂ふ、是の夜惡星有り、降つて人の骸竅の間に入り、其の罪惡を伺察すと。蓋し本と道家の教へなり。是に於いて俗間、比隣、社を結び、或いは磬を鳴らし仏を念じ、或いは置酒絃歌し、徹夜之を守りて寐ねず、亦た痴騷の甚だしきならずや」云々と。○睽 乾肉。ここは魚の干物であらう。『字彙』に「雄

皆の切、音は諧。説文に脯なり。徐曰く、古は脯の屬を謂ひて睽と為す。因つて通じて儲蓄の食味を謂ひて睽と為す。南史に孔靖、宋の高祖に飲ましむ。睽無し。伏雞卵を取りて肴と為すと」と。○鐘

漏 人生に残された時間。〈漏〉は、水時計。六朝陳・徐陵「李順之に答ふる書」に「餘息綿綿として、鐘漏を尽くすを待つ」と。○宦途 官界。役人勤め。○蹭蹬 よたよたするさま。疊韻語。○迷津 道に迷う。〈津〉は、渡し場の意。

ともに白髪頭となり年齢を訊ねて、歳月の流れを実感する。「今宵は庚申、昔のように夜を徹して語り明かそう。そなたがどれほどいける口かは存じているが、台所に酒の肴がないのは勘弁してくれ」。ここで自ら〈病夫〉と称しているのは、当初江戸の風土に慣れず体調を崩していたことによるのだろう。五絶「江戸客中、風土に苦しむ二首」其一（『詩鈔』巻六）には「寒暑両つながら毒痛、卑湿尤も虐を作す」と嘆じている。〈毒痛〉は、苦しめ悩ます意。身の毒。結句は、かつて松江藩儒の桃西河に宛てた七律「雲州の桃文学に報ず」詩（『詩鈔』巻五）において「蒼髯 長く官途の人と為る、桑榆の暮景 尚ほ津に迷ふ」と述べるのと同じ感慨。

この澹所には、東陽が京に遊学していた時に、『世説新語』言語篇に載せる六朝宋・謝靈運と隱士の孔淳之（字は彦深）との問答についての解釈をめぐる質問に答えた手紙を送ったことがあり、その末尾には「近ごろ足下の読む所は何の書ぞ、著述する所有るか。春日漸く永し、隙虚せしむる母れ。旃を勉めよ、旃を勉めよ」と先輩らしい言葉を書き添えている（『文集』巻八「平井可大に答ふ」。なお、〈春日〉以下は、明・王世貞の寛保二年「二七四二」刊『弇州先生尺牘選』巻下、『弇州先生四部稿』巻二八「魏允中に与ふ」に見える表現をそのまま襲用）。また折にふれて詩のやりとりをしており、「平井可大に贈る」（『詩鈔』巻二）と題して、次の五言古詩を江戸に寄せていた。

吾道席上珍、君自青雲士

の士

英氣溢眉宇、立志殊卓爾

英氣は眉宇に溢れ、志を立つること殊に卓爾たり

郷曲幸相隣、況是通家子

郷曲幸に相隣す、況んや是れ通家の子なるをや

詩賦驚奇句、談論飽逸旨

詩賦は奇句に驚き、談論は逸旨に飽く

交誼金蘭契、情好均昆弟

交誼は金蘭の契、情好は昆弟に均し

河梁一分手、關山邈千里

河梁 一たび手を分かちて、関山千里邈たり

曩歡空春戀、悠悠歲月徒

曩歡空しく春恋ひ、悠悠として歲月徒る

壯士三日別、殷勤刮目俟

壯士は三日別るれば、殷勤に刮目して俟つ

雄都豪傑交、豹變定何似

雄都 豪傑の交、豹変 定めて何似ぞ

文章才彌茂、學優自堪仕

文章 才弥々茂く、學んで優なれば自ら仕ふるに堪ゆ

時方遇右文、世豈無知己

時方に右文に遇ふ、世に豈に知己無からんや

男兒要自立、何用附驥尾

男兒は自立を要す、何ぞ用て驥尾に附さんや

居安以俟命、優游綏德履

安きに居て以て命を俟ち、優游して德履に綏んず

誰知高士節、從他俗人毀

誰か知らん高士の節、俗人の毀つに従他す

○吾道『論語』里仁篇に「吾が道は一以て之を貫く」と。○席上珍 座席上の珍宝。『札記』儒行篇に「儒に席上の珍以て聘を待ち、

（中略）力行以て取るを待つもの有り」と。古代の堯舜のよき道を述べて、君主の招聘をまつ意。後漢・鄭玄の注に「往古の堯舜の善

道を鋪除して以て問はるるを待つなり」と。東陽の在京時代の作「頼千秋に贈る」詩(『詩鈔』巻四)にも「吾が道修め来る席上の珍」と。

○青雲士 高い位にある人(『史記』伯夷列伝)。○眉宇 眉や額のあたり。○卓爾 高く抜きんでているさま。○郷曲 郷里。○奇句 奇抜な句。○逸旨 優れた主旨。○金蘭契 金属のように堅く、蘭のようにかぐわしい交わり。『易経』繫辭上伝に「二人心を同じくすれば、其の利きこと金を断ち、同心の言、其の臭しきこと蘭の如し」と。○昆弟 兄弟。○河梁 送別の地をいう。前漢・李陵の作とされる「蘇武に与ふ三首」(『文選』巻二十九)其三に「手を携へて河梁に上る、遊子暮れに何くにか之」と。○関山 国境の山々。○悠悠 うかうかと。○曩歎 かつての歎談。○三日別 三国呉・呂蒙の言に「士別ること三日、即ち更に刮目して相待せよ」と(『三国志』呉志・呂蒙伝の裴松之注に引く『江表伝』)。○殷勤 ねんごろに。疊韻語。○雄都 江戸のこと。杜甫の五排「江陵にて幸を望む」詩(『唐詩選』巻四)に「雄都元と壮麗なるも、幸を望まば歎ちに威神有らん」とあり、江陵を指している。○豹変 直ちに善い方向に変わる。『易』革卦上六に「君子は豹変す」と。現代日本語の用法のような悪い意味ではない。○学優 『論語』子張篇に「学んで優なれば則ち仕ふ」と。○右文 学問を重んじ文治を尊ぶ。○知己 己れを認め引き立ててくれる者。○自立 『礼記』儒行篇に先に挙げた箇所につづけて「其の自立此の如き者有り」と。また北宋・柳開「宋の故中大夫行監察御史贈祕書少監柳公の墓誌銘並びに序」(『河東先生集』第十四)に「男児当に自立すべし、人を学び婦家に因つて富貴を覓むる能はざるなり」と。○居安以俟命 自己の境遇に安んじて運命のなりゆきをまつ。『中庸』に「上は天を怨みず、下は人を尤めず。故に君子は易に居りて以て命を俟ち、小人は險を行ひて以て幸を徼む」と。○優游 ゆつたりとしたさま。○德履 德行。○高士 在野の志操高潔な人物。○従他 この二字で、まかせる意。

〈他〉は、接尾語。「サモアラバアレ」とも訓じる。

なお、この詩には「可大、時に江戸の昌平学の都講^たなり。江戸は京師を去ること一百三十餘里。千里は古の里程を用ふ。凡そ集中の記する所、題辭の注文は謹んで今世の制に従ふ。詩詞は則ち古の風雅の道を尚ふを爾りと為す。敢へて時制に反るに非ざるなり」という自注を附している。〈都講〉は、塾頭。

さらに京都での作に七絶「和して平井可大に答ふ」(『詩鈔』巻七)がある。

漫為壯遊輕別離 漫に壯遊を為して別離を軽んず

江雲渭樹坐相思 江雲渭樹 坐に相思ふ

故國烟花春欲遍 故國の烟花 春遍からんと欲す

莫教鴻雁先歸期 鴻雁をして歸期に先んぜしむること莫れ

○壯遊 壯志を抱いて遠くに遊学する。杜甫に「壯遊」詩がある。

○輕別離 白居易「琵琶引」(『白氏文集』巻十二)に「商人は利を重んじて別離を軽んず」と。○江雲渭樹 友人と遠く離れていること。またはるか遠くにいる友。杜甫が渭水の北、長安にいて江東の李白を思い出して詠んだ五律「春日李白を憶ふ」詩の「渭北春天の樹、江東日暮の雲」から出た語。例えば、元・戴良の七律「項彥昌を懷ふ」詩(『九靈山房集』巻二十五)に「渭樹江雲毎に君を憶ふ、別來惟だ見る白頭新たるを」と。○故国 故郷。○烟花 美しい春景色。

李白の七絶「黃鶴樓にて孟浩然の広陵に之くを送る」詩(『唐詩選』巻七)に「煙花三月揚州に下る」と。○歸期 帰る期日。晩唐・李商隱の七絶「夜雨北に寄す」詩(『唐詩選』巻八)に「君歸期を問ふも未だ期有らず」と。

別離の悲しみよりも新たな出会いの喜びの方が大きく、「生平少年の日、手を分かつも前期を易しとす」(『文選』巻二十、六朝梁・沈約「范安成に別る」詩)と思うのは、古今を問わず、春秋に富んだ若者ならではの樂觀的な考え方であるが、東陽や澹所もかつてはそうした

青年の一人であった。

津藩への出仕がかなったことを報じたとみられる詩もある。七律

「平井可大に寄す」(『詩鈔』巻五)には、

大邦寵聘耀家庭 大邦の寵聘 家庭を耀かす

展志青雲翳未星 志を青雲に展べて翳未だ星ならず

何必梁園誇授簡 何ぞ必ずしも梁園に簡を授けられしを誇ら

んや

由来魯國は経を談ずるを重んず

祈年方與民偕樂 年を祈り方に民と偕に樂しむ

混俗還能我獨醒 俗に混じり還つて能く我独り醒めんや

報道榮旋花發日 報じて道ふ榮旋花発する日

春風相待眼俱青 春風相待し眼俱に青し

○大邦 大藩。ここは津藩三十六万石を指す。○寵聘 格別の思召

しによる召し抱え。○青雲 高位高官の喩え。○翳未星 髪にまだ

白髪が交じっていない。南宋・范成大の五律「胡長文給事の挽詞三首」

其二(『石湖居士詩集』卷三十一)に「許国 心は日の如く、家に

還るも鬢未だ星ならず」と。東陽の『夜航詩話』卷三に「詩に星の

字を用ふ、猶ほ点と云ふがごとし。(中略)故に謝康樂の詩に「星

星白髪垂る」、歐陽公の秋声賦に「黦然として黒き者は星と為る」と、白髪始めて生じ鬢華点点たるを言ふなり」と。○梁園授簡 堂

上公家の詩会で詩文を作るよう命じられる。南朝宋の謝惠連「雪の

賦」(『文選』卷十三)に梁王と司馬相如との問答を仮構して「簡を

司馬太夫に授けて曰く」云々と。○魯国 春秋時代の国名。中唐・

劉長卿の五排「鄭説の欽州に之き薛侍郎に謁するを送る」詩に「漢

家は太守を尊び、魯国は諸生を重んず」と。ここでは津藩を指して

いうのであろう。○祈年 豊年を祈願する。『詩経』大雅「雲漢」

に「年を祈る孔だ夙く、方社莫からず」と。○与民偕樂 『孟子』

梁惠王上に「古の人は民と偕に樂しむ、故に能く樂しむ」と。○独

醒 戦国楚・屈原の作とされる「漁父の辞」(『楚辞』卷七、『文選』

卷三十三、『古文真宝』後集卷一)に屈原の言葉として「世を挙げ

て皆濁り我独り清めり、衆人皆酔ひ我独り醒めたり」と。○榮旋

榮転の意であろう。○眼俱青 柳の新芽(柳眼)が青々としている

のと人々が青眼をもつて迎えてくれるのを掛けていうのであろう。

と詠じて、仕官がかなった喜びを率直に表し、民のために力を尽く

したいとする自らの抱負を述べている。『詩鈔』巻八に「寛政己酉

八月、褐を本藩に解き、伊州教授に充てらる。十月始めて上野に徙

る」云々と題する七絶があり、それによれば、東陽が津藩に十五人

扶持で出仕したのは、寛政元年(一七八九)八月のことで、支城の

ある伊賀上野勤務が決まって十月には任地に赴くのであるが、その

時の作とするには詩中に「花発日」や「春風」の語句が見えるのと

時期が合わない。『詩鈔』巻五には、この詩の前に七律「伊賀に赴

く途中の作」があり、その頸聯に「俗紫凡紅春自閑し、頑山鈍水

偏に長し」の句があることからすれば、あるいは寛政二年春の作で

あろうか。ちなみに、(俗紫凡紅)は、南宋・陸游の七絶「春雨絶句」

六首其五(『劍南詩稿』卷二十二)に見える表現。(頑山鈍水)につ

いては、用例未見。

もっとも、平井澹所に示したような当初の意気込みとはうらはら

に任地の伊賀上野では山崎闇斎派の道学者との軋轢があり、思うよ

うにならず氣を腐らすことが多かった。その鬱屈は京都の詩友に寄

せた詩の幾つかに見えること、すでに前稿「覚書…津阪東陽の交友

(一)―安永・天明期の京都」において紹介したが、澹所に対しては、

七古「閑居して漫に短歌を成す、平井可大に贈る」(『詩鈔』巻一)

と題して、次のような感慨を寄せている。

夙自抗志從儒服 夙に自ら志を抗げて 儒服に従ひ

翰墨場中漫馳逐 翰墨場中 漫に馳逐す

斯文好脩君子業 斯文好し脩めん君子の業

吾道從諱小人腹
大丈夫當自立耳

吾が道 諱るに従ず小人の腹
大丈夫当に自立すべき耳

因人成事何碌碌

人に因つて事を成すは何ぞ碌碌たる

安知此生本數奇

安くんぞ知らん此の生本と數奇なるを

投閑置散分之互

閑に投じ散に置くは分の宜しきなり

人世艱難青雲阻

人世の艱難 青雲阻まれ

歲月蹉跎白髮垂

歲月蹉跎として白髮垂る

悲歌慷慨聊復爾

悲歌慷慨 聊か復た爾するのみ

湖海豪氣彼一時

湖海の豪氣 彼も一時

○抗志 志を高く持つ。三国魏・曹植「七啓」(『文選』卷三十五)

に「志を雲際^のに抗ぐ」と。○儒服 儒者の着る服。○翰墨場 詩文

の集まり。詩壇。前掲「南川士長を哭す」詩の語釈参照。○馳逐

競いあう。○斯文 儒学。○君子業 君子たるものの務め。○小人

腹 語は『左氏伝』昭公二十八年に「願はくは小人の腹を以て君子

の心と為さん」と見える。ここは、つまらぬ輩の心ばえ。○大丈夫

『孟子』滕文公下に「天下の広居に居り、天下の正位に立ち、天下

の大道を行ひ、(中略)富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、

威武も屈する能はず、此れを之れ大丈夫と謂ふ」と。○自立 先に

挙げた五古「平井可大に贈る」詩に「男児は自立を要す」と。○因

人成事 戦国趙の平原君に養われていた食客、毛遂が楚との盟約を

成功させた際、同行した他の食客を評した言葉に「公等録録、所謂

人に因つて事を成す者なり」と(『史記』平原君虞卿列伝)。(録録

は、碌碌と同じ。凡庸なさま。○數奇 不遇、不運。○投閑置散

閑散な地位職務に身を置く。世に用いられぬこと。中唐・韓愈「進

学解」(『韓昌黎集』卷十二、「古文真宝」後集卷二)に「閑に投じ

散に置くは、乃ち分の宜しきなり」と。○青雲 高い地位・身分の

喩え。○蹉跎 もたもたするさま。疊韻語。初唐・張九齡の五絶「鏡

に照らして白髪を見る」詩(『唐詩選』卷六)に「宿昔青雲の志、

蹉跎す白髪^の年」と。○悲歌慷慨 嘆きや怒りなどの昂る感情を悲

壮に歌うこと。『史記』項羽本紀に見える表現。○聊復爾 ちょっ

とそうしただけだ、の意。『世說新語』任誕篇にみえる阮咸の言葉

に「未だ俗を免かるること能はず、聊か復た爾する耳」と。○湖海

豪氣 浪人時代の豪放の氣。『後漢書』陳球伝に「許汜、劉備と語

りて曰く、陳元龍は湖海の士、豪氣除せず」と。『書言故事』卷六、

声名類に「湖海士」の条にも挙げる。○彼一時 あの時はその時。『孟

子』公孫丑下に「彼も一時、此れも一時」と。

次に挙げる五律「平井可大に答ふ」(『詩鈔』卷三)も、伊賀上野

での作であろう。

音書 感情誼、天末思悠悠 音書 情誼に感じ、天末 思ひ悠

悠 旅宦 將に遲暮せんとし、関山 旅宦 將に遲暮せんとし、関山

舊游雲四散、往事水東流 旧游 雲四散し、往事 水東流す

夙志空慷慨、羈魂夢亦愁 夙志 空しく慷慨し、羈魂 夢も

亦た愁ふ

○音書 音信。たより。○天末 天のはて。杜甫に五律「天末に李

白を思ふ」詩がある。○悠悠 はるかなさま。『詩經』鄭風「子衿」

に「青青たる子が佩、悠悠たる我が思ひ」と。○旅宦 故郷をはな

れて仕官する身。○遲暮 晩年を迎える。戦国楚・屈原「離騷」(『楚

辭』卷一、『文選』卷三十二)に「惟れ草木の零落し、美人の遲暮

を恐る」と。○関山 国境の山々。○阻脩 險阻で遠く離れている。

西晋・張載「擬四愁詩」(『文選』卷三十)に「我が思ふ所は當州に

在り、往きて之に従はんと欲すれども路阻まれ脩し」と。○旧游

昔の(勉強)仲間。○雲四散 友人同士が雲のようにちりぢりにな

ること。語は、白居易の五古「初めて元九に別れし後、忽ち夢に之

を見る」詩(『白氏文集』卷九)に「昨夜雲四散し、千里月の色

を同じうす」と見える。○水東流 水の流れるように逝きて帰らぬこと。李白の雑言古詩「夢に天姥に遊ぶの吟、留別」に「世間の行楽亦た此の如し、古来万事東流の水」と。○夙志 かねて抱いていた志。○羈魂 他郷暮らしの心情。

夙志を果たせぬまま、いたずらに伊賀の地で年老いてゆくことへの苛立ちや焦りにも似た感情が仄見える。

その後、東陽が文化四年（一八〇七）冬、51歳で津に召還されて以降の作として五律「次韻して平井可大に答ふ」（『詩鈔』巻三）がある。

平生存久要、情好一何濃 平生 久要を存し、情好 一に何ぞ濃やかなる

宦羈東西隔、音書旦暮逢 宦羈 東西に隔たるも、音書 旦暮に逢ふ

青雲猶壯志、白髮共衰容 青雲 猶ほ壯志、白髮 共に衰容
歡晤無期日、臨風思幾重 歡晤 期日無く、風に臨んで思ひ幾重

○久要 旧い約束。『論語』憲問篇に「久要平生の言を忘れず」と。

孔安国の注に「久要は、旧約なり。平生は、猶ほ少時のごときなり」と。

○情好 交情。○宦羈 仕官して職務に拘束されること。宮仕え。

○歡晤 楽しい語らい。○臨風 『楚辭』九歌・少司命に「美人を望めども未だ来たらず、風に臨んで悦として浩歌す」と。

折にふれ手紙のやりとりをして近況は承知しているつもりでも、互いの容貌の変化は實際顔を会わせてみないとわからない。それで三十数年ぶりに再会した際、「若し声氣猶ほ旧に依るに非ざれば、相遇ふも安んぞ能く古き吾れを識らん」という言葉が思わず口を衝いて出たのである。

江戸での再会を果たした後、澹所に寄せた詩は、その六十の寿をことごとく作が最後となった。七律「平井可大の六袞を寿す」（『詩鈔』

卷五）に云う、

六十童顏尚宛然 六十にして童顏尚ほ宛然たり

郷里嬉遊竹馬年 郷里嬉遊す竹馬の年

經國文章同臭味 經國の文章 同臭味

通家意氣舊因縁 通家の意氣 旧因縁

偷閑脱却風塵窟 閑を偷んで脱却す風塵の窟

乘興携將雪月船 興に乗じて携將す雪月の船

身世相忘酒中趣 身世相忘る酒中の趣

天真爛漫自神仙 天真爛漫 自ら神仙

○宛然 そっくりそのまま。○竹馬年 晩唐・韋莊の七律「洪州にて西明寺の省上人が福建に遊ぶを送る」詩に「記し得たり初めて竹馬に騎りし年、師を送りて来往す御溝の辺」と。ちなみに、釈大典

の『学語編』巻下、生齡類に「竹馬之戲を挙げ「七齡」と注するが、これは『類説』巻二十三などに引く『続博物志』に「七歳を竹馬の戲と曰ふ」というのに基づく。○同臭味 同じ趣味嗜好。中唐・元

稹の五古「元和五年、予官罰俸を了せず西帰す……」詩（『元氏長慶集』巻五）に「吾が兄は性靈を諳んじ、崔子は臭味を同じうす」と。

○経國文章 三国魏・曹丕「典論論文」（『文選』巻五十二）に「文章は経國の大業にして、不朽の盛事」と。○風塵窟・雪月船 金・

劉迎の七律「城南庵」詩（『中州集』巻三）に「夢は驚く城郭風塵の窟、興は寄す湖山雪月の船」と。ちなみに、『中州集』には、延

宝二年（一六七四）刊の和刻本がある。○携將（將）は、動詞の後に置く助詞で、口語的表現。○身世 白居易の五排「渭村退居、……一百韻」詩（『白氏文集』巻十五）に「憐れむ可し身と世と、

此れ従り而つながら相忘れん」と。○酒中趣 酒の味わい（晋・陶潜「晋故征西大将军長史孟府君伝」）。○天真爛漫 生来の純真な心がそのままあらわれる。

もつとも、澹所は六十の寿宴を迎えることなく文政三年に59歳で

没している。訃報が東陽のもとに直接届くことはなかったのであらうか。その墓碑については、昌平齋での後輩にあたる松崎慊堂（名は復、明和八年「一七七二」）天保十五年「一八四四」が「澹所先生平井君墓表」（崇文叢書『慊堂全集』巻十）を撰しており、澹所の交友について、韓愈と並び称される古文の大家、中唐・柳宗元の「先君の石表の陰の先友記」（『柳河東集』巻十二）に倣って交友のあった「鉅人勝流」（すぐれた一流の人物）を挙げた旨を記しているが、そこに東陽の名は見えない【資料篇③】。

※平井澹所については、三村竹清「平井澹所伝」（『書苑』七ノ一、昭和十八年。後に「平井澹所」として『三村竹清集七』に収載。青裳堂書店、昭和六十年）がある。その生卒年に関して、『鷗外歴史文學集 第六卷 伊沢蘭軒（一）』（岩波書店、平成十二年）の人名注は、一七六〇—一八二〇とするが、基づところ不明。

平沢旭山については、揖斐高氏に「平沢旭山年譜考—明治以後」（『近世文学の境界—個我と表現の変容』Ⅲ文雅と日常「旭山片影」所収、岩波書店、平成二十一年）がある。

また南川金溪については、岩田隆氏に「南川維遷伝の研究—儒者の生涯—」（『名古屋大学国語国文』第二十九号、昭和四十六年）「江戸祇役における南川維遷の交友」（『国語国文学論集 松村博司教授定年退官記念』、昭和四十八年）ほか一連の論考があり、前者には江村北海撰の墓碑が紹介されている。さらに梅村佳代『日本近世民衆教育史研究』（梓出版社、平成三年）に第四章「伊勢国の文人南川金溪の研究」がある。その著『閑散餘録』は「日本随筆大成（第二期）20」（吉川弘文館、昭和四十九年）に、そのもととなった稿本『金溪雑話』は岩田氏の校訂解題で『随筆百花苑第五巻』（中央公論社、昭和五十七年）に収める。その他、『孤野町史』（昭和十六年刊。名著出版より昭和四十九年復刻）参照。ちなみに同書には久保希卿・平井澹所の小伝も収める。

なお、金溪を北海に紹介したという金龍道人に関しては、中野三敏「金龍道人敬雄」（『近世新崎人伝』所収。毎日新聞社、昭和五十二年）参照。

妻の訃報、悼亡詩

江戸に着いてほどなく、東陽は五絶「内に報ず二首」（『詩鈔』巻六）を作っている。江戸に発つ際に、病の身をおして夜遅くまで片時も手を休めずあれこれと旅仕度を整えてくれた妻のことが絶えず気に懸かっていたのであろう。

老歎経年別、貧憐守舍難

老いては歎ず経年の別れ、貧は憐れむ守舍の難きを

家書擾人意、只是報平安

家書 人意を擾す、只だ是れ平安を報ず

○経年別 中唐・劉長卿の五律「秦系に酬ゆ」詩に「旧路経年の別れ、寒潮毎日回る」と。○家書 家からの便り。○人意 吾が意。○報平安 無事を知らせる。盛唐・岑参の七絶「京に入る使に逢ふ」（『唐詩選』巻七）に「馬上相逢ふて紙筆無し、君に憑つて平安を報ぜしむ」と。

其二

孤館秋燈影、夜深寒蛩哀

孤館 秋燈の影、夜深くして寒蛩哀し

報書情未盡、封了又重開

報書 情未だ尽くさず、封じ了りて又た重ねて開く

○寒蛩 晩秋に鳴くコオロギ。わびしさを誘うもの。

其二の転・結句は中唐・張籍の七絶「秋思」（『三体詩』巻一）に「洛陽城裏秋風を見る、家書を作らんと欲して意万重。復た恐る忽忽と

して説き尽くさざらんことを、行人発するに臨んで又た封を開く」とある、後半二句をふまえた表現。

さらに七絶「家信を報ず二首」（『詩鈔』巻九）があり、
客舍秋風落木催 客舍秋風 落木催す

海天月冷雁聲哀 海天月冷やかにして雁声哀し

家書先見平安字 家書先づ見る平安の字

猶恐援將人意來 猶ほ恐る人意を援將し来らんことを

○落木 落葉。杜甫の七律「登高」詩（『唐詩選』巻五）に「無辺の落木蕭蕭として下る」と。○海天 大海と天空。白居易の七律「江樓夕望客を招く」詩（『白氏文集』巻二十）に「海天東のかた望めば夕茫茫たり」と。○援將（将）は、動詞の後に置く助詞で、口語的表現。

其二
一家分作各天人 一家分かれて各天の人と作る
旅況憑兒慰辛苦 旅況 兒に憑って辛苦を慰む
頼は客身無疾病 頼に是れ客身疾病無く
籠中閑藥任生塵 籠中の閑藥 塵を生ずるに任す

○各天 遠くに離ればなれになる。「古詩十九首」其一「『文選』巻二十九」の「相去ること万里餘、各おの天の一涯に在り」から出た語。

○旅況 故郷を離れた旅先での暮らしぶりやそれに伴う心情。○閑藥 使わない藥。

と詠んでいる。夫に我が身を案じさせまいと、まず「平安」（無事）の字を書いて安心させる妻の気遣いが東陽には心に染みたにちがいない。また其二からは、この江戸祇役に東陽がその子、達を帯同していたことが知られる。

されど、東陽が八月六日に家を離れてから七十二日、十月十八日に二度と帰らぬ人となってしまった。享年49。天明三年（二七八三）春に18歳で嫁いできてから三十餘年、自らの信念を曲げぬ直言の士

で愛想の一つも言わず家ではひたすら学問に没頭する夫を支え苦樂を共にしてきた妻である。『詩鈔』巻五に七律「初冬十八日、内人世を捐つ。余、家を離れること七十二日なり矣。計至り驚き歎きて惘然たり。忌闕りて猶ほ恍惚として夢の如きなり」と題する作がある。

一官殊未報糟糠* 一官殊に未だ糟糠に報いず

遠役何圖此悼亡 遠役何ぞ図らん此に悼亡せんとは

流水落花春寂寂 流水落花 春寂寂

人間天上夢茫茫 人間天上 夢茫茫

可堪身世桑榆影 堪ふ可けんや身世桑榆の影

欲斷男兒鐵石腸 断えんと欲す男兒鉄石の腸

最憶行装劇勞苦 最も憶ふ行装劇だ勞苦し

夜深力疾不辭忙 夜深く疾を力めて忙を辞せず

* 糟は、糠の誤字。

○一官 一官半職（ふつうの官職）の意。○糟糠 酒かすと米ぬか。粗末な食事。貧乏暮らしで苦勞を共にした妻をいう。『書言故事』

卷一、夫婦類に「自ら其の妻を称して糟糠の妻と曰ふ」と。○遠役 ここでは江戸祇役をいう。○寂寂 ひっそりとしたさま。晩唐・李

群玉の七律「黃陵廟」詩（『三体詩』巻二）に「野廟江に向つて春寂寂」と。○流水落花・人間天上 五代・李煜の「浪淘沙令」詞に「流水落花春去りぬ、天上人間」と。《天上人間》は、「たがいに通ずる

ことのない遙かな隔たりを意味する成語」（村上哲見『中国詩人選集16李煜』）。○茫茫 ぼんやりとしてとりとめないさま。○身世 身の上。杜甫の五古「北征」詩に「益々身世の拙なるを嘆く」と。

○桑榆 老年の喩え。『書言故事』巻二、耆老類に「年老を桑榆の暮影と云ふ」と。○鉄石腸 剛毅な心。南宋・文天祥の七律「樓に登る」詩（『文山先生全集』巻十四）に「茫茫たる地老と天荒と、

此の如き男兒鉄石の腸」と。○行装 旅じたく。○力疾 病の身を

おして。

訃報を手にしたときは惘然(頭の中が真っ白)となり、忌明けを過ぎてまだまだ妻の死が信じられず、心は恍惚(ほんやり)として腑抜けたようになっていた。それでも何とか気を取り直して、この詩を詠んだのである。

また五律「悼亡」詩(『詩鈔』卷三)には、

惜來鄉里別、留守一憑卿
に卿に憑る

糟糠偕老契、琴瑟悼亡情

糟糠 偕老の契り、琴瑟 悼亡の情

聞訃驚疑夢、嘆命泣飲聲

訃を聞くに驚きて夢かと疑ふ、命を嘆じて泣きて声を飲む

勤勞家政務、坐自憶平生

勤勞す家政の務め、坐自に平生を憶ふ

○卿 ここでは、夫が妻を呼ぶときの言い方。○糟糠 前詩の語釈参照。○偕老 『詩経』邶風「擊鼓」に「子の手を執り、子と偕に老いん」と。○琴瑟 夫婦仲睦まじいこと。『詩経』小雅「常棣」に「妻子好合、琴瑟を鼓すが如し」と。○嘆命 身の不運を嘆く。

○泣飲声 忍び音に泣く。○家政 家庭内の仕事。

と詠じている。

さらに五律「感を書す」詩(『詩鈔』卷三)には、次のように云う。

艱難祗役客、悽愴悼亡詩

艱難 祗役の客、悽愴たり悼亡の詩

身病向誰頼、腹悲唯自知

身病 誰に向って頼らん、腹悲 唯だ自ら知るのみ

旅愁天暮處、生計歲窮時

旅愁 天暮るる處、生計 歲窮まる時

坐咽思家淚、零丁奈女兒

坐るに咽ぶ家を思ふ涙、零丁たり

女兒を奈せん

○祗役 君主の命を奉じて他所に赴く。六朝宋・謝靈運「隣里方山を相送る」詩に「祗役して皇邑を出づ」と。ここは江戸出府をいう。

○悽愴 いたましく悲しい。双声語。○腹悲 心のなかの悲しみ。

後漢・応劭『風俗通義』卷三、衍礼に「俚語に婦死せば腹悲唯だ身之を知るのみ」とあり、妻を亡くした悲しみは当人以外に誰もわからないという。○思家淚 晩唐・薛逢の七律「九日雨中懷を言ふ」詩に「潜かに滿眼家を思ふの涙を將て、灑ぎて長江東北の流れに寄せん」と。○零丁 独りぼっちで助ける人がないさま。疊韻語。三

国蜀・李密「陳情表」(『文選』卷三十七、『古文真宝』後集卷八)に「零丁孤苦にして、成立に至れり」と。

詩末には「季女独り家に居りて喪を守る。榮榮たる子影何如と為すや」という自注がある。〈季女〉は、末むすめ。東陽には、三人

のむすめがいたが、長女は既に嫁ぎ、三女は夭逝しており、ここは

家にいる次女を指す。〈榮榮〉は、ひとりぼっちのさま。李密「陳

情表」に「榮榮として孑立し、形影相弔ふ」と。

江戸での務めを終え帰国した東陽は、七絶「家に帰る二首」(『詩鈔』卷九)を作り、題下に「客冬内を喪ふ。悲喜交々集まる」と注

して、

久客衰躬幸得支 久客衰躬 幸ひに支ふるを得

團欒歡晤自忘疲 團欒歡晤 自ら疲れを忘る

婦來偏愛吾廬好 婦來たれば偏に愛す吾が廬の好きを

高枕攸然暢四肢 枕を高くして攸然 四肢を暢ぶ

○團欒 (家族が)輪になって集まる。疊韻語。○歡晤 楽しい語らい。○吾廬 我が家。晋・陶潜「山海經を読む」詩(『古文真宝』前集)に「衆鳥託すること有るを欣び、吾も亦た吾が廬を愛す」と。

○攸然 ゆつたりと。〈攸〉は悠と同じ。○暢四肢 思いっきり手足を伸ばす。白居易の五排「北窓三友」詩(『白氏文集』卷六十二)

に「一詠四支を暢ぶ」と。(支)は肢と同じ。

其二

物在人亡獨自悲 物在人亡して独り悲しむ

音容夢幻尚相疑 音容夢幻 尚ほ相疑ふ

同行總喜還家樂 同行総べて家に還るの樂しみを喜ぶに

夜雨西窓話向誰 夜雨西窓 誰に向って話らん

○物在人亡 盛唐・李頎の七律「盧五の旧居に題す」詩(『唐詩選』

卷五)に「物在人亡して見ゆるの期無し」と。○音容 声や姿形。

白居易の七古「長恨歌」(『白氏文集』卷十二)に「一別音容兩つな

がら渺茫」と。○夜雨西窓 晩唐・李商隱の七絶「夜雨北に寄す」

詩(『唐詩選』卷八)に「何か共に西窓の燭を翦つて、却つて

巴山夜雨の時を話らん」と。ちなみに、「夜航詩話」卷三に「西窓

は婦人の寢室を謂ふ」と。○向 於と同じ。

と詠じている。また亡き妻を夢に見ることもあった。七絶「夢に亡

妻を見る」(『詩鈔』卷九)に云う、

寒牀夢覺坐依稀 寒牀 夢覺めて坐ろに依稀たり

風竹蕭蕭雪撲扉 風竹蕭蕭として雪 扉を撲つ

欹枕疑來燈下影 枕を欹てて疑ひ來る燈下の影

夜深獨坐尚縫衣 夜深く独り坐して尚ほ衣を縫ふ

○寒牀 寒々とした寢床。○依稀 かすかなさま。おぼろげなさま。

量韻語。ちなみに「夜航詩話」卷五に「依約、依稀は約略なり。蓋

し物色隱微の貌。依微隱約は義皆同じ。若し夫れ彷彿も亦た分明な

らざるの貌、大同にして小異なり」と。○蕭蕭 竹の葉ずれの音。

○欹枕 寝たまま枕を斜めにたてる。

「亡き妻を夢に見てはつと目が覺めたら、行燈の傍らでいつものように縫いものをしている変わらぬ姿があったような気がした」。

さらに七絶「感を書す二首」(『詩鈔』卷九)がある。

霜下秋風節物更 霜下り秋風 節物更まる

腹悲難慰悼亡情 腹悲慰め難し悼亡の情

空床永夜孤燈影 空床永夜 孤燈の影

倩得寒蛩滿意鳴 寒蛩を倩ひ得て意に満つるまで鳴かしめん

○霜下 『礼記』月令に「季秋の月、(中略)霜始めて降る」と。○

節物 季節の風物。○腹悲 心のなかの悲しみ。前出「感を書す」

詩の語釈参照。

其二

孤懷感物坐相干 孤懷 物に感じて坐ろに相干す

遺愛盆梅自慰看 遺愛の盆梅 自ら慰め看る

心事對花空澌淚 心事 花に対して空しく涙を澌ぎ

春風側側暮窓寒 春風側側として暮窓寒し

○感物 西晋・潘岳「悼亡詩三首」其三(『文選』卷二十三)に「悲

懷物に感じて來り、泣涕情に應じて隕つ」と。○干 (心を)乱す。

○遺愛盆梅 亡妻がいつくしんだ盆栽の梅。○心事 胸のうち。○

澌淚 杜甫の五律「春望」詩に「時に感じては花にも涙を澌ぐ」と。

○側側 寒いさま。あるいは風の音の形容。

この二首は同時の作ではなく、其一是文化十二年晩秋、其二是翌春の作かと思われる。

※東陽の妻については、「内人日紫喜氏墓碣銘」(『文集』卷六)がある。

江戸での交友——江湖詩社の詩人、市河寛斎・柏木如亭・大窪詩仏・菊池五山ほか

我が江戸今日の詩、河寛斎之を唱し、柏如亭・窪詩仏・池五山これに和す。風流俊采、皆一代の選なり。因つて時人之を概称して江戸四家と曰ふ。以て南宋の范・陸・楊・尤の四大家に媲ぶと云ふ。

ここに示したのは、亀田鵬斎が文化十二年（一八一五）刊の『四家絶句』に寄せた序文の冒頭部分である。天明七年（一七八七）、市河寛斎は江湖詩社を開き、柏木如亭・大窪詩仏・菊池五山らがその門下に集まった。この四人は宋末元初の方回『瀛奎律髓』巻一、登覧類に載せる范石湖「鄂州南樓」詩の評に「乾淳（乾道・淳熙）の間、詩の巨擘（きよはく）を尤楊范陸と称す」とある尤袤（号は遂初）・楊万里（字は廷秀）・范成大（号は石湖）・陸游（号は放翁）に擬えられていたのである。なお、江湖詩社というのも、もともと「江湖」は束縛の多い官界に対して自由な天地、民間という語で、直接的には南宋の陳起（字は宗之）が刊行した『江湖集』『江湖後集』などに基づいた命名であって、身近な日常風景や都市の風俗などを平淡に描写することに意を尽くした。

江戸滞在中、東陽はこの「四家」と交流する機会に恵まれた。ここでは、その様子を東陽の詩から窺うことにする。

市河寛斎（寛延二年「二七四九」→文政三年「一八二〇」）

名は世寧、字は子静。寛斎は、その号。川越藩士の子として江戸で生まれた。関松窓に学び、林家入門。昌平黌時代には前出の平井澹所とも交友があった。東陽より八歳上。その題下に「子静は昌平学の都講、仕へて富山侯の儒官と為る。致仕して詩酒の間に優游す。江湖社の盟主（た）為り」と自注を附した七律「河子静に贈る」詩（『詩鈔』巻五）がある。寛斎は、寛政二年（一七九〇）42歳の時、異学の禁に抵触し昌平黌教授を辞したが、翌三年には富山藩主前田利謙に招聘され、藩校教授となり、文化八年（一八一二）63歳で致仕するまで、江戸と富山とを往還した。東陽が江戸にやって来たとき、寛斎は前年の七月から長崎奉行の牧野成傑に随行して当地に遊んでおり、江戸にもどったのは十一月であった。東陽は十二年春になって寛斎と顔を合わせたらしい。さて、「河子静に贈る」詩は、次のように詠じられている。

男子功名宦始休 男子の功名 宦始めて休む

天真快活舊風流 天真快活 旧風流

家傳經藝紛綸業 家は伝ふ経藝紛綸の業

身逸江湖汗漫遊 身は逸す江湖汗漫の遊

花月扁舟春水浦 花月扁舟 春水の浦

絃歌綠酒夕陽樓 絃歌綠酒 夕陽の樓

老夫安濯塵纓去 老夫安くにか塵纓を濯つて去らん

樂託從君得自由 樂託 君に従つて自由を得たり

○男子功名 北宋・邵雍の七古「書に代へて王勝之学士が萊石の茶酒器を寄せらるるに謝す」詩（『擊壤集』巻七）に「男子の功名未だ成就せず」と。○宦 仕官、官仕え。○天真 本性。生まれつき。杜甫の五排「李十二白に寄す二十韻」詩に「嗜酒天真を見る」と。

○快活 楽しいさま。双声語。白居易の七律「快活」詩（『白氏文集』巻五十六）に「誰か知らん将相王侯の外に、別に優游快活の人あるを」と。○紛綸 学問が広くて広いこと。後漢の井丹（字は大春）は詩・書・易・礼・春秋の五經に通じていたので、都の洛陽で「五經紛綸井大春」と評されたという（『後漢書』井丹伝）。『蒙求』巻上の標題に「井春五經」と。○身逸（逸）は、やすらか、気楽であること。

○江湖 官界とは無縁の自由な世界。○汗漫遊 世俗を離れた遊び。杜甫の五古「王信州峯の北婦するを送り奉る」詩に「復た見ん陶唐の理、甘んじて汗漫の遊を為さん」と。○綠酒 美酒。晋・陶潜「諸人と共に周家の墓柏の下に遊ぶ」詩に「清歌新声を散じ、綠酒芳顔を開く」と。○老夫 東陽自らをいう。○濯塵纓去 戦国楚・屈原の作とされる「漁父の辞」（『古文真宝』後集巻一）に「滄浪の水清まば以て吾が纓を濯ふ可し」と。○樂託 物事にこだわらないさま。

《落托》と音通。疊韻語。『世說新語』賞譽篇に「王脩載（王蒼之）の樂託の性は、其の門風自り出づ」と。

また五律「河子静に和す」詩（『詩鈔』巻三）がある。

養志閑居樂、風流一逸人

志を養ひ閑居して楽しむ、風流の一逸人

罷官無長物、有子作名臣

官を罷めて長物無く、子有り名臣と作る

槁木形骸外、虚舟寂寞濱

槁木形骸の外、虚舟寂寞の濱

詩盟花月宴、好伴醉郷春

詩盟花月の宴、好し酔郷の春に伴はん

○養志・閑居 後漢・梁竦の言として、大丈夫たるもの生きては諸侯に封じられ、死しては廟に祭らるべきだが、それがかなわぬなら、「閑居して以て志を養ふ可く、詩書は以て娛しむに足る」という(『後漢書』梁竦伝)。○逸人 逸民と同じ。隱者。晩唐・杜荀鶴

の七律「自ら敘す」詩に「白髮吾が唐の一逸人」と。○長物 余計な物。白居易の五律「長物無し」詩(『白氏文集』卷六十六)に「只だ長物無きに縁つて、始めて閑人と作ることを得たり」と。○子市河米庵(名は三亥、字は孔陽。安永八年「一七七九」→安政五年「一八五八」のこと。○槁木 枯れ木。『莊子』齊物論篇に「形は固より槁木の如くならしむ可く、而して心は死灰の如くならしむ可きか」と。○虚舟 からつぽの舟。虚心の喩え。『莊子』山木篇に「舟を方べて河を済るに、虚船の来たりて舟に触るる有れば、偏心(氣短か)の人有りと雖も怒らず」と。○寂寞濱 ひっそりとした浜辺。

中唐・韓愈「崔立之に答ふる書」(『韓昌黎集』卷十六)に「猶ほ將に寛閑の野に耕し、寂寞の浜に釣し」云々と。北宋・王安石の五古「張康に贈る」詩に「逆將して桑榆を収め、子を寂寞の濱に邀ふ」と。○詩盟 詩人の会合。北宋・蘇軾の七律「仲屯田の次韻するに答ふ」詩に「千里の詩盟忽ち重ねて尋ねん」と。

さらに五絶に「士静が夏夜の作に和す」(『詩鈔』卷六)があるが、詩の配列からすると、これは津に帰任した後の作。夏の夜にホトトギスの声を追いかける「風流の一逸人」の姿を詠じたもの。

南吹夏天静、江城樹色迷

南吹 夏天静かに、江城 樹色迷

月中追杜宇、半夜過橋西

月中 杜宇を追ひ、半夜 橋西を過ぐ

○南吹 南風。『詩經』邶風「凱風」の「凱風南自りし、彼の棘心を吹く」から出た語。○江城 江戸を指す。○樹色迷(迷)は、

弥と音通で、満の意であらう。○杜宇 ホトトギス。杜鵑、子規。『蒼瓊録』巻上に「此方ニテ杜鵑ヲ賞スル鶯ヨリモ猶甚シ。漢人ハ其声ヲ厭フ、初音ヲ聞クコトヲ最モ忌ムナリ。益州記ニ、子規聞「初声」者、主「別離」トアリ」云々と。我が国では、夜にも啼く鳥として、その初音が珍重された。○半夜 深夜。

※市河寛斎の生涯については、市河三陽『市河寛斎先生』(あかぎ出版、平成四年)に詳叙されている。また今関天彭「市河寛斎」(『雅友』第四十八号、昭和三十五年八月。『江戸詩人評伝1』に収録)がある。詩の注釈に掛斐高『江戸漢詩選5市河寛斎・大窪詩仏』(岩波書店、平成二年)および蔡毅・西岡淳『日本漢詩人選集9市河寛斎』(研文出版、平成十九年)がある。

柏木如亭(宝暦十三年「一七六三」→文政二年「一八一九」)

名は昶、字は永日。如亭は、その号。江戸の人で、家は幕府の小普請方大工棟梁。弱齡のころ平沢旭山に入門して文章を、ついで市河寛斎に詩を学んだ。東陽より六歳下。この漂泊の詩人は、文化四年(一八〇七)江戸を発つて西上し、京を中心に備前の庭瀬・讃岐の高松に遊び、文化十一年の歳暮ようやく江戸にもどったものの、翌年の四月初旬には信越遊歴に赴くことになるのである。この間、大窪詩仏の詩聖堂に身を寄せていた(後掲、掛斐高『遊人の抒情』による)。

詩の配列から清明節を過ぎて以降の作とみられる詩で、題下に「時

に西州自り帰り、又た將に北越に遊ばんとす」と自注を附した七絶「柏如亭に贈る」詩（『詩鈔』卷九）がある。

詩酒風流樂託魂 詩酒風流 樂託の魂
漫遊玩世信乾坤 漫遊玩世 乾坤に信す

箇身到處青山土 箇の身 到處青山の土
卻笑劉伶舂鍤煩 却って笑ふ劉伶が舂鍤の煩を

○詩酒風流 金・范曄の七律「高子初梅に和す」詩（『中州集』卷八）

に「詩酒風流豈に忘れ易からんや」と。○樂託 物事にこだわらないさま。前掲「河子静に贈る」詩の語釈参照。○漫遊玩世 東陽の七絶「芭蕉翁贊」（『詩鈔』卷九）にも「漫遊玩世滑稽の辞」と。（漫遊）は、気ままに旅する。（玩世）は、世間の事をはすにみる。この語、『漢書』東方朔伝贊に「隠に依つて世を遊び、時に詭ひて逢はず」と。○信乾坤（旅人として）天地の間に身をゆだねる。杜甫の七律「稻を刈り了りて懷を詠す」詩に「家の消息を問ふ無く、客と作つて乾坤に信す」と。○青山 北宋・蘇軾の七律「予、事を以て御史台の獄に繋がる。……故に二詩を作り獄卒梁成に授け、以て子由に遺す、二首」其二に「是の処青山骨を埋む可し」と。○劉伶 いわゆる「竹林七賢」の一人。いつも酒壺を抱えて鹿車（小さな車）に乗り、鍤を担がせた従者をつれ、「わしが死んだらすぐ埋めろ」と言っていたという（『晋書』劉伶伝）。○舂鍤（土を入れて運ぶ）もつこと（穴をほるための）すき。

もう一首、五律に「如亭山人の春興」詩（『詩鈔』卷三）がある。これは、東陽が江戸からの帰途、屈を出さずに無断で鎌倉遊覧した一件がとがめられ減給等の処分を受けていた時の作であろう。そのせいか、如亭の自由気ままな境涯を羨むような気分が感じられなくもない。

行樂一瓢飲、春風御裕天 行樂一瓢の飲、春風御裕の天
泥花紅處醉、藉艸緑中眠 花に泥して紅処に酔ひ、草を藉い

片雨殘虹外、冥鴻落日邊 片雨殘虹の外、冥鴻落日の辺
獨往無何境、逍遙地上仙 ひとり無何の境に往き、逍遙す地上の仙

の仙

○行樂 前漢の楊惲「孫会宗に報する書」（『文選』卷四十二）に「人生行樂せん耳、富貴を須つは何れの時ぞ」と。○一瓢飲 語は『論語』雍也篇に見える。○御裕 綿なしの裕（あわせ）を着る。西晋・潘岳「秋興の賦」（『文選』卷十三）に「莞弱を藉き、衿衣を御す」と。

○片雨殘虹（片雨）は、局地的に降る雨。明・何景明の五律「雨後、馬君卿を邀ふ」詩（『大復集』卷十五）に「青山片雨過ぎ、白日殘虹を抱く」と。○冥鴻 空高く飛ぶ水鳥。○無何境 何もないところ。

『莊子』逍遙遊篇に説く理想境、「無何有郷」。○逍遙地上仙 悠悠自適の境地を楽しみ俗世間で暮らす仙人。白居易の七律「龍潭寺従り少林寺に至る、題して同遊の者に贈る」詩（『白氏文集』卷五十七）に「始めて知る鶴駕乗雲の外、別に逍遙たる地上の仙有るを」と。

如亭はまったくの下戸で、自ら「余が量は蕉葉に勝えず」（『如亭山人遺藁』卷二）というように、ほとんど飲める口ではなかったものの、それでも『詩本草』（文政五年「二八二二」刊）に「酒は天地間の第一韵事にして、詩家缺く可からざるの政なり。吾が飲、器を尽くすこと能はず。花時雪天、若しくは山秀水麗の境に逢へば、乃ち一盃を把ると述べるごとく、詩興を引き出す「釣詩鉤」（蘇軾の五古「洞庭春色」詩）としての酒の魅力についてはよくわかっていた詩人である。とはいえ、「一瓢の飲」を携え花間に泥酔し草を枕に眠る姿を詠じられては、あまりに実像と違いすぎ苦笑するよりほかなかったのではあるまいか。

なお餘談ながら、如亭が文化五年（一八〇八）冬、入洛早々、親交を結び「七友歌」を贈った小栗十洲は、若狭小浜の出で、東陽の

在京時代の親友小栗明卿の弟である。このことは前稿で言及した。

※柏木如亭を初めて本格的に論じたのは今関天彭「柏木如亭」(「雅友」第四十九号、昭和三十五年十月、『江戸詩人評伝集1』に収録)。年譜として揖斐高編『柏木如亭集』(三樹書房、昭和五十六年)に「改訂柏木如亭年譜」が附され、詩の注釈に日野龍夫・揖斐高・水田紀久校注『護園録稿 如亭山人遺藁 梅墩詩鈔』(新日本古典文学大系64、岩波書店、平成九年)および入谷仙介『日本漢詩人選集8 柏木如亭』(研文出版、平成十一年)がある。また論考に揖斐高「遊人の抒情―柏木如亭」(岩波書店、平成十二年)があり、如亭に関する参考文献を網羅されている。なお、『詩本草』は、揖斐氏による校注本が岩波文庫に収められている(平成十八年刊)。

大窪詩仏(明和四年「二七六七」→天保八年「一八三七」)

名は行、字は天民。通称、柳太郎。詩仏は、その号。常陸の人。その父は日本橋銀町で小兒科医を開業。十代後半に江戸に出て、山本北山(名は信有。宝暦二年「二七五二」→文化九年「一八一二」)の奚義塾に学ぶとともに市河寛斎の江湖詩社に加盟した。東陽より十歳下。

詩仏との最初の出会いについて、揖斐高氏の「大窪詩仏年譜稿」には、「九月頃、江戸に出席した津藩の儒者津坂東陽より詩を贈らる」とし、五律「天民に贈る」詩(『詩鈔』巻三)を挙げている。もっとも、『詩鈔』の配列では前掲の「河士静に和す」詩の後にこの「天民に贈る」詩が置かれており、それに従えば、文化十二年の作とみるのがよいかと思われるが、前稿でも指摘したごとく詩の配列には必ずしも信をおけない面があり、確定できない。

江湖社盟主、名譽四方傳
家祭詩中佛、客參儒者禪

江湖社盟の主、名譽四方に伝ふ
家は祭る詩中の仏、客は参ず儒者の禪

書窓閑日月、畫壁好山川
蕩佚人間事、醉郷邀樂天

書窓 閑日月、画壁 好山川
人間の事を蕩佚し、醉郷 樂しみを天に邀む

○詩中仏 杜甫のこと。文化七年(一八一〇)刊の『詩聖堂詩集』に掲げられた市河寛斎の序に「其の歸りて居を今の地に卜するや、堂に少陵の像を置し、詩聖を以て称と為す。(中略) 又た自ら詩仏と称す。張南湖が老杜詩中仏の語を取るなり」と。張南湖は、南宋・張鑑(号は南湖)のこと。その五絶「殊南軒」詩(『南湖集』巻七)に「杜老は詩中の仏、能く言ふ竹に香有り」と。○儒者禪 詩をいう。晩唐五代の詩僧、尚顔の五律「齊己上人の集を読む」詩に「詩は儒者の禪と為す、此の格的に惟れ仙」と。○閑日月 気ままな月日(を過すこと)。白居易の五古「洛陽に愚叟有り」詩(『白氏文集』巻六十三)に「此れ従り身を終ふるに到るまで、尽く閑日月と為さん」と。○好山川 すばらしい山水画。○蕩佚人間事 世間の事柄を全く気にかけない。『後漢書』馮衍伝下に「抄小の礼を闊略し、人間の事を蕩佚す」と。初唐・李賢の注に「放蕩縦逸にして恒の俗に拘らざるなり」と。○醉郷 気分がいい酔い心地。初唐の王績に「醉郷記」がある。○邀樂 『莊子』徐無鬼篇に「吾れ吾が子と遊ぶ所の者は、天地に遊ぶ。吾れ之と樂しみを天に邀め、吾れ之と食を地に邀む」と。

ところで東陽が詩仏に詩を贈ったのは、あるいは吉田雪坡や画人幾阪煙崖との繋がりによるのかもしれない。煙崖は伊勢津の人で、名は世達。通称は忠兵衛。別に小羊とも号する。生卒年は不明だが、詩仏の文化十年(一八一三)の作に「煙崖を送る」詩があり、『今四家絶句』に収める(揖斐高「大窪詩仏年譜稿」)。後述の菊池五山『五山堂詩話』巻七(文化十年「一八一三」刊)には「雪坡、其の郷の画人煙崖を帯びて来る」との記述がある。雪坡は、津藩士吉田重麗の号。代官・郡奉行として民政に意を尽くし、文政七年(一二二四)没。

五山はそれ以前に巻五（文化八年「二八一」刊）で「洞津の田重麗、字は正夫。雪坡と号す。画を能くし詩に耽る」と、これを取り上げている。この人について揖斐高氏は「文化九年には江戸藩邸に在ったものと思われ、詩仏ともその時以来の旧知であろう」（『大窪詩仏年譜稿』）という。煙崖に初めて会った五山は「其の人老樸、其の詩閑雅、宜なり其の画の秀潤愛す可きこと」と述べ、「雪坡は詩人にして画を能くする者、煙崖は画人にして詩を能くする者」と評している。

かかる煙崖・雪坡の兩人と東陽とがいつ知り合ったのか詳細は不明ながら、交友が深くなるのは文化四年（二八〇七）津に召還されて以降のようだ。江戸出府までの間に、雪坡に対しては七絶「吉司農正夫が郷を巡るを送る二首」（『詩鈔』巻九）や五絶「戯れに正夫に贈る」詩（『詩鈔』巻六）があり、煙崖には七絶「東に代へて煙崖生に示す」詩（『詩鈔』巻九）や五絶「幾阪小羊、余が為に齋壁に画く。居然として滄州の趣、真に咫尺の内、便ち万里遙かと為すを覚ゆ」と題する作（『詩鈔』巻六）などがある。煙崖はその後、南宋・劉克莊（字は潜夫、号は後村）の詩を撰した『後村詩鈔』上下巻を書肆陽華堂（津の山形屋か）から上梓しており、文政元年（二八一八）津に滞在したおりに書かれた詩仏の序に「煙崖、画を善くし、声価籍甚、天下焉を伝ふ。又た詩を好み最も放翁・後村を喜ぶ。是れ其の画品の高妙なる所以なり」と評している。なお、東陽に「劉後村詩鈔の序」（『文集』巻二）があり、煙崖について「詩弟子」と述べているが、どういうわけか、この序は刊本に載せられていない。それはそれとして、東陽が詩仏と交友するに際しては、書簡などによる雪坡や煙崖の仲介があったのではなからうか。もしそうだとすれば、東陽が江戸の詩人のうち最初に訪ねたのは詩仏だという蓋然性は高くなる。

さて、東陽にはさらに神田お玉が池に構えた詩仏の詩聖堂を詠じ

た作がある。七律「詩仏の玉池精舎」詩（『詩鈔』巻五）がそれで、文化十二年春の作であろう。

清福逍遙舊隱淪	清福	逍遙す旧隱淪
林泉勝槩考槃新	林泉の勝概	考槃新たなり
但能置酒延佳客	但だ能く置酒して佳客を延く	
那用將詩謁貴人	那ぞ用ひん詩を將て貴人に謁するを	
風色洗心池畔柳	風色	心を洗ふ池畔の柳
時名晦跡市中塵	時名	跡を晦す市中の塵
花枝好自過牆去	花枝好く自ら牆を過ぎて去き	
分與隣家一半春	隣家に分与す一半の春	

○清福 俗事に煩わされず閑雅であること。元・耶律楚材の五古「冬夜琴を弾じ頗る得る所有り……」と題する詩（『湛然居士文集』巻十一）に「秋思雅興を尽くし、三楽清福を歌ふ」と。○逍遙 自適して楽しむ。『莊子』讓王篇に「天地の間に逍遙して心意自得す」と。○置酒 世を避けて隠遁すること。○隱士をいう。○置酒語。○隱淪 世を避けて隠遁すること。○隱士をいう。○置酒語。○隱淪に非ず」と。○考槃 隱宅を構えること。『詩經』衛風「考槃」に「槃を考して澗に在り、碩人之寛」とあり、朱熹の集伝に「考は、成なり。槃は、盤桓の意。言ふところは其の隱処の室を成すなり」と。ここでは、文化三年（一八〇六）に、お玉が池に詩聖堂を築いたことを指す。○置酒 酒を用意する。○風色 風光、景色。○洗心 この語、古くは、心をあらためる意として『易経』繫辭上伝にみえるが、ここは心の煩累を洗い去る。李白の五古「韋少府に別る」詩に「心を洗ふ向溪の月、耳を清うす敬亭の猿」と。○時名 今の名声。

○市中塵 町なか。市塵。○一半春 春の半分。

なお、詩聖堂の様子は、清水礫洲の『ありやなしや』（安政四年「一八五七」刊）に「お玉が池の裡なれども詩聖堂と云は二階屋にて、上は塾生、下は家内の住居なり。お玉が池は三四百坪の池にて、蓮

を植、柳を植、池のほとりに翠舎屠蘇といふ一室を作り、はき庭の体にて飛石伝ひ十五六畳の座敷あり。先生それに住して来客に接し、ひとのもとに應じて書画を揮毫す」云々と描かれている。そこでは、たびたび詩会や書画会が開かれていた。

それから東陽は今一度、詩聖堂に招かれたことがあった。七律「重ねて玉池精舎に遊ぶ」詩（『詩鈔』巻五）に云う、

牆東避世趣還深 牆東 世を避け趣還つて深し

室邇好從招隱吟 室邇く好し從はん招隱の吟

柳擁庭池留客釣 柳は庭池を擁して客を留めて釣らしめ

花浮樽酒引人斟 花は樽酒に浮びて人を引ききて斟ましむ

曲和山水琴中韻 曲は和す山水琴中の韻

興逸烟霞象外心 興は逸す烟霞象外の心

都下文淵名勝會 都下の文淵 名勝会す

春風無日不披襟 春風 日として襟を披かざるは無し

○牆東 城東。「世を避く牆東の王君公」と評された後漢の王君公の故事（『後漢書』逢朋伝）から、隠者の住まいを指す。○室邇 『詩経』鄭風「東門之墀」に「其の室は則ち邇く、其の人は甚だ遠し」と。

○招隱吟 人に帰隱をすすめる歌。西晋の左思や陸機に「招隱詩」（『文選』巻二十二）がある。ここは詩仏から招待されたことをいう。

○烟霞 もや・朝やけ夕やけ。山水の景色。○象外 現象世界の外。世俗を離れた境地。寒山の詩に「自ら幽居の樂しむを羨ふ、長へに象外の人と為らん」と。○文淵 文人の集うところ。○名勝 名望すぐれた士。著名人。『世説新語』文学篇に「宣武（桓温）諸名勝を集めて易を講ず」と。○披襟 襟元をはだける。戦国楚・宋玉「風の賦」（『文選』巻十三）に「風有り颯然として至る。王廼ち襟を披いて之に当たる」と。

「貴殿は城東に世を避けて住んでおられるが、御宅は近いことだし、さあお招きにあずかろう」。津藩の屋敷を出て神田川にかかる

和泉橋を渡った先の松川町にお玉が池はあったのである。また七絶には「詩仏居士の玉池精舎に題す二首」（『詩鈔』巻九）がある。

繞池楊柳翠雲流 池を繞る楊柳 翠雲流る

安樂閑窩此占幽 安樂の閑窩 此に幽を占む

大隱誰知塵海裡 大隱誰か知らん塵海の裡

釣竿容與對滄洲 釣竿容与として滄洲に對す

○翠雲 みどりの雲。○安樂閑窩 北宋の邵雍（字は堯夫）は洛陽に隱棲し、その居を安樂窩と名づけ、自ら安樂先生と号した（『宋史』道学伝）。〈窩〉は、住处の意。○大隱 晋・王康琚「反招隱詩」（『文選』巻二十二）に「大隱は朝市に隱る」と。○塵海 俗世間。明・王守仁の七律「西湖醉中謾に書す二首」其一（『王文成公全書』巻十九）に「十年塵海魂夢を勞す」と。○釣竿 釣りは隱者の生活を象徴する。なお、詩末の自注に「池に鯽魚（ふな）多し、軒（てすり）倚りて釣を垂る」と。○容与 ゆったりとしたさま。双声語。古くは『楚辞』九歌・湘夫人に見える。○滄洲 ここは、青々とした池の水面に向き合うことを詠じるが、更には自由な天地に心を馳せるという含意がある。『夜航詩話』巻二に「詩家毎に滄洲を用ふ。蓋し滄浪を取り名と為す。只だ江海の境を称す。朝市に對して言ふのみ。必ずしも仙島を指さざるなり」と。

其二

日飲無何樂志優 日々無何に飲み志を樂しませること優なり

墨君逸興醉鄉遊 墨君の逸興 醉郷の遊

毫端爛漫封侯富 毫端爛漫たり 封侯の富

寫破渭川千畝秋 寫破す渭川千畝の秋

○無何 何もないところ。『莊子』にいう「無何有郷」。白居易の五排「渭村退居、礼部崔侍郎・翰林錢舍人に寄す」詩（『白氏文集』巻十五）に「不動は吾が志為り、無何は是れ我が郷」と。○墨君

墨竹。宋・孫奕『履齋示兒編』雜記・易物に「文与可竹を画く、亦た之を名づけて墨君と曰ふ」と。○逸興　すぐれた興趣。○醉郷　気分よい酔い心地。○毫端　筆端。○爛漫　あざやかでのびやかなさま。○封侯　ここでは大身の旗本や大名をいう。○渭川千畝　竹をいう。『史記』貨殖列伝に「渭川千畝の竹」と。

酔餘、興にのつて筆先から次々と生み出される墨竹の画がちよつとした小大名に匹敵するほどの豊かな富を稼ぎ出したというのである。詩仏が墨竹を善くしたことに関連して、東陽の七絶に「天民の墨竹に題す」詩（『詩鈔』巻九）があるほか、「天民の墨竹に題す」（『文集』巻七）という文章もある。

『詩鈔』に載せるのは、この二首だが、三村竹清「大窪詩仏」（『三村竹清集』六、青雲堂、昭和五十九年）には三首とし、三首目に次の詩を挙げている。

徳義本推人物尤　徳義本と推す人物の尤なるを
清襟灑落是虚舟　清襟灑落　是れ虚舟
淵才雅思詩中佛　淵才雅思　詩中の仏
万言波馳更自由　万言波馳し更に自由

○尤　とりわけ優れていること。○清襟　高潔な胸懷。六朝梁・任昉「王文憲集の序」（『文選』巻四十六）に「之の子清襟を照らす」と。○灑落　さっぱりとして物事にこだわらない。洒脱。○虚舟　虚心坦懷の喩え。前出「河子静に和す」詩の語釈参照。○淵才雅思（『淵才』）は、深くて豊かな才能。七絶「六如上人に贈る」詩（『詩鈔』巻七）にも「淵才雅思　詩中の仏」と、全く同じ表現。○万言波馳　中唐・柳宗元の五古「連州の凌員外司馬を哭す」詩（『柳河東集』巻四十三）に「天庭　高文を挾かし、万字　波の馳せるが如し」と。○自由　思いのまま。

さて東陽が任期を終え、江戸を離れる際には、詩仏が送別の宴を設けてくれた。七律「天民に留別す」詩（『詩鈔』巻五）は、その時

の作。

不淺社盟詩酒歡　浅からず社盟詩酒の飲

客中愁思頼君寛　客中の愁思　君に頼りて寛うす

窮來偏見人情薄　窮し来りて偏に見る人情の薄きを

老去深知世味酸　老い去きて深く知る世味の酸なるを

雨濕祖筵添別恨　雨は祖筵を湿ほして別恨に添ひ

雲臨岐路擁征鞍　雲は岐路に臨んで征鞍を擁す

白頭重會多難得　白頭の重會　多くは得難し

千里相思夢裡看　千里の相思　夢裡に看ん

○社盟　同好の文学仲間。詩のサークル。○世味　世間の情味。世

態人情。韓愈の五古「爽に示す」詩（『韓昌黎集』巻六）に「吾れ

老いて世味薄く、因循留連を致す」と。○祖筵　送別の席。（祖）は、

旅の無事を願つて道祖神を祭ること。○別恨　別離の恨み。○征鞍

旅する者の乗る馬。○千里相思　李白の七古「雪に対して酔うて後、

王歴陽に贈る」詩に「千里相思ふ明月楼」と。

領聯に「人情薄」「世味酸」というのは、江戸での体験に基づく述懐であろうと思われるのだが、それが具体的に何を指しているのかは不明である。ただ、東陽にとっては妻の死のみならず、ほかにもあまり面白くない出来事や不如意な事態があったらしい。この点については、また後で触れたい。そうした「客中の愁思」をいくぶんなりとも和らげてくれたのが、後述の朝川善庵も言うごとく「人と交はるに城府を設けず、辺幅を修めず」（『西游詩草叙』、気さくに誰とでも分け隔てなく付き合う詩仏の存在だったのである。

その後も詩仏とは交流が続き、津にもどつてからの作に七絶「和して天民に答ふ」詩（『詩鈔』巻九）がある。

相思勞夢各天遥　相思夢を勞す各天遥かなり

尺素殷勤慰鬱陶　尺素殷勤にして鬱陶を慰む

多謝今春南浦別　多謝す今春南浦の別れ

斜風細雨送過橋 斜風細雨 送りて橋を過ぐ

○相思云々 中唐・劉長卿の五古「冤句の宋少府の庁に題して留別す」詩に「他日 瓊樹の枝、相思 夢寐を勞さん」と。(「勞夢」は、たびたび夢に見る。○各天 それぞれ離ればなれであること。前出「家信を報ず二首」其二の語釈参照。○尺素 手紙。古樂府「飲馬長城窟行」(『文選』卷二十七)に「魚中に尺素の書有り」と。(「尺」は一尺、素)は帛。○殷勤 ねんごろ。疊韻語。○鬱陶 朋友を思う気持ち。六朝齊・謝朓「中書省に宿す」(『文選』卷三十)に「朋情以て鬱陶たり、春物方に駘蕩」と。『詩鈔』卷六の「明卿至る」詩にも「閑窓読書に倦む、春雨鬱陶の情」と。○多謝 厚く御礼を述べる。○南浦 もとは南の水辺の意。『楚辭』九歌「河伯」に「美人を南浦に送る」とあり、送別の地を指す。○斜風細雨 晩唐・李群玉の七律「南莊春晚二首」其一に「南村の小路桃花落ち、細雨斜風独自帰る」と。○橋 日本橋であろうか。

また七律「天民の書并びに詩を得、時に越の新潟に在り」詩(『詩鈔』卷五)は、文化十三年(一八一六)八月から越後に遊んだ詩仏の便りを得て詠んだ作。

離索偏驚歲序更 離索偏に驚く歳序の更まるを

關山北望雁歸聲 関山北望す雁帰る声

隔年書信天涯便 隔年の書信 天涯の便

絶世詩方海内名 絶世の詩方 海内の名

流水浮雲為客恨 流水浮雲 客為るの恨

清風明月憶君情 清風明月 君を憶ふ情

一場春夢東遊興 一場の春夢 東遊の興

何日重尋舊社盟 何れの日にか重ねて尋ねん旧社盟

○離索 離群索居。○詩方 作詩の腕前をいうか。用例未見。○流水浮雲 行雲流水と同じ。東陽の七律「端文仲の越に適くを送る」

(『詩鈔』卷四)に「浮雲流水旅行の身」と。○清風明月『南史』

謝諫伝の「時有り独り酔ひて曰く、吾が室に入る者は、但だ清風有るのみ。吾が飲に對する者は、唯だ明月有るのみ」から出た語。○一場春夢 儚いことの喩え。七絶「懷を士善・公績に寄す」詩(『詩鈔』卷八)に「一場の春夢 東流の水」と。○東遊 東陽の江戸祇役を指す。○何日云々 南宋・劉克莊の七律「方君節監丞を送る」詩(『後村先生大全集』卷三十八)に「何れの日にか重ねて尋ねん洛杜の盟」と。

「いつかもう一度貴君のもとを訪ね、詩を作りたいものだ」という東陽の願いはかなわなかったが、詩仏は文政元年(一八一八)夏から京を目指した西遊の旅に出ると、その途上、わざわざ津に立ち寄ってくれた。東陽は彼を歓待し、藩の重役にも紹介した。その時の作に、五律「南浦舟中、天民に和す」(『詩鈔』卷三)がある。

汗漫滄州趣、逸興伴風流 汗漫 滄州の趣、逸興 風流に伴ふ

故舊陳徐榻、神仙李郭舟 故旧 陳徐の榻、神仙 李郭の舟

劇談驚四座、豪氣睨千秋 劇談 四座を驚かし、豪氣 千秋を睨む

明日天涯別、若為期再遊 明日天涯に別るれば、若為れぞ再遊を期さん

遊を期さん

○汗漫 ひろびろとしたさま。疊韻語。○滄州趣(滄州)は、直接は海原をさしているが、自由気ままな境涯の意を含む。六朝齊・

謝朓「宣城に之き、新林浦に出、版橋に向ふ」(『文選』卷二十七)

に「既に懼ぶ懷禄の情、又た協ふ滄洲の趣」と。○逸興 世俗を脱した興趣。○陳徐榻 特別にもてなすこと。後漢の名士、陳蕃が壁

掛け式の長椅子(榻)を設え、徐穉が来たときだけ、それに座らせて優待した故事(『後漢書』徐穉伝)。「蒙求」巻下の標題に「陳蕃

下榻」と。○李郭舟 後漢の郭太(字は林宗)が洛陽に遊び、河南

尹の李膺と交友を深め、黄河を渡って帰郷する際には李膺が舟に同

乗して見送ったが、その様子を人々は神仙のようだと評した（『後漢書』郭太伝）。『蒙求』巻上の標題に「李郭仙舟」がある。○劇談流暢闊達な話しぶり。西晋・左思「蜀都の賦」（『文選』巻四）に「劇談戲論して腕を扼り掌を抵つ」、杜甫「李十二白に寄す二十韻」詩に「劇談野逸を憐れむ」と。

一方、詩仏には、「東陽先生及び雪坡・天保・緑天・松宇・烟崖諸君と共に安並大夫の山荘に遊ぶ。（杜甫の七律「張氏の隱居に題す」詩の）（石門斜日林邱に到る）を用いて韻と為し、七首を賦す」詩ほかがある。安並大夫は加判奉行の安並左伸。天保は小川天保、忘却先生とあだ名された人である。また松宇は高根承芳。のち伊賀の崇広堂、津の有造館で教えたとのこと。緑天は中山緑天、この人については伝未詳。詩仏は、西遊の詩を上下二巻にまとめ、文政二年（一八一九）にこれを上梓したが、東陽にその序を請うている【資料篇④】。さらに、文政七年（一八二四）、詩仏が清の翁長祚（号は榴庵。伝未詳）『花曆百詠』を校訂刊行した際にも、求められて東陽は序文を載せた。

そして、東陽が詩仏に最後に寄せた詩が、次に挙げる七絶「懷ひを天民に寄す」（『詩鈔』巻十）である。

關山千里美人賒　関山千里　美人賒なり
安得相思輒命車　安くんぞ相思へば輒ち車を命ずるを得ん
日暮江濱坐惆悵　日暮れて江濱　坐ろに惆悵す
秋風吹亂白蘋花　秋風吹き乱す白蘋花

○美人　うるわしき人。詩仏を指す。○安得　どうしたら……できるだろう。願望を示す表現。○相思云々　三国魏・嵇康の友人呂安はその気高い趣きに心服し、「一たび相思ふ毎に、輒ち千里駕を命じ」て、会いにやって来たという（『晋書』嵇康伝）。『蒙求』巻上の標題に「嵇呂命駕」、「書言故事」巻三、朋友類に「千里命駕」がある。○日暮　三国魏の阮籍「詠懷十七首」其十五（『文選』巻二十三）

に「日暮れて親友を思ふ、晤言して以て自ら写さん」と。○惆悵感傷の気分になる。双声語。○白蘋花　浮草の白い花。

※大窪詩仏については、鈴木碧堂『大窪詩仏』（河北郷土研究会、昭和十二年）、今関天彰『大窪詩仏（上）（下）』（『雅友』第四十六・七号、昭和三十五年四月六号。『江戸詩人評伝集1』に収録）があり、年譜に揖斐高「大窪詩仏年譜稿―化政期詩人の交遊考証―」（文化年間まで）（『江戸詩歌論』所収。汲古書院、平成十年）、大森林造「大窪詩仏ノート」（梓書房、平成十年）がある。また詩の注釈に前掲『江戸漢詩選5市河寛齋・大窪詩仏』（岩波書店、平成二年）がある。

なお、吉田雪坡・幾阪煙崖ら津関係の人物については、梅原三千・西田重嗣執筆にかかる『津市史 第三巻』（津市役所、昭和三十六年）を参照。煙崖が東陽の「詩弟子」であったことは、本文中に述べたが、雪坡についても同書には「重麗は津坂東陽について儒学を学び文事に長じた」という。煙崖の『後村詩鈔』は、汲古書院刊の『和刻本漢詩集成 宋詩篇第六集』に、その影印を収める。

菊池五山（明和六年「二七六九」～嘉永二年「一八四九」）

名は桐孫、字は無絃。五山は、その号。讃岐の人で、代々高松藩士。上京して柴野栗山に学び、その後、江戸に出た。東陽より十二歳下。文化四年から『五山堂詩話』を毎年一卷ずつ刊行し、当時、江戸の詩壇のみならず地方在住の詩人から熱い注目を浴びていた。東陽の名はそれに見えないが、彼の詩友、吉田雪坡・幾阪煙崖が取り上げられていることは前述した。『詩鈔』巻九に七絶「池無絃に示す」詩がある。

變化逾揚菽苑風	變化逾々揚ぐ藝苑の風
文華許盛頼徠翁	文華許く盛んなるは徠翁に頼る
時流一種新詩格	時流一種の新詩格
京様何如東様工	京様は東様の工なるに何如ぞ

○文華 文化が花開くこと。ここでは漢詩文。○徠翁 荻生徠徠のこと。○京様 京風。語は明・揚慎『丹鉛總錄』卷二、都鄙の条に「今諺に京様と云ふは、即ち古の所謂都、(中略)今諺に野様と云ふは、即ち古の所謂鄙」と見える。○東様 江戸風。上の〈京様〉に對している。この語は、中国の古典詩には見えない、いわゆる和習である。

「今日詩文がかくも盛んになったのは、なんといつても徠翁のおかげ。それから詩風はますます変化してきているが、都仕込みの私の作は今流行の江戸風の清新巧妙な詩に比べてどうですか」。東陽は、『夜航詩話』などで護園派の残した弊害を難じてはいるものの、今日の詩文隆盛をもたらしたのは、荻生徠徠の力によるとしてこれを認めているのである。結句は、詩作に対する東陽の自負を示したものだろうが、これは御愛嬌とみるべきであらう。

江戸からの帰途の作に、七絶「四日市にて五山の狂題を見る、戯れに和して之を寄す」詩(『詩鈔』巻九)がある。

花月當年爛漫遊 花月 當年爛漫の遊

春深小杜舊青樓 春は深し小杜の旧青樓

薄倖風情未全老 薄倖の風情 未だ全くは老いず

猶應狂夢到楊州 猶ほ応に狂夢 楊州に到るべし

○花月 美しい景色。李白「襄陽の曲」に「江城 淥水回り、花月人をして迷はしむ」と。なお、ここでは花街の意を含む。○當年

往年。その昔。○爛漫遊 はめをはずして遊ぶこと。白居易の五律「人に代つて王員外に贈る」詩(『白氏文集』巻十九)に「静かに殷勤の語を接へ、狂して爛漫の遊に随ふ」と。○小杜 晩唐・杜牧のこと。

『新唐書』卷一六六、杜牧伝に「牧、詩に於いて情致豪邁、人号して小杜と為し、以て杜甫と別つと云ふ」と。○青樓 妓樓。○薄倖 浮気者。杜牧の七絶「懷を遣る」詩(『聯珠詩格』巻六)に「十年一たび覚む揚州の夢、贏ち得たり青樓薄倖の名」と。○風情 情趣。特に色恋のそれ。五代・李煜「楊柳枝」詞に「風情漸く老ゆれば春

を見て羞ぢ、至る処消魂して旧遊に感ず」と。○揚州 現在の江蘇省揚州市。唐代後半、江南第一の繁華な都市で淮南節度使の治所があった。かつて節度使の牛僧孺に属僚として仕えた杜牧が浮名を流したところ。

「五山の狂題」というのは、『五山堂詩話』巻一に載せる次の詩を指すのであらう。

百壺醺醺碧於油 百壺の醺醺 油より碧に

月逗樓心興尚適 月 樓心に逗りて興 尚ほ適し

粉黛有緣通一笑 粉黛 縁の一笑を通ずる有り

襟懷無地貯些愁 襟懷 地の些愁を貯ふる無し

紅絃珠唱偏宜夜 紅絃珠唱 偏に夜に宜し

風檻露簾平浸秋 風檻露簾 秋を平浸す

薄倖自知如小杜 薄倖自ら知る小杜の如きを

直將此際做揚州 直ちに此の際を將て揚州と做さん

○醺醺 美酒の名。双声語。○碧於油 例えば、明・羅欽順の五古「節を持し雲を瞻る図、符台の劉克柔の為に賦す」詩(『整菴存稿』巻

十六)に「春酒 油より碧なり」と。○粉黛 おしろいとまゆずみ。

妓女をいう。○紅絃珠唱 ここでは、三味線の音色と芸妓の歌声。

杜牧の七律「羊欄浦にて夜 宴會に陪す」詩(『樊川文集』外集)に「紅絃は高く緊まり声声急に、珠唱は鋪(円形の銅器)のごと円く裊裊長し」と(揖斐氏の語釈に挙げる)。○風檻露簾 風の吹き

通る欄干と露に濡れた簾(揖斐氏の語釈による)。秋を感じさせるもの。『礼記』月令に「孟秋の月……涼風至り白露下る」と。○平

浸秋 書き下しは『五山堂詩話』の訓点に従ったが、平に秋を浸すと訓ずる方がよい。○此際 ここ。

※菊池五山については、今関天彭「菊池五山」(『雅友』第四十一号、昭和三十四年五月。『江戸詩人評伝集1』、揖斐高「江戸の詩壇ジャーナリズム―『五山堂詩話』の世界」(角川選書、平成十三年)がある。

また『五山堂詩話』のうち卷一、卷二は、同氏による注解を附して『新日本古典大系65日本詩史 五山堂詩話』に収録されている。なお、五山の生卒年には近藤春雄『日本漢文学事典』に一七七一―一八五とし、松下忠『江戸時代の詩風詩論』（明治書院、昭和四十四年）に一七六九―一八五二とするなど異説もあるが、本稿では揖斐氏の両著に従った。

海野蟬齋（寛延元年〔一七四八〕～天保四年一八三三）

名は瑗、字は君玉。蟬齋は、その号。備中庭瀬藩の江戸留守居役を務めた。東陽より九歳上。市河寛齋に詩を学び、江湖詩社の同人。寛政九年（一七九七）刊の『寛齋百絶』には序文を撰している。東陽には題下に「備中庭瀬の執政大夫」と注した五律「海野蟬齋に贈る」詩（『詩鈔』卷三）がある。詩の配列からすると、江戸に着いて早々の作らしい。

急流能勇退、鏢鏢老逾雄

急流能く勇退す、鏢鏢として老いて逾々雄なり

宦路名將利、禪機色即空

宦路 名と利と、禪機 色即空

詩騷閑技倆、經濟舊勲功

詩騷 閑技倆、經濟 旧勲功

歡洽春風座、一團和氣中

歡洽 春風の座、一團 和氣の中

○急流勇退（得意の時に）官職を辞する喩え。北宋・蘇軾の七律「相を善くする程傑に贈る」詩に「火色上騰 数有り」と雖も、急流

勇退 豈に人無からんや」と。○鏢鏢 鏢鏢。年老いても丈夫で元

気なさま。疊韻語。『書言故事』卷二、耆老類の鏢鏢の条に「老健

なる者を称して鏢鏢なる哉と曰ふ」とし、後漢の光武帝が馬援を評

した語としてこれを引く。○宦路 仕官の道。宮仕え。○將 文語

の与と同じ。ちなみに（与）は仄字、（將）は平字。○禪機 禪の

修行から得た心のはたらき。○色即空 『般若心経』に「色即是空」と。○詩騷 いわゆる漢詩をいう。（詩）は詩経。（騷）は『楚辞』

の離騷。○經濟 国を治め民を救う。白居易の五排「書に代ふ一百韻、微之に寄す」詩（『白氏文集』卷十三）に「万言經濟の略、三策太平の基」と。○歡洽 楽しく打ち解ける。盛唐・高適「九曲詞」に「到處尽く逢ふ歡洽の事、相看る総て是れ太平の人」と。○春風座 『類書纂要』卷十一、人事部に「坐春風」を挙げ、「朱光庭、程明道先生に従学す。歸りて人に語って曰く、光庭春風の中に在り、坐了すること一箇月」と。○一團和氣 『二程外書』卷十二に「明道先生（程顥）坐して泥塑人（泥人形）の如し、人に接すれば則ち渾て是れ一團の和氣」と。『書言故事』卷五、顔貌類に「一團和氣」の条がある。

北原泰里（天明五年〔一七八五〕～文政十二年〔一八二九〕）

名は成、字は世民、通称は辰次郎。泰里と号した。当時、土佐藩邸の勤番を務め、文化十二年三月に大窪詩仏・柏木如亭・菊池五山の序を附した『泰里詩稿』を上梓。東陽より二十七歳下。

この人とは、面識を持たぬまま終わったようだが、『詩鈔』卷五に七律「土佐邸士の北原世民が桜花の什、頗る都下に関伝せらる。諸賢之に和す。因って亦た次韻す」と題する詩がある。

花王貴彩擅春妍

花王の貴彩 春妍を擅にす

芳靄光風暖醉天

芳靄光風 暖酔の天

繡繪山河環海出

繡繪の山河 環海を出で

瓊瑤歌詠汗牛傳

瓊瑤の歌詠 汗牛伝ふ

千章修標雲迷目

千章の修標 雲 目を迷はし

百丈垂條雪拂肩

百丈の垂条 雪 肩を払ふ

異域稱尊無佛處

異域尊しと称するは無仏の処

桃頑杏俗費詩篇

桃頑杏俗 詩篇を費やす

○花王 花中の王。ちなみに、中国では牡丹を指す。北宋・欧阳修「洛陽牡丹記」花釈名に「錢思公嘗て曰く、人は牡丹を花王と謂ふ」云々と。○貴彩 高貴ないろどり。白居易の新樂府「牡丹芳」（『白氏文集』

卷四)に「穠姿貴彩 信に奇絶、雜卉乱花 比方無し」と。○芳露花がすみ。○光風 雨上がりの美しい景色(『楚辞』招魂)。○暖酔はつこりとしてうきうきする意か。明・王寵の七絶「湖上」詩(『佩文齋詠物詩選』卷四六七、雜鳥類)に「桃花気暖くして輕鷗を酔はす」と。○繡繪 めいとりした絹。○環海 四海、天下。○瓊瑤 美玉。

すぐれた詩歌を喩える。○汗牛 書籍のおびただしいこと。汗牛充棟。柳宗元「文通先生陸給事の墓表」(『柳河東集』卷九)に「其の書を為す、処れば則ち棟宇に充ち、出れば則ち牛馬を汗す」と。○千章 千本。○修標 高く聳えた樹。○雲・雪 いずれも満開の桜花を喩える。○百丈 きわめて長いことをいう。一丈は十尺。もとより実数ではない。○垂条 しだれた枝。前漢・司馬相如「上林賦」

(『文選』卷八)に「垂条扶疏、落英幡纒」と。○禹域 古代の伝説上の帝王、禹の足跡が及んだ地域の意で、中国の異称。○無仏処 ほかには傑出したものがないところ。北宋・黃庭堅「東坡の寒食詩を書するに跋す」(『山谷題跋』卷八)に「他日、東坡或いは此の書を見て、応に我の無仏処に於いて尊と称するを笑ふべきなり」と。○桃頑杏俗 桃は下品で否は俗っぽい。白居易の五排「沈楊二舍人閑老と前に勅賜の桜桃を食ひ、物を翫び恩に感じ、因つて十四韻を成す」(『白氏文集』卷十九)に「否は俗にして対を成し難く、桃は頑にして詎ぞ倫す可けんや」と

詩末の自注に「環海は鄒衍伝に見ゆ。歌詠は国風の什の、万葉諸集に載せる者を謂ふ」と。(『国風の什』は、和歌をいう。

桜は、東陽自身もとりわけこれを愛好し、かつて七律「桜花二首」(『詩鈔』卷五)を詠んだことがあった。ついでに、ここに挙げておく。

穠李夭桃總失妍 穠李夭桃 総て妍を失し
花王品韻特超然 花王の品韻 特に超然
香蒸朝日烟林外 香は蒸す朝日烟林の外

色醉春風畫閣前 色は酔ふ春風画閣の前
何啻瑤葩宜富貴 何ぞ啻に瑤葩の富貴に宜しきのみならんや
端應琪樹屬神仙 端に琪樹の神仙に属するに応ず
謝家飛絮尋常譬 謝家の飛絮 尋常の譬

繚亂和雲雪漲天 繚乱 雲に和し 雪 天に漲る

○穠李 たくさん咲いているスモモの花。『詩經』召南「何彼穠矣」の「何ぞ彼の穠たる、華桃李の如し」から出た語。○夭桃『詩經』周南「桃夭」の「桃の夭々たる、灼灼たる其の華」から出た語。○失妍 顔色を失う。(妍)は、あでやかさ。○花王 ここでは、桜をいう。○品韻 気品風韻。晩唐・司空圖の七絶「杏花」詩(『佩文齋詠物詩選』卷二九九、杏花類)に「品韻由来与に争ふ莫し」と。

○画閣 彩色を施した美しい高殿。初唐・盧照鄰の七古「長安古意」

(『唐詩選』卷二)に「梁家の画閣は天中に起こる」と。○瑤葩(葩)は、花びら。○琪樹 玉でできている木。玉のように美しい樹。白居易の七古「牡丹芳」(『白氏文集』卷四)に「仙人の琪樹白くして色無し」と。○謝家 謝道韞を指す。謝安が一族の子女を集めて、文章学問を論じていた時、急に雪が舞ってきた。はらはらとふる雪は何に似ているかと問うたところ、彼女はこれを風に舞う柳絮(ヤナギの綿毛)に喩える才氣溢れた答えをした(『世說新語』言語篇)。

○尋常 ありきたり。○繚乱 花の咲き乱れるさま。双声語。宋・釈道潜の七古「僧首然師院北軒に牡丹を観る」詩(『參寥子詩集』卷十)に「紛紛として桃李自ら繚乱」と。

其二

扶桑國土自靈祥 扶桑の国土 自ら靈祥
絶世名花擅艷陽 絶世の名花 艷陽を擅にす
燦爛江雲浮水影 燦爛たり江雲 水に浮かぶ影
玲瓏山雪映天光 玲瓏たり山雪 天に映する光
瑤林瓊樹風皆白 瑤林瓊樹 風皆白く

綺席金樽月亦香 綺席金樽 月も亦た香る

休詫神仙海棠色 詫るを休めよ神仙海棠の色

牡丹何物更稱王 牡丹何物ぞ更に王と称す

○扶桑 もとは中国の東海にあるとされた樹の名。我が国をいう。

○靈祥 くすしくめでたい。○艷陽 晩春の季節。六朝宋・鮑照「劉

公幹の体に学ぶ」詩（『文選』卷三十一）に「艷陽桃李の節、皎潔

妍を成さず」と。○燦爛 きらめくさま。疊韻語。○江雲・山雪

いずれも満開の桜を喻える。○玲瓏 白く輝くさま。双声語。○瑤

林瓊樹『世說新語』識鑒篇に王戎が王夷甫について「瑤林瓊樹の

如し」と評した話が見える。○綺席 華やかな宴席。○金樽 李白

の「将進酒」（『古文真宝』前集）に「金樽をして空しく月に對せし

むる莫れ」と。

なお、「桜花二首」には自注があり、「唐山所謂櫻非我櫻者。明宋學士詩云、賞櫻日本盛於唐、如被牡丹兼海棠。夏蟲語水、擬非其倫也。海棠稱花中神仙、牡丹亦號花王、皆無佛處稱尊耳」（唐山の所謂櫻は我が桜なる者に非ず。明・宋學士詩の詩に云ふ、桜を賞すること日本 唐よりも盛んなり、牡丹と海棠とを被ふが如しと。夏虫の水を語る、其の倫に非らざるを擬するなり。海棠をば花中の神仙と称し、牡丹も亦た花王と号す、皆無仏處に尊を称する耳）という。

〈宋學士〉は、明・宋濂（字は景濂、号は潜溪）のこと。ちなみに、大窪詩仏の「桜七首」其七（文化七年「一八一〇」刊『詩聖堂詩集』卷二）の自注には「金華の宋景濂に桜詩有りて云ふ、便ち是れ（花果に巧みな北宋の画師）趙昌も画き難き處、春風纔に起れば雪香を吹く」といい、菊池五山の『五山堂詩話』補遺卷二にも「西人、此の間（我が国）の桜を詠する者、人唯だ宋景濂の詩を知る」云々と述べる箇所がある。これらは寺島良安の正徳二年（一七二二）自序『和漢三才図会』卷八十七、山果類、桜の条に挙げるのに拠ると思われるが（東陽が引くのは前半二句、詩仏は後半二句）、桜を詠じた詩その

ものを宋濂の集（元禄十年「一六九七」刊の和刻本『新刊宋學士全集』三十三卷がある）には見出せない。寺島良安の基づくところ不明。ただ、宋濂の名が出てくるのは、明初の高名な文章家であり我が国五山の僧の依頼によってであろう、天龍寺の開山たる夢窓国師の碑銘を書いている（吉川幸次郎『元明詩概説』に指摘）こととも、何がしかの関係があるのではないか。このこと、待考。〈夏虫語水〉は、知らぬのにでたらめをいう意。『莊子』秋水篇に「夏虫には以て水を語る可からず」と。〈海棠〉を花中の神仙とみることにについては、『広群芳譜』卷三十五、海棠一に「唐相賈耽、花譜を着」〔著〕して以て花中の神仙と為す」といい、『書言故事』卷十、花木類の「花中神仙」もほぼ同様。

※北原秦里については、前掲、揖斐高『江戸の詩壇ジャーナリズム―『五堂詩話』の世界』第六章第三節「土佐藩士北原秦里」参照。また竹本義明氏に「北原秦里・北原桐雨略年譜」（『土佐史談』一九三三、平成五年）および「北原秦里著『秦里詩稿』刊行の経緯（上）（下）」（『土佐史談』一九〇・一九二二、平成四・五年）がある。なお、『高知人名事典新版』（高知新聞社、平成十一年）は生年を天明六年（一七八六）とする。

文人・儒者―大田南畝・亀田鵬斎・朝川善庵

大田南畝（寛延二年「一七四九」～文政六年「一八一三」）

名は覃、字は子粗。通称は直次郎。南畝は、その号。名・字および号は『詩経』小雅「大田」の「我が覃を以て俶て南畝に載とす」から取られている。代々、御徒を務める御家人で、江戸牛込の生まれ。狂詩狂歌の作者として寝惚先生・四方赤良の筆名を用いたが、享和元年（一八〇一）大坂銅座に赴任して以降は蜀山人とも号した。

江戸を代表する文人である。市河寛斎とは同甲で、東陽より八歳上。七絶に「戯れに大田南畝に和す三首」(『詩鈔』巻九)がある。

靡俗淫風世態移

靡俗淫風 世態移り

人家生女喜浮眉

人家 女を生まば喜び眉に浮ぶ

肆歌學舞都如妓

歌を肆^なひ舞を学^{すべ}ぶ都て妓の如し

争向侯門作侍兒

争^なつて侯門に向て侍兒と作す

○靡俗淫風 淫靡な風俗。○生女 楊貴妃が玄宗の寵愛を擅にし楊氏一族が隆盛を極め民間では「男を生むも喜ぶ勿れ女にても悲しむ勿れ、君今看よ女の門楣を作す」と歌われたという(『資治通鑑』巻二一五、玄宗天宝五載の条)。白居易も「長恨歌」(『白氏文集』巻十二)に「遂に天下の父母の心をして、男を生むを重んぜず女を生むを重んぜしむ」という。○侯門 諸侯の門。大身の旗本や大名の屋敷。

其二

梨園扮戯品評揚

梨園の扮戯 品評揚る

最是新年第二場

最も是れ新年の第二場

燈火比隣樓上女

燈火比隣 楼上の女

春風未曉已成粧

春風未だ曉ならざるに已に粧を成す

○梨園扮戯 歌舞伎のこと。〈梨園〉は、もとは唐の玄宗が宮中に設置した歌舞練場。白居易の「長恨歌」に「梨園の弟子白髪新たり」と。

と。〈扮戯〉は、扮装して演じる芝居。○品評 評判。当時、役者

評判記が数多く出版された。○第二場 二番目名題のことで、世話

物狂言を指すのであろうか。○比隣 隣合つてならぶ。○楼上女

「古詩十九首」其二(『文選』巻二十九)に「盈盈たる楼上の女、

皎皎として窓牖に当たる」と。○未曉 芝居の興行が明け六つ(午

前六時頃)から始まることによる。

其三

風流總見貴游驕

風流総べて見る貴游の驕

注意斯文自寂寥

意を斯文に注ぐは自ら寂寥

棋客茶僧消永日

棋客茶僧 永日を消し

剩邀歌舞夜喧囂

剩へ歌舞を邀へて夜喧囂

○風流

ここでは藝事をさしている。○貴游 身分の高い旗本や

上級武士をいう。○斯文 儒学。○寂寥 見る影もないさま。○消

永日 一日暇つぶしをする。晩唐・鄭谷の七絶「永日有懷」詩に「能

く永日を消するは是れ撈^ち捕^ほ」と。○剩 その上、さらに。○喧囂

やかましく騒ぐ。

こうした歌舞伎に熱を上げ歌舞音曲に明け暮れる江戸の華美な風俗は、東陽のほかの詩にも詠じられており、「江戸雑詠六首」(『詩鈔』巻九)と題する七絶(但し、実際は五首)の二首目には、

豔曲絃歌到處樓

豔曲絃歌 到處の樓

夙教兒女溺風流

夙に兒女をして風流に溺れしむ

劇場尤盪人心盡

劇場 尤も人心を盪^{うご}かし尽くす

百鍊剛為繞指柔

百鍊剛も指を繞^{めぐ}るの柔と為る

○豔曲絃歌

三味線に合わせて男女間の色恋をうたう歌。○風流

ここでは色恋をいう。○百鍊剛

ここでは、堅固な心の喩え。西晋・

劉琨「重ねて盧諶に贈る」詩(『文選』巻二十五)に「何ぞ意はん

百鍊剛、化して指に繞るの柔と為らんとは」と。

という。

当時の世相や風潮については、武陽隱士なる人物が文化十三年序の『世事見聞録』(岩波文庫に本庄栄治郎校訂・奈良本辰也補訂本を収む)の「歌舞伎芝居の事」において、「すべて武士を始め、世間一統に放蕩なるものは遊芸を好み、遊芸を好むものは極めて放蕩なり(中略)またその日過ぎの者までも、娘を持てば身上限りの遊芸を仕付くる事になり」、「末々町人は、娘さへ持てばまづ遊芸を仕込み、実子なきは養女などいたしてよき娘を拵ふる事を欲し、たとひ困窮人といへども歌浄瑠璃・三味線・踊り狂言・鼓・太鼓・胡弓などの稽

古致させ、生ひ育つを遅しと待ちかね、いまだ年の至らざるに、あるいは遊芸者といたし、あるいは閑い者とする事を急ぐなり」云々と、これを詳細に記述している。

東陽が伊賀上野で教授していたときの作、七絶「伊州雜賦、津城の知友に寄す二十首」其十二（『詩鈔』巻八）には、「人家女を養ふに絃歌に工ならざるを以て耻と為す。此れ則ち天下滔滔として、独り伊州のみならざるなり。吁かはいしい哉」と自注を附して、

直置閨門具禮難 直置に閨門 礼を具ふること難し

誰が家内則更堪觀 誰が家か内則更に観るに堪へん

三絃淫靡鵲兒玩 三絃淫靡にして鵲兒遊び

艷曲安教室女彈 艷曲安んぞ室女をして弾かしめんや

○直置 六朝以来の俗語。釈大典『詩語解』巻上に「直若・直置は只箇の一条他件を須ひざるを言ふなり」とし、「タダニモ」「タダサへ」

「タダニ」の和訓をあてて。○閨門具礼 家庭内に礼によるけじめがそなわっていること。『古文孝経』閨門章に「子曰く、閨門の内、礼を具ふるかな」と。○内則 家庭内のきまり。家庭生活の礼法。『礼記』に内則篇がある。○三絃 三味線。○鵲兒 妓女。明清の俗語『称谓録』巻三十、倡。○釈大典『学語編』巻上、人品類に、この語を挙げ「イウジョ」と左訓。○室女 嫁入り前のむすめ。

と詠んでいる。

東陽も武陽隠士同様、かかる風俗を決して快く思っていないかったことを窺わせる内容だが、さらに文政六年（一八二三）自序、同年刊の『孝経發揮』において広要道章の本文「風を移し俗を易ふるは樂より善きは莫し」（『風』に「ナラハシ」、〔俗〕に「シクセ」、〔樂〕に「ウタヒモノ」と左訓）に注して、

蓋し声樂の人を感ずること切なり。其の效、肌に淪し体に洩くして自ら知らざるに至る。所謂黙して風俗を成して潜に人心を移す者、其の理誼ふる可からざるなり。古者民間の俗樂は今の

優伶の為す所の如し。故に小民と雖も、以て風動感化す可くして風俗之が為に移り易るなり。窃に慨く近世歌舞する所は尤も鄙褻に禁へず、綺艶媚惑の辞を以て淫佚流盪の行ひを叙し、淫絃嘈雜之を駕して以て行ふ、皆姪を誨へ邪を誘ふ、毒を流し禍を貽するに非ざるは莫し。其の人心を盪し士氣を傷るの甚しきこと、百鍊の剛をして繞指の柔と為さしめ、風俗の壞る、勝て嘆ず可けんや。然りと雖も其の行はること既に久し。未だ以て驟に停む可けんや。若し其の淫声の甚しき者を去つて専ら孝悌忠義節烈の事を取つて、以て士氣を振るひ以て民俗を厲まさば、則ち今の樂、猶ほ古の樂のごとく、其の世道を鼓吹するに於いて、未だ必ずしも一助為らずんばあらざるなり。

○淪肌浹体 清朝の朱子学者、李光地の「樂を聞き徳を知る論」（『榕村全集』巻十五）に「言ふところは其れ性情に本づき、変化に流れ、其の效、肌に淪し体に洩くして自ら知らざるに至る」と。〔淪〕は、じわじわ染み込む。○所謂…… 前掲「樂を聞き徳を知る論」に「所謂黙して風俗を成し而して潜に人心を移す者、其の理誼ふる可からざるなり」と。○優伶 歌舞伎役者。○鄙褻 下品で猥褻。○淫佚 男女間のみだらな交際。○流盪 落ちぶれさまようこと。疊韻語。○淫絃 ここでは、煽情的な三味線の音色。○嘈雜 騒々しくうるさい。『抱朴子』外篇・刺驕篇に「或いは曲晏〔宴〕密集し、管絃嘈雜す」と。○百鍊剛 前掲、「江戸雜咏六首」其二の語釈参照。○鼓吹 勢い付け、奮い立たせる。

と述べ、長編叙事詩「孔雀東南飛行」（別名「焦仲卿の妻の為に作る」）および「木蘭の辞」に漢文による注解を施した『古詩大観』（文政十二年「一八二九」刊）に附した「追書古詩大観後」において、

夫れ男女の情、恩義の聚まる所、礼を以て之を節せずんば、性命を誤るに至る。近世流俗日に汚れ、淫風大いに煽り、人家の子女、口尚ほ乳臭、情實已に開き、踰牆鑽穴、動もすれば辱を

所生に貽す。乃ち非耦を以て事諸はす、進退維れ谷まらば、姪經双斃、自ら以て節と為す。蓋し沈魄浮魂、重ねて後身の縁を結ぶと云ふ。愚惑いて恥無く、醜も亦た甚だし矣。好事の閑漢、其の事を收拾し、歌曲を捏造す。艶語麗詞、巧みに人耳を悦ばしめ、冥果を粉飾し、愚俗を簫鼓し、紛紛木に災ひし、毒を里巷に流す。聞く者甘心す焉。是に於いて梨園の徒、遂に専ら淫戯を演じ、以て時好に投ず。風俗の頹、豈に慨嘆せざる可けんや。

○性命 天から授かったもちまえ(『易経』乾卦・彖伝)。○流俗 世間のならわし。『孟子』尽心下。○口尚乳臭 まだほんの子供。無知で世間知らず。もとは『漢書』高祖紀に見える。『故事成語考』身体に「口尚乳臭、世人年少の知無きを謂ふ」と。○情竇已開 すっかり情欲がきざす。色気づく。○踰牆鑽穴 かきねを乗り越え、壁に穴をあける。男女が人目を忍んで逢引すること。『孟子』滕文公下に「丈夫生まれては之が為に室(つま)有るを願ひ、女子生まれては之が為に家(おと)有るを願ふ。父母の心、人皆之有り。父母の命、媒妁の言を待たず、穴隙を鑽りて相窺ひ、牆を踰えて相従はば、則ち父母国人皆之を賤しまん」と。○所生 父母をいう。○非耦 夫婦ではないこと。もとは、婚姻の釣り合わぬことをいう(『左氏伝』桓公六年)。ちなみに『書言故事』卷一、婚姻類に「婚を成すを辞するを敢て非耦を辞すと曰ふ」と。○進退維谷 につきもさつきもいかなくなる。『詩経』大雅「桑柔」に見える語。○姪經双斃 首を括って心中する。○沈魄浮魂 死後をいう。人は死ぬと、「魂」は肉体を離れ天に上り、「魄」は屍とともに地に帰すとされた。○結後身縁 生まれ変わって来世で夫婦の縁をむすぶ。白居易の七絶「微之の十七のとき君と別る、及び朧月花枝の詠に和す」(『白氏文集』卷五十八)に「恐らくは君更に後身の縁を結ばん」と。○冥果 あの世での果報。○簫鼓 言葉巧みに惑わす。『書言故事』卷六、

讒佞類に簫鼓の条あり、「妄言衆を惑はす者を指して簫鼓と為す」とした上で、『莊子』駢拇篇に「天下の耳目を簫鼓す」というのを引く。○紛紛 雑多なさま。○災木 有害無益な書物を刊行する。災梨。(木)は、版木。○甘心 満足する。あるいは、あこがれる。○梨園徒 歌舞伎役者。

ということからも窺えよう。そもそも、かかる追書をしているのは、父親に代わって男装して戦に出た木蘭が手柄を立てて無事に郷里に戻ってくるという「木蘭の辞」については問題がないものの、「孔雀東南飛行」と言えば、その序に「漢末、建安中、廬江の小吏焦仲卿が妻の劉氏、仲卿が母の遺る所と為り、自ら誓って嫁せず。其の家、之を逼る。乃ち水に没して死す。仲卿之を聞き、亦た庭樹に自縊す。時人之を傷み、此の辞を作るなり」というように、婚家の姑から憎まれ無理やり離縁させられ実家から再婚を迫られた元夫婦が暗に示し合わせて互いに自死するといった内容であることから、それを配慮しての措辞でもあるわけだが、ここに述べられているのは江戸での体験によつて生まれたものではなくとも、より強められた認識であろう。だからといって、東陽自身が歌舞音曲や芝居そのものを敵視したり否定したりしているわけではなかった。伊賀上野での作、七絶「扮戯を観る」詩(『詩鈔』卷八)には我が子と一緒に歌舞伎を観て「世態人情無限の事、老淚拭いて還た催すを禁ぜず」と詠んでいる。それはともかく、東陽が江戸の風俗を詠じた作を南畝に示したのは、おそらく南畝の原作がそうした内容であったのに酬答したことにもよるだろうけれども、もとより南畝を雅俗に通じ江戸文化を体現している代表とみなしていたことが大きかったのであるまいか。そして詩題にわざわざ「戯れに」と加えて冗談めかし、非難がましい口吻に受け取られないよう配慮したのであろう。

ところで、南畝の『杏園詩集』卷五(『大田南畝全集』第五卷所収)

に「洞津の津坂逢拙脩、都下の諸賢を邀へ、百川樓に宴す。時に歴代絶句類選刻新たに成る」と題する七絶が二首ある。

瀬與洞津々與瀬 勢と洞津と 津と勢と

互為唇齒以財雄 互ひに唇齒と為つて財を以て雄なり

書窓別有陳詩者 書窓別に詩を陳ぬる者有り

唐宋元明清國風 唐宋元明清國の風

○勢 伊勢。○洞津 津のこと。○唇齒 互いに持ちつ持たれつとの密接な關係。『左氏伝』僖公五年に「諺に輔車相依り、唇亡びて齒寒し」と謂ふ所の者は、其れ虞・虢の謂なり」と。○陳詩 もとは地方の歌謡を採取して民の風俗を観察する意。『礼記』儒行篇に「大師に命じて詩を陳ね、以て民風を観る」とあり、鄭玄の注に「詩を陳ぬとは、其の詩を采りて之を視る」と。

又

送春詩酒會名流 春を送つて詩酒 名流を会す

新著編成任客求 新著編成つて客の求むるに任す

欲讀子雲千首賦 子雲千首の賦を読まんと欲すれば

須登東海百川樓 須らく東海の百川樓に登るべし

○送春 白居易に「三月三十日、春帰り日復た暮れる」と始まる「春を送る」詩（『白氏文集』巻十）がある。○子雲云々 東陽の「歴代絶句類選序」（『文集』巻一）に「昔桓君山、賦を楊子雲に学ぶ、子雲、千首の賦を誦せしむ」と。（桓君山）は後漢・桓譚（字は君山）、

（楊子雲）は前漢・揚雄（字は子雲）のこと。桓譚『新論』（『意林』

卷三所引）に「楊子雲賦に工なり。（中略）子雲曰く、能く千首を

読まば則ち賦を善くす」と。また『西京雜記』に「或ひと楊雄に賦

を為ることを問ふ、雄曰く千首の賦を読まば乃ち能く之を為さん」と。

其一の起句と承句は俗謡の歌詞「伊勢は津でもつ津は伊勢でもつ、

尾張名古屋は城でもつ」をふまえた表現。

この詩は、東陽の子、拙脩が唐宋元明清の七絶を主題別に選んだ

『歴代絶句類選』の出版記念の祝宴を日本橋浮世小路の料亭百川で開いたというもので、其二の「送春」の語を文字通りに解釈すれば、文化十二年三月晦日の作となる。南畝の「取得書誌」（『全集』巻十九）には丙子（文化十二年）の条に『今四家絶句』二巻とならんで『歴代絶句類選』二巻が見える（ちなみに『大阪天満宮御文庫国書分類目録』に文化十一年刊本「稽古精舎藏版」を記載するが、未見）。これは全部で二十一巻になる『（歴代）絶句類選』のうち最初の二巻を開版したものであろうか。全巻が上梓されるのは、文政七年（一八二四）のことである。

津坂治男氏によれば、拙脩は天保八年（一八三七）に五十餘歳で卒したというから、この時、齡三十は越えていたと思われる。この宴は、かねて我が子拙脩の協力のもと歴代絶句の選集編纂を進めていた東陽が、江戸出府を絶好の機会とみて、とりあえず最初の二巻を急遽開版し、拙脩を江戸の詩人や文人墨客に披露紹介する意図を込めて催したものではなかったかと愚考するのだが、如何であろう。

※大田南畝の評伝については、濱田儀一郎『人物叢書 大田南畝』（吉川弘文館、昭和三十九年。新装版は昭和六十一年）、沓掛良彦『ミネルヴァ日本評伝選 大田南畝』（ミネルヴァ書房、平成十九年）参照。濱田儀一郎・中野三敏・日野龍夫・掛斐高編による『大田南畝全集』（岩波書店、昭和六十一〜平成二年）がある。

龜田鵬斎（宝暦二年〔一七五二〕〜文政九年〔一八二六〕）

名は翼、後に長興、字は釋龍。通称は文左衛門。鵬斎は、その号。

江戸の人で、父は日本橋にある鼈甲商の番頭。井上金峨（享保十七年〔一七三二〕〜天明四年〔一七八四〕）に学んだ。同年の山本北山

とは同学。東陽より五歳上。寛政異学の禁に反対し、生涯、市井の

儒者として、その立場を貫いた。

下谷金杉中村に鵬斎の寓居を訪ねた詩がある。五絶「夜、鵬斎丈

人を訪ぬ」詩(『詩鈔』巻六)がそれで、文化十二年の作。

叡麓斜北廻、林巷自風致 叡麓 斜北廻り、林巷自ら風致あ

燈影漏竹房、幽人寐不寐

燈影 竹房より漏る、幽人寐ぬる
や寐ねずや

○叡麓 東叡山上野寛永寺のふもと。○林巷 中唐・銭起の五古「小園招隱」詩に「斑衣林巷に在り、始めて覚ゆ羈束無きを」と。○風

致 おもむき。○竹房 竹林にある房室。あるいは竹で作った家。初唐・宋之間の五古「法華寺に遊ぶ」詩に「竹房閑にして且つ清し」と。○幽人 隱士。『易経』履卦に「道を履む坦坦たり、幽人貞にして吉」と。

〈丈人〉とは、老人に対する敬称。東陽が江戸で出会った自分より年長の人物のうち、鵬斎に対してのみこの語を用いていること、また鵬斎の「儒侠」(後出の菅茶山が鵬斎との奇遇を詠じて神辺の廉塾に留守居する北条霞亭に報じた「余、亀田鵬斎と未だ始めは相識らず……」詩に「儒侠の名は旧く耳に在り」とある)としての一面ではなく、孤高の隱者風にこれを詠じているのが、興味深く思われる。

※亀田鵬斎については、鈴木英治『亀田鵬斎』(近世風俗研究会、昭和五十三年。後に三樹書房より昭和六十年に再刊)、同じく『亀田鵬斎詩文書画集』(三樹書房、昭和五十七年)、亀田鵬斎の世界』(三樹書房、昭和六十年)、倉田信靖・橋本栄治『叢書・日本の思想家 25 井上金峨・亀田鵬斎』(明徳出版社、昭和五十九年)、渥美國泰『鵬斎と江戸化政期の文人達』(藝術出版社、平成七年)、徳田武注『江戸漢詩選Ⅰ文人』(岩波書店、平成八年)参照。なお、徳田氏の『江戸詩人伝』(ぺりかん社、昭和六十一年)には論考「亀田鵬斎」を収める。

朝川善庵(天明元年「二七八二」〜嘉永二年「二八四九」)

名は鼎。字は五鼎。善庵は、その号。江戸の人。実父は片山兼山。

兼山亡き後、母が朝川黙斎に再嫁し、黙斎に養われた。東陽より二十四歳下。十五歳上の大窪詩仏とは山本北山の奚疑塾に学んだ同門で、詩仏の『西游詩草』に序を寄せている。

七絶に「朝川五鼎に別る」詩(『詩鈔』巻九)がある。文化十二年の作。

相逢雖則自今春 相逢ふは今春自りすと雖則も

意氣相投似故人 意氣相投すること故人に似たり

遠信月三憑邸便 遠信 月に三たび邸便に憑る

斯文講究是比隣 斯文講究是れ比隣

○故人 旧友。○邸便 江戸の藩邸からの定期便。○斯文 儒学。

○比隣 隣同士。

これを見ると、善庵とは一度ならず顔を合わせたようで、すっかり意気投合したらしい。

当時、善庵はすでに『古文孝経定本』(文化六年「二八〇九」刊)および『古文孝経私記』(文化八年刊)の著があり、同じ『孝経』でも今文を善しとする東陽とは見解を異にするものの、経義を講究するのに相応しい相手と認めたのであろう。善庵は文政元年(一八一八)十月、津藩の江戸藩邸に召し出されたが、これは東陽の藩主藤堂高兌への推挙によるという。

※朝川善庵については、佐藤一斎に「朝川善庵墓碑銘」(『事実文編』巻六十二)がある。森銑三「朝川善庵」(『森銑三著作集第八巻 人物篇』中央公論社、昭和四十六年)も参照。

異土での邂逅——菅茶山・頼杏坪・川合春川・梯箕嶺

菅茶山（延享五年「二七四八」～文政十年「二八二七」）

名は晋帥^{ときりのり}、字は礼卿。通称は太沖。茶山は、その号。備後神辺の人。東陽より九歳上。

『福山志料』編纂のため藩侯の命により、文化十一年六月五日江戸に入り、翌十二年二月末までこの地に滞在していた。茶山にとっては文化元年（一八〇四）以来、十年ぶりの再遊である。詩人として赫々たる名声のあった茶山は東都で歓迎され連日応接に暇がないほど文人墨客と宴遊を重ねていたが、なかでも九月二十日、日本橋は百川楼に赴く途上での亀田鵬斎との奇遇は、詩壇の佳話として谷文晁の描くところとなり世間に大いに喧伝された。その茶山とは、前稿「覚書・津阪東陽とその交友（一）安永・天明期の京都」で言及したように東陽が京都に居住した時期に一度詩の応酬があったものの、実際に顔を合わせる機会はなかったようである。それがこのたび江戸で巡りあうことになった。東陽の喜びはひとしおであったのだろう、「菅礼卿に邂逅す」と題する作が、五律と七律とでそれぞれ詠まれている。

そのうち五律（『詩鈔』卷三）には、

關西老夫子、盛徳却如癡

し

官納治安策、人驚絶妙辭

官は納む治安の策、人は驚く絶妙の辭

新知翻恨晩、後晤預為期

新知翻^{かへ}つて晩^{おそ}きを恨み、後晤^{あとあひ}預め期を為す

共悲遲暮客、且傾金屈卮

共に悲しむ遲暮の客、且^{しば}し傾けん

金屈卮

○関西老夫子（老夫子）は、老先生。○盛徳 孔子が周にゆき老子に礼を問おうとした時、老子のいった言葉に「君子盛徳、容貌愚の若し」と（『史記』老莊申韓列伝）。○治安策 前漢の賈誼は文帝に治安策を上った（『漢書』賈誼伝）。○新知 新しい知己。『楚辭』九歌「少司命」の「樂しみは新たに相知るより樂しきは莫^なし」から出る語。晋の陶潜「食を乞ふ」詩に「情に新知の歎しみを欣^{よろこ}び、言詠して遂に詩を賦す」と。○後晤 これから先、語り合う機会。○遲暮 人生の暮れつ方。晩年。古くは『楚辭』離騷に見える語。○金屈卮 晩唐・于武陵の五絶「勸酒」（『唐詩選』卷六）に「君に勸む金屈卮、満酌辭するを須^{もち}ひず」と。

とあり、第二句は丸顔で一見すると田舎の好々爺じみた茶山の風貌に接してかく評する。七律（『詩鈔』卷五）には、次のように云う。

久想美人天一方

久しく美人を想ふ天の一方

西來紫氣接清揚

西來の紫氣 清揚に接す

儒林德望推經世

儒林の德望 經世を推し

菰苑風流占擅場

藝苑の風流 擅場を占む

便覺心中消鄙吝

すなは 便ち覺ゆ心中 鄙吝消え

徒慙舌本苦乾彊

徒だ慙^はづ舌本 乾彊に苦しむを

相留此座真堪惜

相留りて此の座 真に惜しむに堪ゆ

珍重好餘三日香

珍重す好く餘す三日の香

○美人 うるわしき人。君子の喩え。ここでは、茶山を指す。後漢・張衡の「四愁詩四首」（『文選』卷二九）の序に「屈原は美人を以て君子と為す」と。○天一方 前漢・蘇武の作とされる「詩四首」其四（『文選』卷二十九）に「良友遠く離別し、各々天の一方に在り」と。○紫氣 老子が函谷関にやって来たとき紫色の氣が見えたという（『列異伝』）。杜甫の七律「秋興八首」其五に「東來の紫氣函関に満つ」と。ちなみに、『書言故事』卷三、訪臨類に「瞻紫氣」を

挙げ、「朋友の至るを候ふを紫気の来るを瞻みると云ふ」として、老子の故事を引く。○清揚 すずやかな目もと。『詩経』鄭風「野有蔓草」に「美なる一人有り、清揚婉かなたり。邂逅して相遇はば、我が願ひに適かなはん」と。毛伝に「眉目の間の婉然として美しきなり」と。

○儒林徳望 前に挙げた「南川士長を哭す」詩にも「儒林の徳望国家の光」と。○藝苑 藝文の世界。詩壇。韓愈「復志の賦」（『韓昌黎集』巻一）に「朝に書林に騁う驚し兮、夕に藝苑に翱翔す」と。○鄙吝 いやしい心ばえ。『世説新語』德行篇に「周子居（周乗）常に云ふ、吾れ時月（数か月）黄叔度（黄憲）を見ざれば、則ち鄙吝の心、已に復た生ず」と。○舌下 舌の根。『世説新語』文学篇に「殷仲堪云ふ、三日道徳経を読まざれば、便ち舌下間強す」と。○乾彊 こわばる。○三日香 後漢・荀彧はその衣服の香が三日たつても消えなかったという。『襄陽記』（『太平御覽』巻七〇三に引く）に「荀令君、人家に至り、坐する処三日香る」と。

もつとも、東陽が茶山といつどこで顔を合わせたのかは、はっきりしない。津坂治男氏がその両著において東陽と茶山と出合いを文化十一年の九月二十六日と推定されるのは、おそらく後に挙げる富士川英郎『菅茶山』に、この日の午後茶山が大窪詩仏の詩聖堂を訪ねた記述が見えることによるのであろう。しかしながら、そこに東陽の名は出て来ない。東陽が津にもどつてからの作、五絶「菅太冲に寄す」詩（『詩鈔』巻六）に、

江山千里別、風月輒思君

ふ

邂逅今春恨、為歡不十分

分ならず

○江山 『南齊書』劉善明伝に「南匈奴相去ること千里、問たつるに江山を以てす。人生寄するが如し、来会何れの時ぞ」と。○風月 清風明月。明・王人鑑の五律「草衣道人の書を得」詩に「朗月輒た君

を思ふ」と。

と詠じられているのを見れば、茶山との出会いは文化十二年春ということになり、しかも残念ながら心ゆくまでじっくり歓談する暇いとまがなかったことが窺われる。

ところで、茶山のこのたびの江戸出府中の詩作は、その『黄葉夕陽村舎詩後篇』（文政六年「一八二三」刊）の巻五・六に収められ、また「東征歴」（『東遊曆』）と題する日記があり、それには当地での文人墨客や儒者との活発な交流が窺われるものの、東陽との応酬の作は見あたらない（但し「東征歴」は未見。富士川英郎『菅茶山』に引くのに拠る）。だが、『後編』巻五には、文政十一年八月の作「二十日の夕べ、平井可大招飲す」と題する七古がある。

曾聞柴子說君賢 曾かつて柴子 君が賢を説くを聞く

想慕徒過十餘年 想慕徒いたづらに過ぐ十餘年

再遊逢人先相問 再遊 人に逢へば先づ相問ふ

忽辱敲門驚午眠 忽ち門を敲たたき午眠を驚かすを辱かたじけなうす

鬱其音吐温其貌 鬱だんだたる其の音吐 温ぬくまる其の貌

更見前度所未聞 更に前度未だ聞かざる所を見る

過從幸在里閑近 過り從幸りひに里閑の近きに在り

尤喜中秋同泛船 尤も喜ぶ中秋同じく船を泛うかべしを

此日折簡招朋舊 此の日 折簡 朋旧を招く

符郎行酒君羞鮮 符郎 酒を行ひ 君 鮮を羞すむ

尊前道故真樂事 尊前 故かたを道る 真の樂事

獨傷柴子就新阡 獨り傷む柴子新阡に就くを

庭池夜明がうにして月未だ上らず

嗷嗷往雁がう 遙天に迷ふ

歡時豫あらかじ惹別時の恨を惹ひく

呉雲秦樹路三千 呉雲秦樹 路三千

君在羈絆我衰老 君は羈絆に在り我は衰老

奈何後期屬茫然 奈何せん後期茫然に属するを

○柴子 柴野栗山を指す。○鬱 盛んなさま。○温 和やか。○前度 前回。○過從 往き来する。○里閨 ここでは、町内。〈閨〉は、(町内の) 木戸。○折簡 短い手紙。『古今類書纂要』卷十一、人事部に、この語を挙げ、「朋友を邀ふるの書なり」と。○朋旧 仲間や旧友。○符郎 可大の子息をいう。おそらくは長子の簡。〈符〉は、中唐の文豪、韓愈の子の名で、五古「符、城南に説書す」詩(『韓昌黎集』卷六、『古文真宝』前集)がある。○行酒 酒を注いでまわる。○羞鮮 酒肴を勧める。○尊前 酒宴の席上。○道故 友人同士が昔話をする。『史記』滑稽列伝、淳于髡伝に「若し朋友交遊し、久しく相見ず、卒然として相觀、飲然として故を道ひ、私情相語る、飲むこと五六斗可りにして徑に醉はん矣」と。○就新阡 亡くなった間もないことをいう。〈阡〉は、墓道の意。栗山は文化四年(一八〇七)十二月に、七十二歳で卒した。○嗷嗷 雁の鳴き声。『詩經』小雅「鴻鴈」に「鴻鴈于飛、哀鳴嗷嗷」と。○吳雲秦樹 友人と遠く離れていること。またはるか遠くにいる友。杜甫が渭水の北、長安にいて江東の李白を思い出して詠んだ五律「春日李白を憶ふ」詩に「渭北春天の樹、江東日暮の雲」と。○路三千 晩唐・顧非熊の五排「情を陳べ鄭主司に上る」詩に「秦城春十二、吳苑路三千」と。○羈絆 束縛されること。宮仕えの身をいう。〈羈〉は、羈と同じ。○後期 これから先、会う機会。晩唐・方干の五律「沛県司馬丞の任に之くを送る」詩に「羈遊故交少なく、遠別後期難し」と。

十年前、江戸に出てきたおり、今は亡き柴野栗山から澹所が賢明な人物であると聞いて、このたび是非とも会いたいと念じていたという。十五日の仲秋にはこの平井澹所それに彼の親友黒沢雪堂と三人で佃口に舟を浮べて名月を愛でていた(『後編』卷五、七律「十五夜、黒澤・平井二子と舟を佃口に泛ぶ……」詩)。そして二十日には可大

の自宅に招待されたというわけである。ちなみに、茶山の和文隨筆『筆のすさび』(安政四年「一八五七」刊)には、「火煙に取りまかれたる時は、土に顔をあて、をるべきよし、平井直蔵が話なり」と記した箇所があり、澹所との四方山話の一端が窺える。

ところが、澹所の幼馴染である東陽はと言えば、先に見たように澹所が東陽のもとを訪ねて来たことはあっても、その自宅に招いたり自分の知友を引き合わせたりしたことを窺わせる作は東陽の側には見あたらないのである。少なくとも遠来の幼友達を家に招待するくらいのことは、当然あつてしかるべきだろうと思うのだが、そうした形跡はない。

さらに茶山は、寛政の三博士のうち柴野栗山・尾藤二洲(文化十年「一八二三」没)亡きあと今や学界の大立者となっていた幕府儒官の古賀精里と会い詩の応酬をしているのだが、精里とはかつて在京時代に知り合っていて七律「夏夕小倉御にて古淳風に和す」(『詩鈔』卷四)や七絶「古賀淳風の佐賀に帰るを送る」(『詩鈔』卷七)の作がある東陽が精里と再会を果たした様子は見られない。

東陽がはなから澹所の家族や交友関係に興味がなく、また面識のある精里に会いたいとも思わなければ話は別だが、もしそうしたことに些かなりとも関心を示していたとすれば、それが叶えられなかったということであろう。おそらくそれは、東陽の都合というより、澹所や精里側の事情によつたものではないかと推測されるのである。そこには学派学統の問題が絡んでいるのかも知れない。精里や澹所は純然たる朱子学の人である。これに対して東陽は古学を学び折衷の立場をとる。こうした背景もあつたように思われる。そして、そのことが大窪詩仏に対して洩らした「窮し来りて偏に見る人情の薄きを、老い去きて深く知る世味の酸なるを」という述懐になつて表現されているのではなからうか。

※菅茶山については、前稿に挙げたほかに今関天彭「菅茶山(上)(下)」

〔「雅友」第三十・三十一号、昭和三十一年九月・十二月。『江戸詩人評伝集1』に収録〕があり、江戸での事跡は、富士川英郎「菅茶山」下（福武書店、平成二年）の132～152頁に詳しく述べられている。また『筆のすさび』は、日野龍夫氏による校注が新日本古典文学大系「仁斎日札 たわれ草 不尽言 無可有郷」（岩波書店、平成十二年）に収められている。

なお柴野栗山・古賀精里については、前稿に挙げたほかに今関天彰「柴野栗山（上）（下）」（「雅友」第五十・五十一号、昭和三十五年十二月・三十六年二月。『江戸詩人評伝集1』に収録）がある。また尾藤二洲についても、今関天彰「尾藤二洲（上）（下）」（「雅友」第五十二・五十三号、昭和三十六年四月・八月。『江戸詩人評伝集1』に収録）がある。但し、この人と東陽との直接的な関わりは確認できない。

頼杏坪（宝暦六年「一七五六」～天保五年「一八三四」）

名は惟柔、字は千祺。杏坪は、その号。安藝竹原の人。春水の弟。東陽より一歳上。

『詩鈔』巻九に七絶「頼千祺の安藝に帰るを送る二首」がある。詩の配列および内容からすれば、文化十一年秋、東陽が江戸に在って杏坪の帰国を送った作ということになるが、後に挙げる重田定一『頼杏坪先生伝』や木崎好尚『百年記念 頼杏坪先生年譜』には、杏坪が文化十一年に江戸に赴いたという記述はない。またこの時期、杏坪とも親しかった菅茶山が在府しているが、この兩人が江戸で会ったという形跡は見あたらず、その意味では些か疑問がのこる。

秋風帰興旅装輕	秋風帰興	旅装輕し
長路關山片月明	長路関山	片月明らかなり
五十三亭行盡處	五十三亭	行き尽くす処
故園猶是半分程	故園	猶は是れ半分の程

○秋風帰興 晋の張翰（字は季鷹）が秋風立つころ故郷である呉中の菰菜・蓴羹・鱸魚の膾（なます）を思い出し、官職を捨てて帰郷した故事（『世説新語』識鑒篇、「晋書」文苑伝・張翰伝）。『蒙求』巻下の標題に「張翰適意」がある。○五十三亭 東海道五十三次。

其二

路入山陽泛海安 路は山陽に入って海に泛ぶこと安らかに
 涼天風色靜波瀾 涼天の風色 波瀾靜かなり
 客船秋興鱸魚膾 客船の秋興 鱸魚の膾
 擊楫長歌醉裡看 擊楫の長歌 醉裡に看る
 ○山陽 山陽道。○涼天 秋。中唐・韋応物（五絶「秋夜、丘二十二員外に寄す」詩（『唐詩選』卷六）に「君を懷ふは秋夜に属す、散步して涼天に詠ず」と。○風色 風景、景色。○擊楫（楫）は、船のかい。○看 聴く。

なお、この詩には其二の後に「江戸より広島に抵る二百餘里、路は京畿を経、適に半程に当たる。大阪自り海に浮かび、播及び三備を歴す。即ち山陽道なり」という自注が附されている。

※頼杏坪の伝記については、重田定一『頼杏坪先生伝』（積善館、明治四十一年）があり、年譜に木崎好尚『百年記念 頼杏坪先生年譜』（山陽会、昭和九年。後に「江戸風雅」第八号、平成二十五年に再録）がある。またその詩業を論じたものに今関天彰「頼杏坪（上）（下）」（「雅友」第三十六・三十七号。昭和三十七年三・六月。『江戸詩人評伝集1』に収録）がある。

川合春川（寛延二年「一七四九」～文政七年「一八二四」）

名は衡または考衡、字は襄平または丈平。春川はその号。美濃高須の人。京で龍草廬に学び、安永九年、三十にして紀州徳川家に仕えた。東陽より八歳上。江戸出府中の茶山と頻繁に交流があったこと、富士川氏の『菅茶山』に見える。

文化十二年の作に五律「川襄平の国に還るを送る」(『詩鈔』卷三)がある。

博物古君子、詩觀大國風

博物 古の君子、詩は觀る大國の風

新知歡未盡、遠別恨無窮

新知 歡未だ尽くさざるに、遠別恨み窮まり無し

關樹秋雲外、山程暮雨中

關樹 秋雲の外、山程 暮雨の中に共々憐れむ衰老の客、安くんぞ重

共憐衰老客、安得重相同

ねて相同じうするを得ん

○博物 博學多識。春秋晉の平公が鄭の子産(公孫僑)の言を聞いて「博物の君子なり」と評した(『左氏伝』昭公元年)。○大國 こ

こは五十五万五千石の紀州藩を指す。○恨無窮 中唐・劉長卿の七

律「李録事兄の襄鄧に帰るを送る」詩に「天涯此の別れ恨み窮まり

無し」と。○関樹 関所の樹木。○山程 山あいの街道。○安得 (実

現困難なことに對する)強い願望を表す。なんとか……したい。

自注に「紀藩の侍講。余に長ずること数歳」と。ちなみに、文化十

年(一八一三)に古賀精里および春川の序を附した伊藤海嶠編『南

紀風雅集』二巻が刊行されている。

※川合春川については、菊池五山の文化三年(一八〇六)の序を附

した『勢遊艸』の影印が『紀行日本漢詩第二集』(汲古書院、平

成三年)に収められており、佐野正巳氏の解題参照。『南紀風雅集』

は『詞華集日本漢詩第十巻』(汲古書院、昭和五十九年)に影印

を収め、同じく佐野氏の解題に『紀伊国人物誌』の小伝を挙げる。

梯箕嶺(明和五年「一七六六」)文政二年「一八一九」

名は隆恭、字は季札。箕嶺は、その号。久留米の人。初め江戸に

遊學した後、筑前福岡の亀井南冥(名は魯、字は道載。寛保三年

「一七四三」)文化十一年「一八一四」に師事。京に出て三四過ごし、

天明八年(一七八八)藩枝修道館の儒員となった。東陽より九歳下。この人も江戸出府中の茶山と交流があった。

文化十二年の作に五律「梯文学の豊に帰るを送る二首」(『詩鈔』卷三)がある。

萍水他郷客、歸期恨悵然

萍水 他郷の客、帰期 恨み悵然たり

睽離忽明日、會晤更何年

睽離 忽ち明日、會晤 更に何れの年ぞ

孤月黃山道、長雲紫海天

孤月は山道を黄にして、長雲は海天を紫にす

詩篇時遣興、風便好相傳

詩篇 時に興を遣り、風便あらば好し相伝へよ

○萍水 旅先で偶然出会う。初唐・王勃「滕王閣の序」(『古文真宝』後集)に「萍水相逢ふ、尽く是れ他郷の客」と。○他郷客 他郷に

ある身。杜甫の五排「白帝城に上る二首」其一到「酔いを取る他郷

の客、相逢ふ故国の人」と。○悵然 傷み悲しむさま。○睽離 背

き離れる。別離。韓愈・孟郊「納涼聯句」に「子と昔睽離す」と。

○会晤 顔を合わせて語らう。○長雲 長くかかる雲。盛唐の王昌

齡「從軍行」其四に「青海長雲 雪山を暗くし、孤城遙かに望む玉

門関」と。○遣興 憂さ晴らしをする。杜甫の五律「惜しむ可し」

詩に「心を寛くするは応に是れ酒なるべし、興を遣るは詩に過ぐる

莫し」と。○風便 順風。晚唐・羅隱の七律「秋日、姑蘇の曹使君

に寄する有り」詩に「水寒くして双魚の信を見ず、風便惟だ聞く五

袴の謳」と。ここでは便りの意に用いる。

其二

青衿疇昔友、短髮共皤皤

青衿 疇昔の友、短髮 共に皤皤たり

相遇論心少、一生分手多

相遇ふも心を論ずること少く、一

雲峰陵鳥道、風浪傍龍渦

生手を分つこと多し
雲峰 鳥道を陵^{しほ}ぎ、風浪 龍渦に傍^そふ

望斷天涯別、音塵更若何

望斷す天涯の別れ、音塵更に若^{いかん}何せん

○青衿 書生。『詩経』鄭風「子衿」の「青青たる子の衿」から出た語。○疇昔 その昔。○短髪 薄くなった髪。○皤皤 髪の白いさま。○論心 胸のうちを語り合う。李白の七古「王十二の寒夜独酌、懷有りに答ふ」詩に「君と心を論じ君が手を握る」と。○分手 別離する。六朝梁・沈約「范安成に別る」詩（『文選』巻二十）に「生平少年の日、手を分かつも前期を易しとす」と。○鳥道・龍渦 盛唐・岑参の五古「健為に赴きて龍閣道を経^ふ」詩（『岑嘉州詩集』巻三）に「汗流れて鳥道を出、膽碎けて龍渦を窺ふ」と。（鳥道）は、鳥の通い路。（龍渦）は、深い水淵。○望斷 視界から消えるまでながめる。○音塵 音信。六朝宋・謝莊「月の賦」（『文選』巻十三）に「美人邁として音塵^か闕き、千里を隔てて明月を共にす」と。其二に「青衿疇昔の友」と述べていることからすれば、箕嶺とは東陽が京にいた安永・天明朝に知り合ったと考えられるが、詳しいことは不明。

* 箕嶺について、『久留米市誌』下巻（久留米市役所、昭和七年）参照。

おわりに

以上、本稿では東陽の江戸滞在期における展墓の作ならびに詩人や文人墨客との交友を示す詩を取り上げてきた。

竹馬の友で桑名藩儒の平井澹所との三十数年ぶりの再会を果たした後、国元の妻が逝去するという不幸に見舞われ喪に服していた関

係もあつてか、当地での交友は歳が改まつてから活発になるのだが、その際、東陽にとって一番の収穫は十一歳下の大窪詩仏との出会いであつたろう。そして、その詩仏を通して更に新たな人の輪が広がったように思われる。在京時代からその盛名を聞き及んでいた菅茶山とも顔を合わせることができた。その一方で、江戸の学界でそれなりの地歩を築いているはずの澹所からその交友関係を紹介された形跡が見当たらないのは、どうしたわけであろうか。今や官学派の最高実力者となつている古賀精里とは安永の昔にかつてともに巨椋池に遊んだことがあつたのに、面会を果たさずに終わった。そこには「寛政異学の禁」の餘波ともいふべき学派学統の問題が微妙に絡んでいるのかもしれない。

さらには、歌舞音曲に明け暮れ歌舞伎に熱を上げる江戸の華美な風俗をまのあたりにしたことも、東陽にとっては得難い体験にちがいない。そのことは、『孝経發揮』広要道章の注や『古詩大観』に附した「追書古詩大観後」に色濃く反映されている。

なお、交友関係でいえば、本稿および前稿で取り上げなかった他の人物、例えば橘南谿・大原雲卿などについても、いづれ補遺として書き留めておきたい。今回はこれまでに増して調べが足らず、詩文の読みも心もとない文字とおりの蕪稿であつて不備な点が多いが、万が一にでも博雅の士の目に留まり、ご教示を忝うすることができれば、幸いである。

* * *

【資料篇①】

伊藤東涯「義士行」（『紹述先生文集』巻二十一）

一片義氣蓋壤間、白虹貫天氣如神。碧血千年磨彌明、誰識而今目擊真。憶昔匠作犯不韙、杜郵期迫命委塵。忿瀦不散身先隕、宿草空掩夜臺春。遺臣四散宗兵盡、喬木青社事亦新。一夫倡義衆左袒、糾率

四十又六人。深謀秘算誰能覺、東漂西羈飽艱辛。詭迹曾逃花柳巷、託名暫竄屠酤津。張郎*未得狙擊便、武陽欲進徒逡巡。仇家一旦弛警備、方夜酣醺會衆賓。謀人速報好消息、抹額袴褶束裝頻。四更更盡寒漏徹、梯屋斧闌驚四鄰。冥搜炬索認暗號、利戟快刀地燭燐。主人竄伏不知處、人氣餘燄在臥茵。行履尋到新炭廠、甘心始得宿憤伸。慇懃祭首舊主墓、誰何無人夜向晨。投牒有司去自首、進止唯命件件陳。有司執法且拘繫、東武官邸託四鎮。朝野自是爭嘩傳、萬口齊唱是忠臣。諸鎮聞忠館待厚、留止荏苒十旬餘。公義私情難兩全、盤水加劍俱殉身。君不見古來參養偷生者、賣降投款每相因。了得是君未了事、千古公論不可泯。

*郎は、良の誤字か。

(一片の義氣 蓋壤の間、白虹天を貫き 氣 神の如し。碧血千年磨して弥々明らかなり。誰か識らん而今 目撃真なるを。憶ふ昔 匠作 不韙を犯し、杜郵期迫り命 塵に委ぬ。忿瀆散ぜず身先づ隕ち、宿草空しく掩ふ夜台の春。遺臣四散し宗兵尽き、喬木青社 事亦た新たなり。一夫義を倡へ衆左袒し、糾率す四十又六人。深謀秘算誰か能く竟らん、東漂西羈 艱辛に飽く。迹を詭りて曾て逃る花柳の巷、名を託して暫し竄す屠酤の津。張良未だ得ず狙撃の便、武陽進まんと欲して徒に逡巡。仇家一旦警備を弛め、夜に方つて酣醺衆賓を会す。謀人速に報ず好消息、抹額袴褶束裝頻なり。四更更尽きて寒漏徹す、屋に梯に闌に斧して四鄰を驚かし、冥搜炬索 暗号を認む。利戟快刀 地燭燐、主人竄伏 処を知らず。人氣の餘燄 臥茵に在り。行履尋ね到る新炭廠、甘心始めて宿憤の伸ぶることを得。慇懃首を祭る旧主の墓、誰何人無く夜 晨に向ふ。牒を有司に投じ去きて自首す、進止唯命 件件陳ぶ。有司執法且つ拘繫、東武の官邸 四鎮に託す。朝野はれ自り争つて嘩伝、万口齊しく唱ふ是れ忠臣。諸鎮忠を聞き館待厚し、留止荏苒十旬餘。公義私情兩つながら全くし難し、盤水劍を加へて俱に身を殉ず。君見ずや古來參養生を偷む者、売降投款 毎に相因る。是の君が未だ了ぜざる事を了し得て、

千古の公論(は)ぶ可(から)ず。)

○蓋壤 天地。○白虹貫天 精誠が天を感動させる。『史記』魯仲連鄒陽列伝に「昔者荆軻燕丹の義を慕ひ、白虹日を貫き、太子是れを畏る」とあり、裴駰『集解』に応劭の「精誠天を感ぜしめ、白虹之が為に貫日を貫くなり」というのを引く。○碧血 『莊子』外物篇に「荄弘、蜀に死し、其の血を蔵す、三年にして化して碧と為る」と。中唐・李賀『秋来』詩に「恨血千年土中の碧」と。○而今 如今。いま。○目撃 目のあたりにする。『莊子』田子方篇に「目撃して道存す矣、声を容る可からず」と。○匠作 浅野内匠頭のこと。○犯不韙 よくないことをしでかす。『左氏伝』隱公二年に「五不韙を犯して以て人を伐つ」と。○杜郵 戦国秦の名將白起が秦王から死を賜った地(『史記』白起王翦列傳)。○忿瀆 鬱積すること。『莊子』達生篇に「夫れ忿瀆の氣散じて反らざれば、則ち足らずと為す」と。○宿草 一年たつた草。『礼記』檀弓上に「朋友の墓、宿草有れば、而ち哭せず焉」と。○夜台 墓あな。○宗兵 一族の兵。○喬木 故国をいう。『孟子』梁恵王下に「所謂故国とは、喬木有るの謂を謂ふに非ざるなり。世臣有るの謂なり」と。○青社 周代、四方の諸侯を封じた際、その土地の色の土を白茅に包んで与え、諸侯は社を立てたという。○一夫倡義(倡は唱と同じ。○左袒 左の片肌をぬぐ。賛同する意(『史記』周勃伝)。○張良 漢の高祖に仕えた軍師。秦の始皇帝暗殺ためハンマー投げの力士に狙撃させたが失敗した(『史記』留侯世家)。○武陽 戦国燕の秦武陽のこと。荆軻とともに秦王暗殺に赴いたが、怖気づいて失態を演じた(『史記』刺客列伝)。李白「結客少場行」に「武陽死灰の人、安んぞ与に功を成す可けんや」と。○屠酤 ここでは魚屋と酒屋。○酣醺 酒宴を開くこと。(醺は宴と同じ。○抹額 はちまきを締める。○袴褶 馬にのるためのはかま。○四更 午前二時頃。○斧闌 屋敷の門を斧で打ち破る。○臥茵 しとね。○甘心 満足する。○慇懃 ねんごろに。○誰何(門番が)不審者の姓名などを問いただすこと

〔『史記』陳涉世家〕。○投標 書き付けを差し出す。○有司 担当の役人。大目付のこと。○進止唯命 身の処し方は命ぜられるままに従う。白居易の「固難集の重序」〔『白氏文集』卷六十〕に「進退唯だ命のままにす」と。○拘繫 とらえる。拘禁。○東武 江戸をいう。○官邸 幕府を指す。○四鎮 四つの大名家。下文の諸鎮も同じ。○嘩伝 騒ぎ伝える。○館待 屋敷での待遇。○荏苒 歳月がゆるゆると過ぎるさま。疊韻語。○盤水加劍 水を盛った盤（たらい）に劍を載せる。自決すること〔『漢書』賈誼伝、『孔子家語』五刑解〕。○君不見 樂府や歌行体に用いられる、相手に呼びかけ同意を求める表現。○參養 利益で誘惑する。○売降 利益を得て敵に降る。○投款 敵方に投降する。○了 最後までやり遂げる。まっとうする。○君 主君。○千古公論 永遠にかわらぬ正論。

※ちなみに、この詩は、大田南畝がその随筆『一話一言』卷三十一（『大田南畝全集』第十四巻）にも書き留めている。

【資料篇②】

「論野子賤復讎論」〔『文集』卷四〕

赤穂義士の舉、唯是爲舊主脩怨憫遺憤于地下而已。豈敢復讎云乎哉。五井子祥嘗駁太宰德夫之說、辨之詳矣。野子賤不審義士心曲、徒泥於世俗之說、以復讎議粗已甚矣。但其動兵都下、肆戮朝貴、此乃犯法之辜、義不可逃、故不肯即自殺、束身自歸于官以聽罪焉。亦以見故君平生敬上之志云。嗚呼感慨殺身易、從容就義難。斯其非精乎義者、而能若是乎。子賤乃曰、自伏讐法之罪。嗟夫義士之徒、何曾讐法乎。蓋叨々數百千言、率徒拾德夫餘唾耳。且初稱述佐藤直方持論、而至後乃曰、此豈世之道學先生所能知哉。夫直方道學之尤者、亦何其之言抵牾耶。余嘗閱永田善齋贈餘雜錄曰、君父以義見殺、孰得讐之。若或爲人所陷以死、忠臣孝子所不容已。此而可忍、則非人矣。昔唐開元中、御史楊汪誣殺嵩州都督張審素、審素二子琇瑋遂殺汪以

復讎、時張九齡爲相、欲矜宥之、李林甫不可、必欲正典刑。二子竟論死、民怜之、爲作哀誄、榜於衢路。君子小人自相水火、可以見其是非矣。此數十年前、似預爲赤穂之獄道、惜乎當時不見取用也。蓋夫赤穂君以罪死國亡、雖固所自取、吉良子之虐實致之。雖謂彼殺之可也。臣子於君父一也。義士之敵乃讐、若以復讎議、亦宜以是斷之。豈可謂其所讎非讎也。於戲義士之舉大節、炳焉如揭日月、忠烈之氣、凜々乎百世不可得而泯焉。復何容於論說哉。子賤之昧乎義也、眞所謂腐儒瞽說、固不足挂齒牙耳。然借經義以爲說而紫朱相奪、吾恐其或惑人、不可以不辨也。

（赤穂義士の舉、唯だ是れ旧主の爲に地下に怨を脩め遺憤を慰むる而已。豈に敢へて讎を復すると云はんや。五井子祥嘗て大宰德夫の説を駁し、之を辨ずること詳かなり矣。野子賤は義士の心曲を審かにせず、徒に世俗の説に泥み、復讎を以て議す、粗なること已に甚だし矣。但だ其の兵を都下に動かし、肆に朝貴を戮す。此れ乃ち法を犯すの辜、義として逃る可からず。故に肯へて即ち自殺せず、身を束ねて自ら官に歸し以て罪を聴く焉。亦た以て故君が平生上を敬するの志を見はすと云ふ。嗚呼感慨して身を殺すは易く、從容として義に就くは難し。斯れ其れ義に精なる者に非らずして、能く是の若くならん乎。子賤乃ち曰く、自ら讐法の罪に伏すと。嗟夫義士の徒、何ぞ曾て法に讐せん乎。蓋し叨々たる數百千言、率ね徒に德夫の餘唾を拾ふ耳。且つ初めに佐藤直方の持論を稱述し、而して後に至つて乃ち曰く、此れ豈に世の道學先生が能く知る所ならん哉と。夫れ直方は道學の尤なる者、亦た何ぞ其の言の抵牾するや。余嘗て永田善齋が贈餘雜録を閱するに曰く、君父義を以て殺さる、孰か之を讐するを得ん。若し或いは人の陥れて以て死する所と為れば、忠臣孝子の容れざるところ已。此れにして忍ぶ可くんば、則ち人に非ず矣。昔唐の開元中、御史楊汪、嵩州都督張審素を誣殺す、審素の二子瑋・琇遂に汪を殺して以て讎を復す。時に張九齡相たり、之を矜宥せんと欲す、李林甫可かず、必ず典刑を正さんと欲す、二子竟に論死す。民之を怜み、

為に哀誅を作り、衢路に榜す。君子小人自ら相水火たり、以て其の是非を見る可し矣。此れ数十年前、預め赤穂の獄の為に道ふに似たり。惜しい乎、當時取用せられざるなり。蓋し夫れ赤穂君罪を以て死し国亡ぶ、固より自ら取る所と雖も、吉良子の虐、実に之を致す。彼れ之を殺すと謂ふと雖も可なり。臣子の君父に於ける一なり。義士の乃の愼に敵る、若し復讐を以て議すれば、亦た宜しく是れを以て之を断ずべし。豈に其の讎とする所は讎に非ずと謂ふ可けんや。於戲義士の大節を挙げ、炳焉として日月を掲げるが如く、忠烈の氣、凜々乎として百世得て涙ぶ可からず焉。復た何ぞ論説を容れんや。子賤の義に味きや、真に所謂腐儒の警説、固より齒牙に挂くるに足らざる耳。然れども經義を借りて以て説を為して而して紫朱相奪ふ、吾れ其の或いは人を惑はさんことを恐れ、以て辨ぜざる可からざるなり

○五井子祥 五井蘭洲（字は子祥。元禄十年「一六九七」）「宝曆十二年「一七六二」」のこと。○大宰徳夫 太宰春台のこと。○心曲 心のくま。心底。古くは『詩経』秦風「小戎」に見える語。○東身 自らその身を縛る。○聴罪 罪に服する。古くは『書経』高宗彤日に見える表現。○感慨殺身易・従容就死難 『近思録』卷十、政事類に「感慨して身を殺すことは易く、従容として義に就くことは難し」と。これは、程明道（顥）の言葉。『程子遺書』卷十一に見える。〈感慨〉は、一時の激情。〈従容〉は、ゆったりとしたさま。○叨叨 多言のさま。うだうだ、くどくど。○佐藤直方 山崎闇斎の門人（慶安三年「一六五〇」）「享保四年「一七一九」」。「四十六士論」十五編がある。○砥牯 食い違ふ。○永田善斎 名は道慶、字は平安。林羅山の推挙により和歌山藩儒となる（慶長二年「一五九七」）「寛文四年「一六六四」」。○贈餘雜錄 慶安五年「一六二二」自序、承応二年「一六二四」刊。卷四の曾我兄弟の敵討ちを記した条に、張審素の二子、瑠・瑠の仇討ちの話を載せるが、「君父義を以て殺さる。……則ち人に非ざる已」というのは見あたらない。○開元中…『資治通鑑』卷

二一四、玄宗の開元二十三年に見える。その処罰をめぐつては「議する者多く言ふ、二子の父死せしは罪に非ず。稚年孝烈にして、能く父の讐を復せり。宜しく矜宥を加ふべしと。張九齡も亦た之を活さんと欲す。裴延卿・李林甫以為く、此の如くせば国法を壊らんと。上も亦た然りと為す」云々と。〈矜宥〉は、哀れんで無罪とする。○典刑 常刑。『書経』舜典に「象るに典刑を以てす」と。○論死 死刑に処する。

〈論〉は、罪を決定する意。○民愴之『資治通鑑』に「士民皆之を憐み、為に哀誅を作り、衢路に榜す」と。○水火 相容れないものの喩え。○臣子云々『白虎通徳論』卷二、誅伐に「子の父の為に讎を報ずることを得る者、臣子の君父に於ける其の義一なり」と。○敵愾『左氏伝』文公四年に「諸侯、王の愼する所に敵して其の功を献ず」と。

○炳焉 あきらかなさま。○警説 道理にはずれた説。『漢書』谷永伝に「皆警説の天を欺く者なり」と。○挂齒牙 取り上げて問題にする。○経義 経書およびその義理。○紫朱相奪『論語』陽貨篇に「紫の朱を奪ふを思む」と。〈紫朱〉は、正邪の意に用いる。

※この文章は『赤穂義人纂書』未収録。

【資料篇③】

松崎慊堂「澹所先生平井君墓表」（『慊堂全集』卷十）

勢之孤野、出「文學之彦」、曰平井君直藏、諱業、字可大。又字君敬、自號澹所。其先出「北畠庶族」。織田公入「勢」、降為「土豪」。數世曰「德兵衛義房」。生「嘉左衛門義景」。義景四子、季曰「文助義知」。義知娶「同郡贅氏」。是為「君考妣」。君幼有「至性」、四歲喪「母」、悲慕如「成人」。六歲就「塾師」受「句讀」。日兼「他生所」肄、作「詩輒超」等輩。伏水江村綬選「時人詩」、為「二集」行之、採「君十三歲詩數首」。年十九游「大府」、受「經關松窓修齡」、學「文平澤旭山元愷」。二子愛「其才辯」、升「諸林門」、入「昌平國學」、修「詩古文辭」。同舍生莫「能及者」。分「講仰高門」、聽者促「席忘」倦焉。寛政初、德音徵「諸老

宿。佐_二林子_一*、作_二新學政_一。君以_二布衣爲生員長_一。時大修_二文廟、益廣_二庠舍_一、比年試業、五載一大比。文教煥發、風動四方。君與有_二勞、前後三賜_二白銀_一獎之。十年、學政大成。諸學官皆用_二朝士_一、學生充以_二朝士子弟_一。君處士、例應罷去、特賜_二員長俸五年_一。君因應_二桑名城主之聘_一。城主傾_二心嚮_一之。享和壬戌、以_二位長柄奉行_一、永襲_二秩二百石_一。署_二君學職_一、謀行言聽。文化十年、從_二城主就國、建言修國校_一、凡立_二三館_一、曰進修、曰醫學、曰兵法。館各有_二長、君總督其事_一。桑名之士、翕然興起。當是時、大府諸封君、請_二君受經者六七十公_一。授業弟子益衆。城主使_二君遞年就國_一、以兩_二便其事_一。蓋異數也。十四年、將_二赴桑名_一、得_二氣疾_一、連_二三歲_一、遂不起。年五十九。以_二文政庚辰八月十九日壬寅_一、終_二大府小川町私宅_一。越四日乙巳、其子簡策等葬_二君四谷鹽町全勝寺之原_一。第二人、繼母森氏所_二出_一。一爲_二幕府先隊寄騎_一。一守_二菰野先廬_一。配大庭氏。先五歲沒。繼娶某氏。三子、簡襲_二君職_一、策以_二蔭爲騎_一。範未_二仕_一。二女、琴・歌、皆適_二士族_一。孫女一人。君性溫藉、然遇事有_二是非可否_一、不苟_二骫骳_一、學最遠_二四子書_一。善_二講說_一、語響亮。詩文據_二唐宋正派_一、能爲_二後生_一叩_二發管籥_一。平生屹屹排_二異教_一、而獨喜_二悉曇之說_一。著_二四書要解韻鏡指揮及詩文若干種_一。疾亟、嘆曰、吾事止_二是耶_一。不_二以未定之說誤_二後生_一、取_二諸著焚之_一。廉夫泣止之。僅留_二詩文三卷_一、曰_二澹所遺稿_一。子林子聞曰、可大譚_二經論_一文妙_二一時_一。吾久倚仗、吾門稱_二多桃李_一、如_二可大_一其霜松雪柏耶。今折矣。可惜。遣_二門生來治喪_一。諸封君賻贈營葬。城主命_二有司_一、就_二家致祭_一。復少_二君九歲_一、爲_二同門晚生_一。熟_二君言論風采_一、殆三十餘年。遺言曰、爲_二吾表墓_一。因掇_二廉夫狀_一、間以_二復所_一聞見_二者_一。序述如是。嘻君之德業、伸_二於知己_一、猶未_二大行於世_一。其遺書亦皆就_二燼_一。吾懼_二其久泯滅也_一。仍又效_二柳河東碣例_一、畧舉_二鉅人勝流知君最深者_一、以繫_二表後_一。使_二後之君子有_二所考焉_一。柴栗山邦彥、讚岐人。尾藤二洲肇*、伊豫人。岡田

寒泉恕・黑澤雪堂直、江戸人。古賀精里樸、肥前人。俱以_二宿儒_一徵_二列朝_一。立原翠軒萬、水戸人。市河子靜世寧、上毛人。菅太冲晉帥、備後人。大藏仲謙*、江戶人。大島無害維直、加賀人。廣瀬以寧典、大槻士繩準、陸奥人。皆邦國名士。

(勢)の孤野、文学の彦を出す。曰く平井君直藏、諱は業、字は可大。又の字は君敬、自号は澹所。其の先は北畠の庶族に出づ。織田公、勢に入り、降つて土豪と爲る。数世徳兵衛義房と曰ふ。嘉左衛門義景を生む。義景の四子、季を文助義知と曰ふ。義知、同郡の贅氏を娶る。是れ君が考妣たり。君幼にして至性有り、四歳にして母を喪ふ、悲慕すること成人の如し。六歳にして塾師に就きて句読を受く。日に他生の肄_二ふ所を兼ね_一、詩を作らば輒_二ち等輩を超ゆ_一。伏水の江村綬、時人の詩を選び、一集を爲して之を行ふ、君が十三歳の詩数首を採る。年十九にして大府に遊び、經を閑松窓修齡に受け、文を平沢旭山元愷に学ぶ。二子其の才辯を愛し、諸_二林門に_一升し、昌平国学に入らしむ。詩古文辭を修む。同舍生能く及ぶ者莫_二し_一。仰高門に分講し、聴く者席を促して倦むを忘る焉。寛政の初め、德音もて諸老宿を徵_二す_一。子林子を佐_二け_一、学政を作新す。君は布衣を以て生員の長と爲る。時に大いに文廟を修め、益々庠舍を広め、比年に業を試み、五載に一たび大比す。文教煥發して、四方を風動す。君与_二りて_一有り、前後三たび白銀を賜り之を獎す。十年、学政大いに成る。諸学官は皆朝士を用ひ、学生は充_二つるに朝士の子弟を以てす_一。君は処士にして、例として応_二に罷め去るべきに_一、特に員長の俸を賜ふこと五年。君因りて桑名城主の聘に應ず。城主心を傾けて之を嚮_二ふ_一。享和壬戌、長柄奉行に位するを以て、永く秩二百石を襲ふ。君を学職に署す、謀行はれ言聴かる。文化十年、城主に従ひて国に就き、建言して国校を修む。凡そ三館を立つ、曰く進修、曰く医学、曰く兵法。館に各々長有り、君は其の事を総督す。桑名の士、翕然として興起す。是の時に当り、大府の諸封君、君に請うて經を受くる者六七十公。授業の弟子益々衆_二し_一。城主、君をして通_二年国に_一就かしめ、以て其の事を両便す。蓋し異數なり。十四年、將_二に桑名に

赴かんとして、気疾を得、連ぬること三歳、遂に起たず。年五十九。文政庚辰八月十九日壬寅を以て、大府小川町の私宅に終はる。越えて四日乙巳、其の子、簡・策等、君を四谷塩町全勝寺の原に葬る。第二人、継母森氏の出だす所。一は幕府の先隊寄騎と為り、一は孤野の先廬を守る。配は大庭氏。先だつこと五歳にして没す。継娶某氏。三子、簡〔字は廉夫〕君が職を襲ひ、策は蔭を以て騎と為る。範は未だ仕へず。二女、琴・歌、皆士族に適ぐ。孫女一人。君は性温藉、然れども事に遇ふに是非可否有らば、苟も飢餓せず。学は最も四子書に達し。講説を善くし、語は響亮たり。詩文は唐宋の正派に拠り、能く後生の為に管籥を叩発す。平生硤砢として異教を排す、而れども独り悉曇の説を喜ぶ。四書要解・韻鏡指揮及び詩文若干種を著す。疾亟なり、嘆じて曰く、吾が事はこれに止まるか。未定の説を以て後生を誤らずと。諸著を取りて之を焚く。廉夫泣いて之を止む。僅かに詩文三巻を留む。澹所遺稿と曰ふ。子林子聞きて曰く、可大、経を譚じ文を論ずること一時に妙たり。吾れ久しく倚仗す。吾が門、桃李多しと称するも、可大の如きは其の霜松雪柏ならんか。今折れり矣、惜しむ可しと。門生をして来りて喪を治めしむ。諸封君賻贈して葬を営む。城主、有司に命じて、家に就きて祭を致す。復は君より少きこと九歳、同門の晩生為り。君が言論風采に熟すること、殆んど三十餘年。遺言に曰く、吾が為に墓に表せよと。因て廉夫の状を掇り、問ふるに復の聞する所の者を以てす。序述是の如し。噲、君の徳業は知己に伸ぶるも、猶ほ未だ大いに世に行はれず。其の遺書も亦た皆燼に就く。吾れ其の久しく泯滅するを懼るるなり。仍て又た柳河東の碣例に效ひ、略ほ鉅人勝流の君を知ること最も深き者を挙げて、以て表後に繋ぐ。後の君子をして考する所有らしむ焉。柴栗山邦彦、讃岐の人。尾藤二洲肇、伊豫の人。岡田寒泉恕・黒澤雪堂直、江戸の人。古賀精里樸、肥前の人。俱に宿儒を以て、徴されて朝に列す。立原翠軒万、水戸の人。市河子静世寧、上毛の人。菅太冲晋師、備後の人。大藏仲謙謙〔讓〕、江戸〔信濃〕の人。大島無害維直、加賀の人。広瀬以寧典・大槻士繩準、陸奥の人。皆邦国の

名士。

○文学彦 学問に優れた人物。○北畠 南北朝以後、伊勢国司・伊勢国守護となり、南勢を支配、戦国末に織田信長によって滅亡した。○至性 天賦のすぐれた品性。○考妣 亡くなった父母。『礼記』曲礼下に「生きては父と曰ひ母と曰ひ妻と曰ふ。死しては考と曰ひ妣と曰ひ嬪と曰ふ」と。○伏水 伏見と同じ。○江邨綬 江村北海（正徳四年〔一七一四〕～天明八年〔一七八八〕）。○十三歳云々 『日本詩選』および『続日本詩選』に平井澹所の名は見あたらない。訛伝であろう。○年十九 市河三陽『市河寛斎先生』に、澹所の長男簡が記した行状によつて「年二十にして此年三月四日伊勢を發して出府し関松隠の紹介で旭山の門に入り、翌天明二年更に昌平に入学せるもの」という。○大府 江戸。○関松窓 川越の人。本文中に既出。○平沢旭山 山城宇治の人。本文中に既出。○林門 平沢旭山の取次で天明二年（一七八二）六月朔日、林家に入塾。揖斐高ほか編『林家門人録』『升堂記』（都立中央図書館本）の翻刻と索引（『成蹊人文研究』第二号、平成六年）参照。なお、三村竹清『平井澹所』には林錦峰（明和二年〔一七六五〕～寛政五年〔一七九三〕）の門人になったという。○詩古文辞（辞）は、『事実文編』にはない。おそらく衍字。古文辞は、明・李于鱗らが提唱し、我が国では荻生徂徠がこれを鼓吹した。○仰高門 聖堂入口にある門。百姓町人を含む一般向けの公開講座が開かれた。○促席 座席を近づける。○德音 幕府の命令。もとは天子の言葉をいう。『漢書』董仲舒伝に「陛下德音を發し、明詔を下す」と。○諸老宿 天明八年に柴野栗山が御儒者となり、寛政二年には岡田寒泉、同三年には尾藤二洲が就任。同四年には古賀精里が経書講義を始め、同八年代官として転出した寒泉に代わって御儒者に就任した。『老宿』は、学徳すぐれた老儒者。○子林子 林述斎（明和六年〔一七六九〕～天保十四年〔一八四三〕）のこと。姓氏の上に冠した（子）は、門弟の師に対する敬称。なお、「佐三林子」、原文は訓点なし。また『事

実文編』は「徴諸老宿、佐子林子」と訓点を施す。○作新 刷新する。『書経』康誥に「天命に宅り、民を作新せよ」と。○布衣 庶人。無位無官の者。○生員長 都講をいう。三村「平井澹所」によれば、寛政三年（一七九一）のこと。○文廟 孔子を祀る大成殿。寛政八年に改修の議が起こり、同十一年に落成。〈文廟〉は、唐代、孔子に文宣王の称号をおくり、その廟を文宣王廟と称したが、その略称。○比年 毎年。○大比 試験を行う。もとは三年ごとに官吏の成績を考査すること（『周礼』地官・鄉大夫）。○文教 学問や教育による感化。古くは『尚書』禹貢に見える語。○煥發（成果が）輝やき現われる。○朝士 ここは幕臣。○桑名城主 松平下総守忠和（宝暦九年「一七三〇」）と享和二年「一八〇二」のこと。寛政十年（一七九八）澹所を聘して講書とした。○長柄奉行 槍奉行のこと。○翕然 一斉に起こるさま。○通年 毎年。○簡襲君職 『事実文編』は、〈簡〉字の下に〈字廉夫〉の三字がある。○温藉 度量があり、おだやか。○飢餓（迎合して）曲げること。晷韻語。○四子書 大学・中庸・論語・孟子の四書。○管籥 関鍵。○悉曇 梵語の学。○疾亟 病状が急に重くなる。○桃李 優れた門人。初唐の狄仁傑が則天武后に姚元崇はじめ優れた人材を推荐し、「天下の桃李、悉く公の門に在り」といわれたという（『資治通鑑』卷二百七、久視元年の条）。○霜松雪柏 松・柏（ヒノキの一種）は常緑樹で、冬も葉の色を変えない。○賻贈 喪主への贈りもの。香奠。○柳河東 中唐の柳宗元。河東（山西省）の人であるから、かく称する。その父、柳鎮の墓道に建てた「先の侍御史府君神道表」の裏面に「先君の石表の陰の先友記」を刻した（『柳河東集』卷十二）。○鉅人勝流 名だたる優れた人々。〈鉅人〉の語、韓愈「唐の故相権公墓碑」（『韓昌黎集』卷三十）に「天下愈々推して鉅人長徳と為す」と。○柴栗山邦彦 栗山は号。幕府の儒官（享保十九年「一八三四」）と文化四年「一八〇七」。○尾藤二洲肇 二洲は号。〈洲〉字の下〈肇〉字の上、おそらく〈考〉字を脱す。『事実文編』は〈孝肇〉に作る。

幕府の儒官（延享四年「一七四七」）と文化十年「一八一三」。○岡田寒泉恕 寒泉は号。幕府の儒官（宝永五年「一七四〇」）と文化十三年「一八一六」。○黒沢雪堂直 雪堂は号。昌平黌教授（宝暦八年「一七五八」）と文政七年「一八二四」。○古賀精里樓 精里は号。幕府の儒官（寛延三年「一七五〇」）と文化十四年「一八一七」。○徴列朝 『事実文編』は徴列朝と訓点。訓読はそれに従う。○立原翠軒萬翠軒は号。水戸藩儒（延享元年「一七四四」）と文政六年「一八二三」。○市河子靜世寧 号は寛斎。本文参照。○菅太冲晋帥 号は茶山。本文参照。○大藏仲謙謙 仲謙は字、号は龍河。柴野栗山の門人、儒医（宝暦七年「一七五七」）と弘化元年「一八四四」。名の〈謙〉字『事実文編』は〈讓〉に作り、〈江戸〉を〈信濃〉に作るが、その方がよい。○大島無害維直 無害は字。号は賢川。加賀藩儒（宝暦十二年「一七六二」）と天保九年「一八三八」。○広瀬以寧典 以寧は字、号は蒙斎。柴野栗山の門人。桑名藩儒（明和五年「一七六八」）と文政十二年「一八二九」。○大槻士繩準 士繩は字、号は平泉。古賀精里の門人。仙台藩儒（安永二年「一七七三」）と嘉永三年「一八五〇」。○邦国 諸国。※語釈で言及した以外にも、五弓雪窓『事実文編』卷五十四に収めるものとかなり異同がある。

【資料篇④】

「詩佛西遊編序」（『文集』卷二）

往余于役江戸、與詩佛相識。款曲莫逆、深悅其為人。時及瓜期、交一臂而失之、良可憾也。今茲戊寅之秋、詩佛西遊京師、因過我津城。留寓再閱月、余為左右之、周旋諸大夫之筵、交歡詩酒之間、益深悅其為人。蓋天資雅量、襟韻瀟灑、與人交真率磊落、毫無畦畛、好酒豪飲、大聲劇談。到處款洽、為爛漫之遊、人皆心醉焉。詩佛才名滿天下、三十年于茲。其與人酬和、衝口成咏、大小珠玉如噴、雖欠精鍊工夫、要為一世詩伯、名下果無虛士也。醉酣興至、好作墨竹、天

趣飄逸、風生雨灑、妙傳此君之神、專門畫手不能及也。又夙善草書、刻意孫虔禮、深得其風骨、長箋巨幅、信筆揮霍、雲烟撩亂、龍蛇飛動、令人爽然。其齡垂耳順、猶孜孜臨學、日課三百字、每必凌晨而起、卽旅游中未嘗有廢也。天假之年、當爲我草聖矣。於戲一人之身、奄擅三絕、可不謂風流人豪哉。夫邂逅相遇、償交臂而失之憾、快觀妙技、勝會罄歡、至今追懷其樂、尚在心目間也。京師書賈販其西遊詩什、以弘諸四方。詩佛旣歸江戶、千里馳書、需予序之、乃書交場所見、報莫逆之誼云。

(往)に余、江戸に于役するや、詩仏と相識る。深く其の人となりて悦ぶ。時に瓜期に及び、一臂を交へて之を失す、良に憾む可きなり。今茲戊寅の秋、詩仏西のかた京師に遊び、因て我が津城に過ぎる。留寓すること再閏月、余爲に之を左右し、諸大夫の筵に周旋す、交歡詩酒の間、益々深く其の人となりて悦ぶ。蓋し天資雅量、襟韻瀟灑、人と交はる真率磊落、毫も畦畛無し。酒を好んで豪飲、大声劇談す。到る処款洽、爛漫の遊を爲し、人皆心酔す焉。詩仏の才名天下に満つること、茲に三十年。其の人と酬和す、口を衝いて咏を成す。大小の珠玉噴くが如し。精鍊の工夫を欠くと雖も、要するに一世の詩伯たり。名下に果して虚士無きなり。酔ひ酣にして興至れば、好んで墨竹を作る。天趣飄逸、風生じ雨灑ぐ、妙に此の君の神を伝ふ。専門の画手も及ぶこと能はざるなり。又た夙に草書を善くす。意を孫虔禮に刻し、深く其の風骨を得、長箋巨幅、筆に信せて揮霍す。雲烟撩亂、龍蛇飛動す。人をして爽然たらしむ。其の齡耳順に垂んとして、猶ほ孜孜として臨學し、日に三百字を課し、毎に必ず晨を陵いで起き、即ち旅游中も未だ嘗て廢すること有らざるなり。天に年を假さば、當に我が草聖と爲るべし矣。於戲、一人の身にして、奄に三絶を擅にす、風流の人豪と謂はざる可けん哉。夫れ邂逅して相遇ふて、臂を交へて失するの憾みを償ふ。妙技を快觀し、勝會歡を罄す。今に至つて其の樂しみを追懷し、尚ほ心目の間に在るなり。京師の書賈、其の西遊の詩什を販して、以て諸を四方に弘む。詩仏既に江戸に帰る、

千里書を馳せ、予に之を序をすることを需む、乃ち交場の見る所を書して、以て莫逆の誼を述ぶと云ふ

○于役 『詩経』王風に「君子于役」がある。(于)は、行く意。○款曲 うちとけて親しくする。双声語。○莫逆 心に逆らうことなく気が合う。『莊子』太宗師篇に「四人相視て笑ひ、心に逆らふこと莫く、遂に相与に友と爲る」と。○瓜期 任期満了の時期。春秋斉の襄公が臣下を瓜の熟する頃に守備に遣わして明年瓜の実るときに交代させようといった故事(『左氏伝』莊公八年)に基づく。○交一臂而失 出会つてすぐに別れる。『莊子』田子方篇に「吾れ身を終ふるまで女と与にせんも、一臂を交へて之を失す、哀しまざる可けんや」と。○戊寅 文政元年(一八一八)。○再閏月 二か月。○左右 助ける。○周旋 とりもつ。世話する(『左氏伝』文公十八年)。双声語。○襟韻 胸のうち。○瀟灑 さっぱりとしたさま。双声語。○磊落 心が広く細かいことに拘らぬこと。双声語。○畦畛 分け隔て。北宋・黃庭堅「東坡墨戲の賦」に「其の胸中を視るに、畦畛無し」と。○劇談 快談。西晋・左思「蜀都の賦」(『文選』卷四)に「劇談戲論、腕を扼し掌を抵つ」と。○款洽 うちとける。双声語。○爛漫遊 はめをはずして遊ぶ。○詩伯 詩壇の領袖。○名下果無虚士也 閻立本が張僧繇の画を評した語(『唐語林』卷三)。○此君 竹のこと。晋の王徽之が竹を指して「何ぞ一日として此の君無かる可けんや」といった故事(『晋書』王徽之伝)による。○刻意 苦心して学ぶ。○孫虔禮 初唐の書家。名は虔禮(一説に名は過庭、字は虔禮)。草書を善くし、著に『書譜』がある(『書斷』卷下、『宣和書譜』卷十八)。○風骨 精神品格。○揮霍 すばやく手を動かす。双声語。○耳順 六十歳。『論語』為政篇の「六十にして耳順ふ」から出た語。○草聖 草書を極めた最高の達人。後漢の張芝は草聖と称せられ、盛唐の張旭は杜甫の七古「飲中八仙歌」に「張旭は三杯にして草聖と伝へられ、帽を脱ぎて頂を露す王公の前」とうたわれた。○三絶 詩・書・画の三つにわたって優れ

ていること。○風流人豪『二程外書』巻十一に「邵堯夫の詩に曰く、梧桐 月 懷中に向いて照らし、楊柳 風来りて面上に吹く」と。明道曰く、真に風流の人豪と」と。○勝会 盛会。○云 文章を締め括る表現。

※文政二年刊『西遊詩草』に「西遊詩草序」として載せるが、刊本の序では「詩仏」を「詩仏翁」に作るなど、少しく異同がある。また刊本には制作時を示す「文政紀元臘月」の文字がある。『西遊詩草』の刊本は、汲古書院刊『紀行日本漢詩第二巻』（平成三年）に佐野正巳氏の解題を附してその影印を収める。

* * *

前稿補訂

「津阪東陽」「寿壙誌銘」訳注稿（「文化情報学部紀要」第十四巻）

153頁上段3行目 （一七五六―一八二五）↓（一七五七―一八二五）

177頁上段1行目 天明四年（一七八三）↓天明三年（一七八三）

180頁上段12行目 山田三川の参考文献に追加・小出昌洋編『想古録

1・2』（平凡社東洋文庫、平成十年）

「覚書・津阪東陽とその交友（一）―安永・天明期の京都―」（「文化情報学部紀要」第十五巻）

165頁下段9行目 江戸帯在記↓江戸帯在記

166頁下段20行目 天明八年（一七八八）↓天明八年（一七八八）

166頁下段22行目 安永三年（一七七四）↓安永二年（一七七三）

166頁下段27行目 七律作↓七律

167頁上段7行目 安永八年（一七七八）↓安永八年（一七七九）

167頁上段13行目 東厓↓東厓

167頁上段23行目 安永九年（一七七九）↓安永九年（一七八〇）

168頁上段20行目 ○楚些招魂歌↓○楚些 招魂歌

168頁上段26行目 『詩経』の詩をいうか、↓『詩経』の詩をいうか、

168頁下段27行目 二十ほど後、↓二十年ほど後、

169頁下段9行目 偏狭な儒者↓偏狭な道学者

171頁上段10行目 安永四年（一七七四）↓安永四年（一七七五）

174頁下段25行目 ○皐比講席↓○皐比 講席

175頁下段2行目 ○伏櫪馬が↓○伏櫪 馬が

175頁下段3行目 ○老驥伏櫪に伏すも、↓○老驥櫪に伏すも、

176頁上段21行目 撰明・陳耀文↓明・陳耀文撰

178頁上段12行目 北宋の林逋「山園小梅二首」其一に↓北宋・林逋の

七律「山園小梅二首」其一（『瀛奎律髓』巻二十、

梅花類）に

178頁下段21行目 妙容姿↓容姿妙なり

178頁下段22行目 東山の↓東山に

179頁上段5行目 妻も↓嫁に来たばかりの妻も

181頁上段3行目 暮らしが立ち行かなり↓暮らしが立ち行なくなり

181頁下段10行目 論文の興↓文を論ずるの興

185頁上段9行目 論文の友↓文を論ずるの友

185頁上段22行目 ○山城 伊賀上野をさす。の下に追加。○論文友

杜甫の五律「高式顔に贈る」詩に「文を論ずる友を

失ひてより、空しく知る売酒の壚」と。

明治四十四年、再版）があるほか、森銃三「柴野栗山」（『森銃三著作集』

第八巻、人物篇八所収）も参照。

187頁下段7行目 に云ふ、↓に云う、

188頁上段9行目 寛政十四年↓寛政十年

195頁上段16行目 山崎闇斎派の学者↓山崎闇斎派の道学者

201頁上段17行目 ○関山の語訳の下に追加。○向 於と同じ。

202頁上段9行目 東陽より九歳上。↓東陽より八歳上。

202頁上段15行目 茶山の命名↓茶山の令名

204頁上段25行目 江戸帯在記↓江戸帯在記

211頁上段26行目 ○戸外之屨前掲↓○戸外之屨 前掲

213頁下段3行目 「古文孝経の序」↓「古文孝経の序」

なお、大典と六如との関係についての論考に堀川貴司「大典と六如——二人の僧侶詩人」(楠元六男編『江戸文学からの架橋——茶・書・美術・仏教』所収、竹林舎、平成二十一年)がある。

この他、204頁下段の【資料編①】に挙げた東陽の五古「古学・紹述両先生の暮を拝す」詩(『詩鈔』巻二)については、菅原在熙の序および清田龍川の天明丁未「七年」夏五と記した序を冠した源世昭(字は君哲、号は堯夫、輯の小本『皇都名勝詩集』巻下に訓点を附して収められているのに気づいた。ただし『詩鈔』とは文字に少し異なるので、それを示しておく。初句の〈起〉字を〈作〉に作るが、これは北宋・程頤の「春秋伝の序」(『二程全書』巻四十九、『近思録』巻三)に「夫子、周の末に当つて、聖人復た作らず、天に順ひ時に応ずるの治、復た有らざるを以て、是に於いて春秋を作り」云々というのに基づく表現。また『詩鈔』の第三・四句「嗟彼高頭巾穿鑿屬懸空」の十字がなく、第五句の〈勃窣陷理窟〉は〈理窟徒勃窣〉に、第九句の〈堂構〉は〈肯堂〉に、第十句の〈益彰隆〉の三字は〈愈益隆〉に、第十八句の〈瞻拜〉は〈展拜〉に、それぞれ作る。それから第二十一・二十二句の〈景慕情彌切對越感無窮〉の十字は〈隋夫堪興起爲感豈無感〉に作るが、〈隋〉は〈惰〉の訛字であろう。さらに第二十三句の〈碑銘〉は〈碑文〉に作る。

ちなみに、この『皇都名勝詩集』に採られているのは、時代的には石川丈山・釈元政に始まる江戸期の人々で総勢九十八。その名を順に見てゆくと、巖垣彦明・江村北海・頼千秋・端文伸・大江釋圭・清田儼叟・岡崎師古・伊藤君嶺・柚木太玄・皆川淇園・小栗光卿・清田龍川・太田玩鷗・釈六如・池大雅・大江伯祺・釈大典・小栗明卿・中井竹山・那波魯堂・香山適園・永田俊平・赤松滄洲・柴野栗山・葛子琴など東

陽と面識交流のあった詩人文人・儒者はほとんどすべて網羅されている。

「津阪東陽とその交友(一)」の誤記については、林田愼之助・高橋良行・杉下元明の各氏から懇切な御教示を得た。記して感謝する。

(二〇一六・一〇・一〇初稿)

(二〇一六・一二・一八補筆)

追記

再校を出した後、前稿で迂闊にも東陽の生年、宝暦七年「一七五七」を宝暦六年「一七五六」と誤って記していたことに気がついた。したがって、東陽が京都で交友した人物との年齢差に一年ずれが生じることになる。例えば、小栗明卿は六歳下、太田玩鷗は十歳上、巖垣龍溪は十六歳上となるなど。逐一、訂正する余裕がないので、ここに一言附しておく。

(二〇一七・二・三)

にのみや・としひろ／文化情報学部教授

E-mail: minomiyaya@sugiyama-u.ac.jp